香川県埋蔵文化財センター年報

平成 21 年度

2010.9

香川県埋蔵文化財センター

はじめに

香川県埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査及び研究を行うとともに、その保存と活用を図り、県民の文化的向上に資するため、昭和62年11月1日に設立されました。

平成21年度は、埋蔵文化財の発掘調査及び整理、報告書刊行、出土品の保管・管理、普及啓発事業、緊急雇用創出基金事業、讃岐国府跡探索事業などを実施しました。

発掘調査事業は、病院建設、県道整備、河川改修、県立学校移転などの事業に伴って、8遺跡で10,481㎡の発掘調査を実施しました。

整理・報告事業では、病院建設、県立学校新設などの事業に伴う2遺跡の出土品の整理と、県 道整備に係わる遺跡の報告書を刊行し、調査成果を公表しました。

普及啓発事業では、当センターの展示室で常設展を行う以外に、四国の埋蔵文化財センター合同の巡回展「続・発掘へんろ〜四国の旧石器・縄文時代〜」を始めとした特別展や、「埋蔵文化財発掘調査速報展」などの展示を行うとともに、出土品を地元で公開する「ふるさと展示」を県下各地で行いました。また、広報誌「いにしえの讃岐」や研究紀要の刊行以外に、学校での出前授業や考古学体験講座を通じて、埋蔵文化財の保護意識の普及・啓発に努めました。

緊急雇用創出基金事業では、当センター設立以前に調査された遺跡の出土品の分類作業などを 行いました。また、遺跡の記録写真をデジタル化して保存性を高め、そのデータをホームページ で一般に公開することを前提にした、検索システムを構築しました。

今年度から新たに開始した事業として、讃岐国府跡探索事業があります。この事業は従来不明確であった、讃岐国府の実態を明らかすることで地域の活性化を目指した事業です。4年計画の初年度に当る今年度は、最有力候補地である坂出市府中町周辺に的を絞り、ボランティア調査員を中心にして地名調査、地形調査、発掘調査を実施しました。また、讃岐国府の解説書として「讃岐国府跡を探る」を刊行しました。

最後になりましたが事業の実施に際して、ご指導、ご協力をいただいた関係各位にお礼を申し上げますとともに、当センターの運営につきましては、今後とも皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げ、ごあいさつとします。

平成 22 年 9 月

香川県埋蔵文化財センター 所 長 大山真充

目 次

Ι	組織	・施設・決算
	1.	香川県埋蔵文化財センターの組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	2.	施設の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	3.	決算の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
II	事業	概要
	1.	埋蔵文化財調査事業
		事業概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
		旧練兵場遺跡(善通寺養護学校)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
		津森位遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
		飯野・東二瓦礫遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
		西白方瓦谷遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
		飯山北土居遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1;
		旧練兵場遺跡(善通寺病院)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1;
		石田高校校庭内遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1′
		多肥北原遺跡‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 19
		多肥北原西遺跡
	2.	普及・啓発事業
		1 展示
		2 現地説明会・地元説明会・・・・・・・・・・・・2-
		3 講師の派遣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
		4 坂出市立府中小学校との連携授業 (よろこび学習)・・・・・・・・20
		5 夏休み子どもミュージアム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
		6 考古学講座
		7 文化ボランティア活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
		8 四国新聞への連載・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
		9 資料の貸出・利用・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
		10 職場体験学習・インターンシップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
		11 刊行物
		12 ホームページ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2′
	3.	緊急雇用創出基金事業
		1 学校及び地域等における出土品の活用推進事業・・・・・・・・・ 28
		2 埋蔵文化財資料のデジタル化推進事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
	4.	讃岐国府跡探索事業 · · · · · · · · 36
Ш	潜岐	国府跡探索事業に伴う調査報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

挿図目次

第1図 発掘調査遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・4	第14図 石田高校校庭内遺跡 遺構配置図・・・・・・18
旧練兵場遺跡(善通寺養護学校)	多肥北原遺跡
第2図 調査区位置図・・・・・・5	第15図 遺跡位置図(1/25,000) · · · · · · 19
津森位遺跡	第16図 多肥北原遺跡 遺構配置図20
第3図 遺跡位置図(1/25,000)7	多肥北原西遺跡
飯野·東二瓦礫遺跡	第17図 遺跡位置図(1/25,000) · · · · · · 21
第4図 遺跡位置図(1/25,000)9	第18図 多肥北原西遺跡 遺構配置図・・・・・22
第5図 古墳時代~平安時代 遺構配置図10	讃岐国府跡探索事業
西白方瓦谷遺跡	第19回 讃岐国府跡調査区位置図 · · · · · · 33
第6図 遺跡位置図(1/25,000)11	第20図 府中町本村周辺の地名分布図・・・・・・36
第7図 西白方瓦谷遺跡 遺構配置図11	第21図 地形分類予察図 · · · · · · · 38
飯山北土居遺跡	第22図 調査区壁面土層断面図・・・・・・・40
第8図 遺跡位置図(1/25,000)13	第23図 遺構平面図 1 · · · · · · · 41
第9図 飯山北土居遺跡付近の空中写真	第24図 遺構平面図 2 · · · · · · 42
(国土地理院1962年撮影)・・・・・・・・・・・・14	第25図 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第10図 調査区と検出遺構の概要図・・・・・・14	第26図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図1・・・・・・51
旧練兵場遺跡(善通寺病院)	第27図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図2・・・・・・53
第11図 遺跡位置図(1/25,000)15	第28図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図3・・・・・・55
第12図 旧練兵場遺跡 遺構配置図・・・・・・16	第29図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図4・・・・・・57
石田高校校庭内遺跡	第30図 田村久雄氏所蔵遺物実測図・・・・・59
第13図 遺跡位置図(1/25,000)17	第31図 鎌田共済会郷土資料館所蔵遺物実測図・・・・・60
写真	□ \h/\tau
<u> </u>	日子人
旧練兵場遺跡(善通寺養護学校)	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・16
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1)・・・・・・5	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・・16 写真18 重複する竪穴住居跡(北東から)・・・・・16
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) ・・・・・・5 写真 2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) ・・・・・5	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・・16 写真18 重複する竪穴住居跡(北東から)・・・・・16 石田高校校庭内遺跡
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真 2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真 3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6	写真17土坑墓(西から)・・・・・・・16写真18重複する竪穴住居跡(北東から)・・・・16石田高校校庭内遺跡写真19調査区西半全景(南から)・・・・17
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	写真17土坑墓(西から)・・・・・・16写真18重複する竪穴住居跡(北東から)・・・16石田高校校庭内遺跡17写真19調査区西半全景(南から)・・・・17写真20調査区東半全景(南から)・・・・17写真21銅鏃出土状況・・・・18
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) ・・5 写真 2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) ・・5 写真 3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) ・・6 写真 4 古代~中世の坪界の溝状遺構・・・6 写真 5 調査区全景 (南東から)・・・・6 写真 6 調査区全景 (南から)・・・・・6	写真17土坑墓(西から)・・・・・16写真18重複する竪穴住居跡(北東から)・・・16石田高校校庭内遺跡17写真19調査区西半全景(南から)・・・・17写真20調査区東半全景(南から)・・・・17写真21銅鏃出土状況・・・・18写真22井戸跡(南から)・・・・18
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真 2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真 3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真 4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真 5 調査区全景 (南東から) 6 写真 6 調査区全景 (南から) 6	写真17土坑墓(西から)・・・・・・16写真18重複する竪穴住居跡(北東から)・・・16石田高校校庭内遺跡17写真19調査区西半全景(南から)・・・・17写真20調査区東半全景(南から)・・・・17写真21銅鏃出土状況・・・・18写真22井戸跡(南から)・・・・18写真23SK05(西から)・・・・18
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真 2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真 3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真 4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真 5 調査区全景 (南東から) 6 写真 6 調査区全景 (南から) 6 津森位遺跡 写真 7 1区全景 (西から) 7	写真17土坑墓(西から)・・・・・16写真18重複する竪穴住居跡(北東から)・・・16石田高校校庭内遺跡写真19調査区西半全景(南から)・・・・17写真20調査区東半全景(南から)・・・・17写真21銅鏃出土状況・・・・・1818写真22井戸跡(南から)・・・・18写真23SK05(西から)・・・・18多肥北原遺跡18
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真 2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真 3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真 4 古代~中世の坪界の溝状遺構・6 写真 5 調査区全景(南東から) 6 写真 6 調査区全景(南から)・6 津森位遺跡 写真 7 1区全景(西から)・7 写真 8 2区全景(北から)・8	写真17土坑墓(西から)16写真18重複する竪穴住居跡(北東から)16石田高校校庭内遺跡17写真19調査区西半全景(南から)17写真20調査区東半全景(南から)17写真21銅鏃出土状況18写真22井戸跡(南から)18写真23SK05(西から)18多肥北原遺跡5真241区全景(東から)19
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真5 調査区全景 (南東から) 6 写真6 調査区全景 (南から) 6 津森位遺跡 写真7 1区全景 (西から) 7 写真8 2区全景 (北から) 8 写真9 4区全景 (南から) 8	写真17土坑墓(西から)・・・・・16写真18重複する竪穴住居跡(北東から)・・・16石田高校校庭内遺跡写真19調査区西半全景(南から)・・・17写真20調査区東半全景(南から)・・・17写真21銅鏃出土状況・・・・18写真22井戸跡(南から)・・・・18写真23SK05(西から)・・・・18多肥北原遺跡写真241区全景(東から)・・・・19写真25SH01竈出土土器(東から)・・・・20
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真5 調査区全景 (南東から) 6 写真6 調査区全景 (南から) 6 津森位遺跡 写真7 1区全景 (西から) 7 写真8 2区全景 (北から) 8 写真9 4区全景 (南から) 8	写真17 土坑墓(西から)・・・・・16 写真18 重複する竪穴住居跡(北東から)・・・16 石田高校校庭内遺跡 写真19 房真19 調査区西半全景(南から)・・・・17 写真20 調査区東半全景(南から)・・・・17 写真21 銅鏃出土状況・・・・・18 写真22 井戸跡(南から)・・・・・18 写真23 SK05(西から)・・・・・18 多肥北原遺跡 写真24 1区全景(東から)・・・・19 写真25 SH01竈出土土器(東から)・・・・20 写真26 2区全景(南から)・・・・20
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) ・5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) ・5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) ・6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構・・6 写真5 調査区全景(南東から)・・6 写真6 調査区全景(南から)・・・6 津森位遺跡 写真7 1区全景(西から)・・・7 写真8 2区全景(北から)・・・8 写真9 4区全景(南から)・・・8 飯野・東二瓦礫遺跡 写真10 古墳時代水田跡・・・・10	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・16 写真18 重複する竪穴住居跡(北東から)・・・・16 石田高校校庭内遺跡 17 写真19 調査区西半全景(南から)・・・・・17 写真20 調査区東半全景(南から)・・・・・17 写真21 銅鏃出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真5 調査区全景 (南東から) 6 写真6 調査区全景 (南から) 6 津森位遺跡 写真7 1区全景 (西から) 7 写真8 2区全景 (北から) 8 写真9 4区全景 (南から) 8 飯野・東二瓦礫遺跡 写真10 古墳時代水田跡 10 写真11 古墳時代溝状遺構 10	写真17 土坑墓(西から)・・・・・16 写真18 重複する竪穴住居跡(北東から)・・・16 石田高校校庭内遺跡 写真19 房真19 調査区西半全景(南から)・・・・17 写真20 調査区東半全景(南から)・・・・17 写真21 銅鏃出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真5 調査区全景(南東から) 6 写真6 調査区全景(南から) 6 津森位遺跡 写真7 1区全景(西から) 7 写真8 2区全景(北から) 8 写真9 4区全景(南から) 8 写真9 4区全景(南から) 8 毎 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	写真17 土坑墓(西から) 16 写真18 重複する竪穴住居跡(北東から) 16 石田高校校庭内遺跡 5真19 調査区西半全景(南から) 17 写真20 調査区東半全景(南から) 17 写真21 銅鏃出土状況 18 写真22 井戸跡(南から) 18 写真23 SK05(西から) 18 多肥北原遺跡 写真24 1区全景(東から) 19 写真25 SH01竈出土土器(東から) 20 写真26 2区全景(南から) 20 写真27 SH11竈(南から) 20 写真28 井戸跡(南から) 20 多肥北原西遺跡
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真5 調査区全景 (南東から) 6 写真6 調査区全景 (南から) 6 津森位遺跡 写真7 1区全景 (西から) 7 写真8 2区全景 (北から) 8 写真9 4区全景 (南から) 8 飯野・東二瓦礫遺跡 写真10 古墳時代水田跡 10 写真11 古墳時代本田跡 10 平安時代~室町時代溝状遺構 10 西白方瓦谷遺跡	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真5 調査区全景 (南東から) 6 写真6 調査区全景 (南東から) 7 写真8 2区全景 (西から) 7 写真8 2区全景 (地から) 8 写真9 4区全景 (南から) 8 毎野・東二瓦礫遺跡 写真10 古墳時代水田跡 10 平安時代~室町時代溝状遺構 10 西白方瓦谷遺跡 写真12 調査地全景 12	写真17 土坑墓(西から)・・・・・16 写真18 重複する竪穴住居跡(北東から)・・・16 石田高校校庭内遺跡 写真19 房真19 調査区西半全景(南から)・・・・17 写真20 調査区東半全景(南から)・・・・17 写真21 銅鏃出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真 2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真 3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真 4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真 5 調査区全景 (南東から) 6 写真 6 調査区全景 (南から) 7 写真 8 2区全景 (西から) 7 写真 8 2区全景 (地から) 8 写真 9 4区全景 (南から) 8 写真 1 古墳時代水田跡 10 写真 11 古墳時代水田跡 10 写真 11 古墳時代溝状遺構 10 平安時代~室町時代溝状遺構 10 西白方瓦谷遺跡 写真 12 調査地全景 12 写真 13 弥生時代竪穴住居跡 12	写真17 土坑墓(西から) 16 写真18 重複する竪穴住居跡(北東から) 16 石田高校校庭内遺跡 5真19 調査区西半全景(南から) 17 写真20 調査区東半全景(南から) 17 写真21 銅鏃出土状況 18 写真22 井戸跡(南から) 18 写真23 SK05(西から) 18 多肥北原遺跡 写真24 1 区全景(東から) 19 写真25 SH01竈出土土器(東から) 20 写真26 2 区全景(南から) 20 写真27 SH11竈(南から) 20 写真28 井戸跡(南から) 20 多肥北原西遺跡 5真29 1 区掘立柱建物跡(南から) 21 写真30 2 区全景(南から) 21 写真31 土師器出土土坑(西から) 22
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真5 調査区全景 (南東から) 6 写真6 調査区全景 (南東から) 7 写真8 2区全景 (西から) 7 写真8 2区全景 (地から) 8 写真9 4区全景 (南から) 8 毎野・東二瓦礫遺跡 7 写真10 古墳時代水田跡 10 写真11 古墳時代溝状遺構 10 平安時代~室町時代溝状遺構 10 西白方瓦谷遺跡 7 写真12 調査地全景 12 写真13 弥生時代竪穴住居跡 12	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真5 調査区全景 (南東から) 6 写真6 調査区全景 (南から) 7 写真8 2区全景 (西から) 7 写真8 2区全景 (北から) 8 写真9 4区全景 (南から) 8 毎野・東二瓦礫遺跡 7 写真10 古墳時代水田跡 10 写真11 古墳時代溝状遺構 10 平安時代~室町時代溝状遺構 10 西白方瓦谷遺跡 7 写真12 調査地全景 12 写真13 弥生時代竪穴住居跡 12 写真14 弥生時代竪穴住居跡 12	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真 1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真 2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真 3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真 4 古代~中世の坪界の溝状遺構・6 写真 5 調査区全景 (南東から) 6 写真 6 調査区全景 (南から) 7 写真 8 2区全景 (西から) 7 写真 8 2区全景 (北から) 8 写真 9 4区全景 (南から) 8 写真 1 古墳時代水田跡・10 写真 11 古墳時代水田跡・10 写真 11 古墳時代溝状遺構・10 平安時代~室町時代溝状遺構・10 西白方瓦谷遺跡 写真 12 調査地全景・12 写真 13 弥生時代竪穴住居跡・12 写真 14 弥生時代竪穴住居跡・12 飯山北土居遺跡 写真 15 東区 調査完掘状況 (西から) 13	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
旧練兵場遺跡 (善通寺養護学校) 写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1) 5 写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2) 5 写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3) 6 写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構 6 写真5 調査区全景 (南東から) 6 写真6 調査区全景 (南から) 7 写真8 2区全景 (西から) 7 写真8 2区全景 (北から) 8 写真9 4区全景 (南から) 8 毎野・東二瓦礫遺跡 7 写真10 古墳時代水田跡 10 写真11 古墳時代溝状遺構 10 平安時代~室町時代溝状遺構 10 西白方瓦谷遺跡 7 写真12 調査地全景 12 写真13 弥生時代竪穴住居跡 12 写真14 弥生時代竪穴住居跡 12	写真17 土坑墓(西から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

写真36	写真の選択作業・・・・・・29	讃岐国府	 守跡探索事業
写真37	写真のスキャニング作業・・・・・・29	写真39	ミステリーハンター(ボランティア調査員)による
写真38	資料管理システムのトップ画面・・・・・・29		調査風景・・・・・・38
	表丨] 次	
第1表	職員一覧・・・・・・・・1	第17表	考古学講座一覧 · · · · · · · · 26
第2表	発掘調査決算······2	第18表	資料貸出・利用一覧(数字は件数)・・・・・・27
第3表	整理·報告決算······2	第19表	職場体験学習・インターンシップ一覧・・・・・・27
第4表	管理運営費等決算2	讃岐国府	 守跡探索事業
第5表	発掘調査遺跡一覧3	第20表	讃岐国府跡調査区一覧表34
第6表	遺跡の概要一覧・・・・・・・・・・・・・・・・4	第21表	出土土器等観察表 1 · · · · · · · · 45
第7表	整理·報告遺跡一覧······4	第22表	出土土器等観察表 2 · · · · · · · · · 46
第8表	刊行報告書一覧4	第23表	出土土器等観察表347
第9表	展示一覧23	第24表	出土土錘観察表47
第10表	入館者数一覧23	第25表	関連調査資料·土器等観察表 1 · · · · · · · · · 61
第11表	センター外展示一覧23	第26表	関連調査資料·土器等観察表 2 · · · · · · · · · 62
第12表	現地説明会・地元説明会一覧・・・・・・24	第27表	関連調査資料·古代軒丸瓦観察表1 · · · · · · · · 62
第13表	体験講座への講師派遣一覧・・・・・・・24	第28表	関連調査資料·古代軒丸瓦観察表 2 · · · · · · · · 63
第14表	学校への講師派遣一覧・・・・・・25	第29表	関連調査資料・中世軒丸瓦観察表・・・・・・63
第15表	講演等への講師派遣一覧・・・・・・25	第30表	関連調査資料·軒平瓦観察表·····63
第16表	坂出市立府中小学校との連携事業一覧・・・・・26	第31表	関連調査資料·銅銭観察表·····63
	, ,		
	写真図	版目	次
讃岐国府	存跡探索事業	図版4	遺構
図版1	航空写真	南谷り	こ残る掘割状の平坦地地形(西より)
讃岐	国府跡付近空中写真	SP103	遺物出土状況(南より)
(上	が北、国土地理院1962年撮影)	SK02:	遺物出土状況(南より)
図版 2	遺構	SP083	遺物出土状況(北より)
調査は	地遠景(南東より)	現地記	兑明会風景
第1章	貴構面全景(西より)	図版5	土器·陶磁器
図版3	遺構	9	25 26 32 40 50 58
第3者	貴権而全暑(西より)		

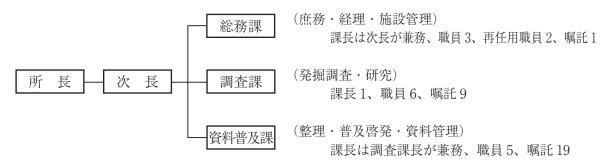
第4遺構面全景(東より)

地図は国土地理院地形図を使用しました。

I 組織・施設・決算

1. 香川県埋蔵文化財センターの組織

(1)組 織



(2)職員

所 属	職名	氏 名
	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	大 山 真 充
	次 長	深谷右
	課 長(事務取扱)	深谷右
	副主幹	林 文 夫
	主 任	宮田 久美子
総 務 課	主 任	古 市 和 子
	主 任	広瀬 健一
	主 任	安 藤 正
	嘱託	吉 村 高 志
	課長	西 岡 達 哉
	主任文化財専門員	北山 健一郎
	文化財専門員	森 下 友 子
	文化財専門員	木 下 晴 一
	文化財専門員	山下 平重
調査課	文化財専門員	蔵 本 晋 司
	文化財専門員	松 本 和 彦
	嘱託	砂川 哲夫
	嘱託	木全 加珠美
	嘱託	今井 千佳子
	嘱 託	藤井 菜穂子
	課 長(事務取扱)	西 岡 達 哉
	主任文化財専門員	西村 尋文
資料普及課	主任文化財専門員	森 下 英 治
貝們百及詠	文化財専門員	宮 崎 哲 治
	文化財専門員	信 里 芳 紀
	文化財専門員	乗 松 真 也

第1表 職員一覧

2. 施設の概要

(1) 所 在 地 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

(2) 敷地面積 11,049.23㎡

(3) 建物構造・延床面積

①本	館	鉄筋コンクリート造・2階建	1,362.23 m²
		(一部鉄骨造・平屋建)	
②分	館	鉄骨造・2階建	337.35 m²
③第1収	以蔵庫	鉄骨造・2階建	1,525.32 m²
④第2切	以蔵庫	鉄骨造・3階建	2,040.33 m²
⑤車	庫	鉄骨造・平屋建	29.97 m²
⑥自転車	置場	鉄骨造・平屋建	25.00 m²

3. 決算の状況

(単位:円)

 (単位:円)

 夏因者
 遺跡名
 決算

原因者	遺跡名	決算
	多肥北原西遺跡	6,279,924
	多肥北原遺跡	17,962,110
道路課	津森位遺跡	18,940,660
	飯山北土居遺跡	4,241,604
	西白方瓦谷遺跡	5,148,515
河川砂防課	飯野・東二瓦礫遺跡	21,967,736
高校教育課	石田高校校庭内遺跡	5,281,508
特別支援教育課	旧練兵場遺跡	15,138,149
善通寺病院	旧練兵場遺跡	46,255,390
合	計	141,215,596

第2表 発掘調査決算

原因者	遺跡名	決算
善通寺病院	旧練兵場遺跡	104,160,000
(国立病院機構本部)		
高校教育課	鹿伏・中所遺跡	13,107,534
道路課	津森位遺跡	3,245,274
但好味	高屋条里遺跡	1,487,258
合	計	122,000,066

第3表 整理・報告決算

(単位:円)

		(単位・白)
	管理運営費	6,846,861
	職員給与費(※)	128,415,913
管理運営費等	讃岐国府跡	2,000,152
	探索事業	2,000,132
	小計	137,262,926
	埋蔵文化財資料	8,085,000
緊急雇用	のデジタル化推進	0,000,000
新	学校及び地域等におけ	4,858,973
2 別 東 尹 未	る出土品の活用推進	4,000,970
	小計	12,943,973
合	計	150,206,899

※受託事業分¥55,663,897 を再掲

第4表 管理運営費等決算

Ⅱ 事業概要

1. 埋蔵文化財調査事業

事業概要

調査課は、3班体制で県道整備、河川改修、善通寺病院統合等の8遺跡の発掘調査を行い、資料普及課は、4班体制で善通寺病院統合及び高校建設の2遺跡の整理と、県道整備の2遺跡の報告を行った。

発掘調査では、県道太田上町志度線建設に伴う調査を継続的に実施したことや、平成17年度 以降中断していた善通寺病院統合事業に伴う旧練兵場遺跡の調査を再開したこと等が特筆でき る。

整理・報告は、引き続き善通寺病院統合事業に伴う旧練兵場遺跡の整理が中心となり、3班体制で実施した。

遺物実測について、専門業者に委託したことが特筆できる。

原因者	事業名	遺跡名	所在地	調査面積(m²)	調査期間
	太田上町志度線建設	多肥北原西遺跡	高松市多肥上町	900	2月~3月
		多肥北原遺跡	高松市多肥上町	2,086	8月~1月
道路課	多度津丸亀線建設	津 森 位 遺 跡	丸亀市津森町	2,449	6月~10月
	国道43号建設	飯山北土居遺跡	丸亀市飯山町	258	12月
	丸亀詫間豊浜線建設	西白方瓦谷遺跡	仲多度郡多度津町	247	10月~11月
河川砂防課	赤 山 川 改 修	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町	2,981	4月~9月
高校教育課	石田高校改築	石田高校校庭内遺跡	さぬき市寒川町	160	6月~7月
特別支援教育課	善通寺養護学校移転	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	560	4月~5月
善通寺病院	善通寺病院統合	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	840	11月~3月
	合	計		10,481	

第5表 発掘調査遺跡一覧

遺	跡	名	遺跡の概要	主な遺構・遺物
多肥	北原西遺	跡	古墳時代の集落跡。	古墳時代の掘立柱建物跡。 土師器、須恵器、瓦、耳環。
多肥	北原遺	跡	古墳時代の集落跡。	古墳時代の竈付き竪穴住居跡。 土師器、須恵器、耳環。
津和	系 位 遺	跡	弥生時代及び平安時代の水路跡。 室町時代から江戸時代にかけて の集落跡。	弥生時代及び平安時代の溝状遺構。 室町時代から江戸時代にかけての井戸跡。 室町時代から江戸時代にかけての集落跡。 弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、曲物。
飯山	北土居遺	跡	室町時代の城館跡。	室町時代の溝状遺構。 土師質土器。

西白方瓦谷遺跡	弥生時代の集落跡。	弥生時代の竪穴住居跡。 弥生土器。	
飯野・東二瓦礫遺跡	弥生時代の河川跡。 古墳時代の水田跡。	弥生時代の河川跡。古墳時代の水田跡。弥生土器、石器、土師器、須恵器、帯金具。	
石田高校校庭内遺跡	弥生時代から古墳時代にかけて の集落跡。 鎌倉時代の集落跡。	弥生時代から古墳時代にかけての溝状遺構。 鎌倉時代の柱穴跡。 弥生土器、銅鏃、土師器、須恵器。	
旧練兵場遺跡	弥生時代から古墳時代にかけて の集落跡。 古代から中世にかけての集落跡。	弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡 群、掘立柱建物跡群。 古代から中世にかけての溝状遺構、柱穴跡。 弥生土器、石器・石製品、土師器、須恵器。	

第6表 遺跡の概要一覧

原因者	遺跡名	所在地	整理期間
善通寺病院 (国立病院機構本部)	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	4月~3月
高校教育課	鹿伏・中所遺跡	木田郡三木町	4月~3月
道路課	津森位遺跡	丸亀市津森町	平成 20 年度
道路課	高屋条里遺跡	観音寺市高屋町	平成 20 年度

第7表 整理・報告遺跡一覧

書 名

県道丸亀詫間豊浜線(観音寺工区)及び県道多度津丸亀線(丸亀工区)緊急地方道路整備工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告 高屋条里遺跡・津森位遺跡

第8表 刊行報告書一覧



第1図 発掘調査遺跡位置図

きゅうれんぺいじょうい せき 旧練兵場遺跡(善通寺養護学校)

善通寺養護学校移転に伴う平成21年度の旧練兵場遺跡の調査は、平成20年度の北側に隣接する区画において実施した。調査の結果、弥生時代から中世にかけての幅広い時代の遺構を確認した。

弥生時代の主な遺構としては、竪穴住居跡や土坑、 溝状遺構がある。検出した竪穴住居跡は概ね、弥生時 代後期から終末期のもので、昨年度の調査区にまたが るものも検出している。平面プランには五角形のもの と方形のものとがあり、いずれも床面にはベッド状遺 構を有する。五角形を呈する竪穴住居跡のベッド状遺 構上面からは、刀子と考えられる鉄製品が出土した。 東側では、昨年度の調査区にまたがる竪穴住居跡から、 数点のガラス小玉も出土している。

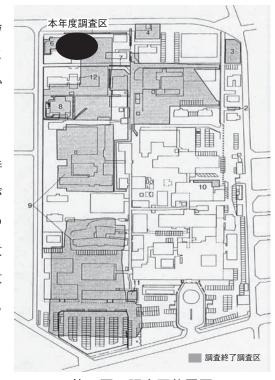
土坑には、甕1点が完形のまま出土したものや、土

器片を大量に含む廃棄土坑と考えられるも のがある。

溝状遺構は数条検出しているが、このうち、調査区東端で検出した溝状遺構は、調査区内で弧状を呈し、そのまま調査区外へ延びている。溝状遺構の最下層からは弥生時代前期の土器片が出土しており、溝状遺構の開削時期は同時期に求められる。弧状を呈する内部には、土坑等の遺構は検出されなかったことから、この溝状遺構の性格は現時点では不明である。

また、昨年度の調査において、多く見つかっている弥生時代中期後半の竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、今回の調査では検出されず、当該時期にはこの近辺は集落域としては機能していなかったものと考えられる。

また、確認した竪穴住居跡の棟数は、昨



第2図 調査区位置図



写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1)

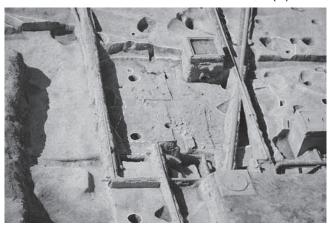


写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡 (2)

年度までの検出数に比べると少なく、さらに、今年度調査区の北東部分では、全く検 出されなかったことから、今回の調査区の 北東部分が旧練兵場遺跡の集落跡の北東端 である可能性が高いと考えられる。

古墳時代の遺構は、概して少ない。溝状 遺構などがわずかに検出されたに過ぎない。 溝状遺構は調査区を斜めに横切るかたちで 検出したが、遺物が少なく、詳細な時期の 決定には至っていない。しかしながら、弥 生時代後期の竪穴住居跡の埋土上面で検出 したことと、埋土中よりわずかに須恵器が 出土したこと等から、古墳時代に属するも のと考えている。

古代以降の遺構としては、調査区の西側で検出した大型の溝状遺構がある。幅3m、深さ2mと規模も大きい。いわゆる条里地割の南北方向に合致する溝状遺構であり、



写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡 (3)



写真4 古代~中世の坪界の溝状遺構

条里の坪界線に当る溝状遺構でもある。最上層からは、鎌倉時代頃の遺物が出土していることから、最終埋没時期は、そこに求められる。最下層からは、古代の範疇で捉えられる須恵器等が出土していることから、開削時期は古代と考えられる。また、埋土中から混入と考えられるが、銅鏃が1点出土している。

今年度の調査は、昨年度の調査区の隣接地であり、面積も狭小ではあるものの、弥生時代後期頃の集落の北東端が確認されたこと、北側には弥生時代中期の掘立柱建物跡は分布しないこと等、 今後の旧練兵場遺跡を考える上で重要な知見が得られた。



写真5 調査区全景(南東から)



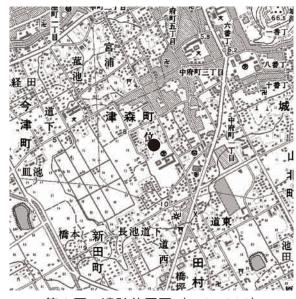
写真6 調査区全景(南から)

つのもりくらいいせき津森位遺跡

調査対象地が幅 $16 \, \mathrm{m}$ 、延長約 $150 \, \mathrm{m}$ にわたるため、東から順に $1 \sim 4 \, \mathrm{E}$ に分割して調査を行った。このうち、 $1 \sim 3 \, \mathrm{E}$ 医は連続するが、 $3 \, \mathrm{E}$ と $4 \, \mathrm{E}$ の間には谷状地形があるため、調査対象地からは除外されている。調査の結果、 $1 \sim 3 \, \mathrm{E}$ においては、古代末から近世にかけての幅広い時代の遺構を、 $4 \, \mathrm{E}$ では古代末から中世の遺構の他、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構を検出した。以下、地区ごとに概観する。

<1区> 最も東側に当り、市道を挟んだ東側が 平成18年度に発掘調査が実施された津森位遺跡

(第一次調査)である。現地表下およそ1 mのところで、黄褐色粘土の地山を検出 し、遺構はこの地山を掘削して構築され ている。主な遺構としては、大型の溝状 遺構が2条、小規模な溝状遺構が3~4 条見つかっている。特に調査区を斜行す るように検出したSD01は、方位がほぼ 東西方向に合致することから、本遺跡南 側に所在する田村廃寺周辺に認められる 正方位を利用した地割りに関連する遺構



第3回 遺跡位置図(1/25,000)

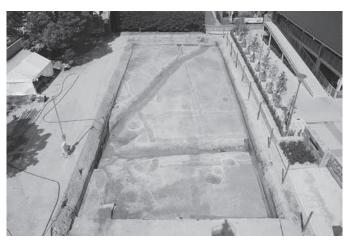


写真7 1区全景(西から)

として注目される。SD01 からは、京都産の緑釉陶器等、平安時代後期を中心とする時期の遺物が出土しているが、最上層では鎌倉時代の遺物が出土していることから、中世頃にその機能を失ったものと考えられる。また、SD01 と同時期に機能していたと考えられる別の溝状遺構 SD02 は、SD01 と合流するように構築されているが、これは、現在の地割である条里地割に沿って構築されている。異なる方位の地割が混在する点は今後の大きな課題である。

<2・3区> 1区の西側に当る調査区であり、1区と同様に多くの溝状遺構を検出している。 そのほとんどが、1区のSD01と同じ地割で構築されており、古代末期から中世にかけての周辺 の土地利用が主に正方位を基準に設けられていたことを示唆している。また、2区と3区の境界 付近では、溝状遺構が直交する場所も認められ、灌漑用水路網的な土地利用を視野に入れて考え る必要がある。溝状遺構の多くは、鎌倉時代頃にその機能を失ったものと考えられるが、その後 は大規模な灌漑用水路網が整備されることはなく、室町時代以降は円形に掘削した土坑の底から取水する、いわゆる出水状の遺構が多く構築される。特に江戸時代には、2区と3区の境界を中心とした地域に合計13基もの出水状の遺構が構築されている。周辺に居住していた人々が農業用水の確保に腐心していた様子が看て取れる。

また、2区の東側では、江戸時代の取水用の遺構の下層に石組の井戸跡が1基検出された。最大径1m程度と小規模ではあるが、最下層に曲物を設置しており、裏込め土中から室町時代後期頃の遺物が出土している。

 $< 4 \, \boxtimes >$ 最も西側に当る調査区は、東西に谷状地形がある、いわば中州状の地形を呈する。検 出した遺構は、 $1 \sim 3 \, \boxtimes$ と同様に溝状遺構が多い。

調査区を東西に横切るように検出した2条の小規模な溝状遺構は、時期的には相前後して構築されたものと考えられる。埋土中からは、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺物が概ね良好な状態で出土しており、周辺に集落等の所在が推測され、当該時期に灌漑用水路として機能していたことがうかがえる。また、本遺跡中最も西側で検出したSD04は幅2m、深さ約1mを測る幹線的な灌漑用水路と考えられるが、これも出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代にかけてのものである。

<まとめ> 今回の調査では、建物跡等の居住遺構が検出されなかったが、これは、今回の調査区(特に $1\sim3$ 区)が居住域ではなく、灌漑用水路が設置された農地に近い土地利用をされていたことを示唆している。また、4区においては、溝状遺構からの遺物の出土状況や周辺の遺跡の分布等を考え合わせると、後世の削平により、居住域が失われたと考えられ、本遺跡周辺までは竪穴住居跡などが所在していたものと考えられる。

今回の調査結果から、丸亀平野西北部においては、弥生時代には、中の池遺跡や新田橋本遺跡、 今津中原遺跡等、津森位遺跡周辺には大小の集落が点在していたものと考えられる。また、古墳 時代以降は居住域の中心は津森位遺跡及びその南側の田村廃寺周辺に移り、津森位遺跡から西側 のエリアは耕作を放棄した荒蕪地として近世の新田開発を迎えることになったと考えられる。



写真8 2区全景(北から)

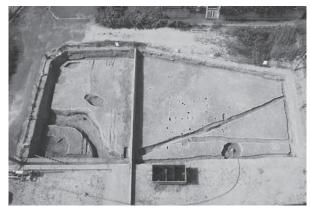


写真9 4区全景(南から)

飯野・東二瓦礫遺跡

飯野・東二瓦礫遺跡は飯野山の西麓、丸亀市飯野町東二に所在する。本遺跡は昭和63年度に四国横断自動車道建設に伴って発掘調査が行われており、今年度の調査区は昭和63年度の調査区に南接する。調査区は南北に細長く、東西幅約20m、南北長約150mである。

本遺跡からは弥生時代の河川跡、古墳時代のものと考えられる水田跡・溝状遺構、平安時代から室町時代の溝状遺構・集落跡が検出された。

弥生時代の河川跡は調査区のほぼ全域で確認 された。幅 $15\sim 20$ m、深さ $1.0\sim 1.5$ mを測り、 南から北に向かって蛇行して流れる。河川跡から



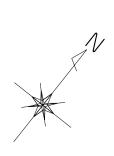
第4図 遺跡位置図(1/25,000)

はサヌカイト製の石槍・石鏃や弥生時代前期から後期の土器が出土した。

調査区の北部では水田跡が検出された。水田は洪水により堆積した細砂によって覆われていた。 水田を覆った細砂からは奈良時代の須恵器が出土した。また、水田土壌の下からは弥生時代後期 後半の土器が出土したことから、水田跡は古墳時代頃のものと考えられる。水田の1区画の形は 歪な長方形で、面積は20~35㎡を測る。水田跡の東側では南から北に向かって流れる溝状遺構 が検出された。溝状遺構は幅3m、深さ1m前後を測る。水田を覆った細砂がこの溝の中に堆積 していたことから、水田跡と同時期に機能していた用水路であることがわかる。この溝状遺構か ら水田への導水施設は検出されなかった。溝底の標高は水田跡に比べ、約0.8 m低いことから、 隣接する西側の水田には導水しておらず、下流の水田に導水していたものと考えられる。

また、調査区の南部では丸亀平野に残る条里型地割りに合致する溝状遺構が検出された。この 溝状遺構は東から西に向かって流れ、幅5~6m、深さ0.8mを測る。溝状遺構の埋土からは平 安時代から室町時代の土器や・中国製白磁・帯金具・銅銭が出土した。

今回の調査では弥生時代の河川跡、古墳時代のものと考えられる水田跡、平安時代から室町時代の溝状遺構が検出された。県内では水田跡の調査例が少なく、1区画の形や面積がわかる数少ない事例である。また、古代の帯金具や銅銭、中国産白磁が出土したが、本遺跡では同時期の集落は検出されていないことから、周辺地域に集落が存在したことが推定される。



水田跡

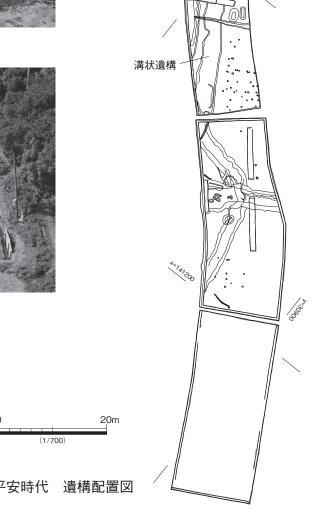
溝状遺構



写真 10 古墳時代水田跡



写真 11 古墳時代溝状遺構· 平安時代~室町時代溝状遺構



第5図 古墳時代~平安時代 遺構配置図

にししらかたかわらだにいせき 西白方瓦谷遺跡

西白方瓦谷遺跡は丘陵の南東側の緩斜面に位置する。平成19年度にも発掘調査を実施しており、縄文時代中期の土坑状の落ち込み、弥生時代の竪穴住居跡、古墳の周溝跡等が検出された。今回の調査地は平成19年度調査地の北東隣接地に当たり、発掘調査以前は畑として利用されていた。盛土を行って畑を造成していたため盛土が分厚く、現地表から1m下で遺構が検出された。

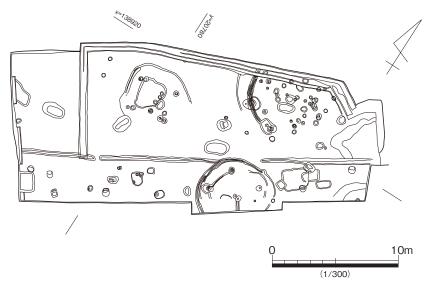
今回の調査では弥生時代後期前半の3棟の竪穴 住居跡、弥生時代中期から後期の土器溜りを検出 した。竪穴住居跡はいずれも平面形は円形を呈し、



第6図 遺跡位置図(1/25,000)

2棟は径 $5\sim6$ mを測る。もう1棟は調査区外に連続するため、全体は不明であるが、径8 m前後と推定される。

平成19年度の調査では縄文時代の土坑状の落ち込みや、古墳の周溝跡、7世紀の竪穴住居跡が検出されているが、今回の調査地では弥生時代の遺構が確認されただけであった。西白方瓦谷遺跡は標高2~18mの緩斜面に位置する。この遺跡では弥生時代の住居跡は10数棟検出しているが、いずれも標高6~12m付近で検出された。弥生時代には遺跡の立地する丘陵の東側の平野付近まで、海が入り込んでいた可能性もあり、海岸に近接する丘陵部の弥生時代の集落の様相を示す事例である。



第7図 西白方瓦谷遺跡 遺構配置図



写真 12 調査地全景



写真 13 弥生時代竪穴住居跡



写真 14 弥生時代竪穴住居跡

はんざんきたどいいせき飯山北土居遺跡

堀や土塁に囲繞された中世の城館が廃絶し耕地 化した場合、堀や土塁の跡が完全に失われずに地 割や土地の高低差になって残ることがある。これ は周囲とは異質な地割のまとまりとなるため、地 籍図や空中写真によって検出できることがある。 飯山北土居遺跡は、空中写真判読によって存在が 注意され、北辺部の道路工事の際に堀跡らしい遺 構が確認されたことから中世城館跡として周知さ れている。今回、国道 438 号道路改築事業に伴い、 遺跡南部を東西に走っている県道善通寺府中線の 拡幅工事が行われることとなり、試掘調査により 遺構が確認されたことから本調査を実施した。



第8図 遺跡位置図(1/25,000)

調査地は、西1区 (1.5×5 m)、西2区 (2×12 m)、西3区 (3×9 m)、東区 (4×5 m) の4箇所である。城館を囲繞する堀跡の存在が想定されたのは西1区と東区である。西1区では、西端で溝状遺構と思われる落ち込みの肩部が検出されたが、溝跡の中心が調査区外になるため、詳細は不明である。東区では、幅2以上、深さ1.5 m以上の溝状遺構が検出された。明褐色の粘土で埋積されており、滞水環境の下で埋没した様子が窺える。位置関係から城館の堀に当たる可能性が高い。出土遺物は青磁の他数点の遺物細片のみである。中世のものと考えられるが、年代を特定するものはなかった。西2区では幅3、深さ1 mの溝状遺構、西3区では幅3 (推定)、深さ1 mの溝状遺構が検出された。いずれも黒褐色の粘質土で埋没しており、東区のものとは埋

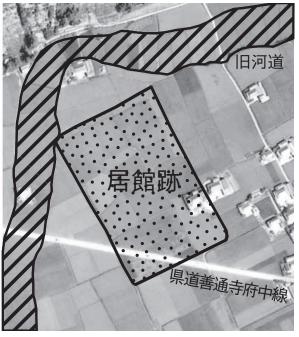
土が異なっている。両者とも出土遺物は僅少であり年代を決めることはできず、また、城館に伴うものかどうか遺構の性格を特定することも難しい。

以上、年代決定等の詳細は、今後 の調査に待つところが多いものの、 地割や地名で想定されていた中世 城館の所在について考古学的にも 追認できたと考えている。

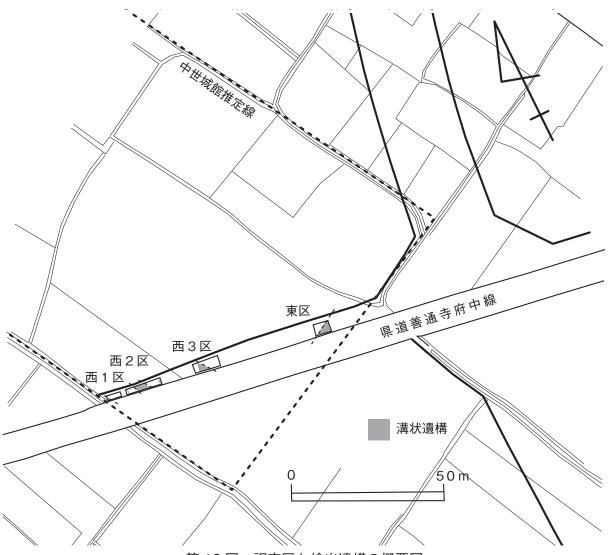


写真 15 東区 調査完掘状況 (西から)





第9図 飯山北土居遺跡付近の空中写真(国土地理院 1962 年撮影)



第10図 調査区と検出遺構の概要図

きゅうれんぺいじょうい せ き 旧練兵場遺跡(善通寺病院)

今年度の対象地は、国立病院機構善通寺病院の 敷地の南西隅に位置する。調査では弥生時代中期 の掘立柱建物跡、土坑墓、弥生時代後期から終末 期の竪穴住居跡、古墳時代後期の竪穴住居跡、古 代から中世の溝状遺構等を検出した。

弥生時代中期の掘立柱建物跡は1棟に留まるが、建物を復元できなかった柱穴跡は15基を数える。柱穴跡はいずれも対象地の北半部で検出しており、過年度に確認された掘立柱建物群の縁辺部に位置することがわかる。一方、柱穴跡が確認されなかった南半部で土坑墓を1基検出した(写真17)。長方形プランを呈し、最大幅0.6 m、検出



第 11 図 遺跡位置図 (1/25,000)

長1.35 mを測る。断面形状は箱型を呈し、底面は舟底状にわずかに窪む。埋土は人骨を包含する堅緻なにぶい黄褐色粘質土が主となり、底面にのみ黒褐色粘質土を薄く認める。棺痕跡は確認できず、小口板の掘り方等も認められないことから、土坑墓(土葬墓)と判断した。人骨は状態が悪いながらも残存状況は比較的良好で、仰臥屈葬したと思われる一体分を検出した。明瞭な副葬品はないが、所属時期は埋土中に含まれるⅢ様式新段階に属する土器や上位に構築された弥生時代後期前葉の竪穴住居跡の存在から、中期後半~後期初頭と考えられる。旧練兵場遺跡では成人墓の検出例は稀少であり、集落構造を考える上では大きな成果である。なお、人骨については九州大学大学院中橋孝博氏に現地で調査指導を頂いた上、その鑑定を依頼している。

弥生時代後期~終末期の主要遺構には竪穴住居跡 16 棟、古墳時代後期の主要遺構には竪穴住居跡 20 棟があるが、大規模な撹乱跡等の影響もあり、多くは一部の確認に留まる。注目すべきは同方位の4棟が重複する古墳時代後期に属する竪穴住居跡である(写真 18)。一辺4 m前後に復元でき、一部には6 mを測る大規模なものが含まれる可能性も残す。うち1 棟からは鞴羽口と鉄滓が出土しており、同一地点での複数回の建替えとともに、その性格を示唆する。

古代以降の主要遺構としては、東西方向の坪界線に合致する位置で検出した古代と中世の溝状遺構がある。古代の溝は幅・深さともに 0.6 mを測り、溝底が途中で盛り上がり、細長い土坑を1 m内外の間隔で連結させたような形態を呈する。所属時期を示す遺物に恵まれないが、7・8世紀代に属するものと考えられる。中世の溝は幅 2.4 m、深さ 0.5 mを測る。





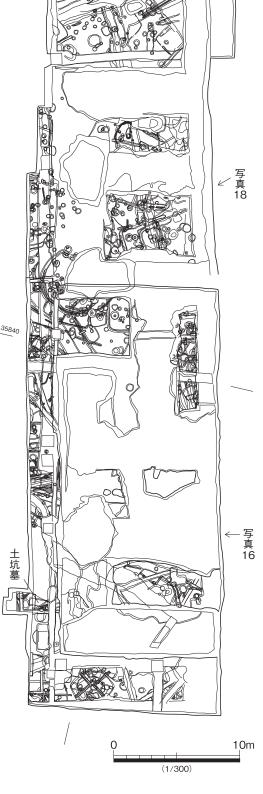
写真 16 調査区南半部全景(東から)



写真 17 土坑墓(西から)



写真 18 重複する竪穴住居跡(北東から)



y=25180

第 12 図 旧練兵場遺跡 遺構配置図

いしだ こうこうこうていないいせき 石田高校校庭内遺跡

県立石田高等学校堆肥舎建設に伴い、発掘調査 を実施した。調査地は、現在学校の敷地で平地で ある。

過年度の調査では今回の調査地の西側及び南側には弥生時代の竪穴住居跡を検出しており、北側では古代から中世の溝状遺構や柱穴跡を検出している。今年度の調査では、弥生時代の竪穴住居跡が想定されたが、調査の結果、弥生時代の遺構は、弥生時代後期の土坑が1基検出されたのみで、遺構の時期では北側の調査地との関連が考えられる。

調査地西半は、北半が現代の建物の 建築と解体工事に伴い、大きく撹乱さ れており遺構は残っていない。基盤層 は粗砂層である。調査地東半の基盤層 は粘質土である。

中心となる遺構は、7世紀代の遺物 が出土する大型溝状遺構3条である。 調査区のほぼ中央で、南東から北西方 向と南北方向のものが検出されたが、 現段階では時期の前後関係は明らかで はない。また調査区西端でも溝状遺構 を検出した。

その他の遺構としては、中世のもの と考えられる石組みの井戸跡と考えら れる遺構を検出した。井戸底面からは 瓦器椀が出土した。

遺物として注目できるものとしては、弥生時代後期のものと考えられる銅鏃2点がある。いずれも7世紀代の大型溝状遺構の埋土から出土した。



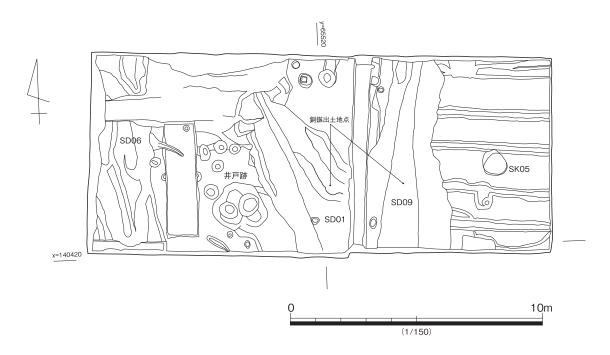
第 13 図 遺跡位置図(1/25,000)



写真 19 調査区西半全景(南から)



写真 20 調査区東半全景(南から)



第14回 石田高校校庭内遺跡 遺構配置図



写真 21 銅鏃出土状況



写真 22 井戸跡(南から)



写真 23 SK05 (西から)

をかきたはらいせき多肥北原遺跡

県道太田上町志度線道路改良工事に伴い、発掘 調査を実施した。平成19・20年度に調査した多 肥平塚遺跡の西側に位置する。当初は調査面積 1,052㎡の予定であったが、生涯学習・文化財課の 試掘調査により当初予定地の西側にも遺跡の広が りが明らかになっため、追加して本発掘調査を実 施することになり、全体の調査面積は2,086㎡と なった。

遺跡は、南から北へ若干傾斜気味の平地に立地する。調査地東端から中央では、基盤層は礫層が部分的に現れる黄灰色粘質土であるが、調査地西端付近では黄白色粗砂層が基盤層となっている。



第 15 図 遺跡位置図(1/25,000)

遺構の内容は、大きく2つに分かれ、7世紀を中心とする竪穴住居跡群、掘立柱建物跡及び土坑と平安時代中頃の井戸跡、土坑である。遺構の検出状況は、調査対象地東半分で密度が高く、遺構検出面上の包含層からは多量の遺物が出土した。遺跡西半は、宅地跡で撹乱が著しいこともあるが、遺構の密度は希薄である。

7世紀を中心とする遺構は、調査地の東半分に集中して見られ、住居跡の重複が見られる。これは、礫層の現れていない基盤層を選んで、住居を建築した可能性がある。竪穴住居跡は全体的に深い掘り込みが良く残っており、竈煙道がトンネル状に残存しているものもあった。竈は北側に付くものが多いが、竈の袖の残存状況は総体的に良くない。また、住居廃絶時に竈の部分に土師器の壺を置いたと考えられる遺構と遺物を検出した。掘立柱建物跡については、柱穴跡と考えられる遺構は多いものの、建物跡として確認できたのは数棟に留まった。土坑はいわゆる廃棄土坑と考えられるものである。

平安時代中頃の遺構は、確実なものとしては 井戸跡1、土坑1を確認した。井戸跡底面の四 隅には柱穴跡状の掘り込みがあり、木組みの井 戸枠の隅柱を設置したものと考えられる。土坑 からは軟質の緑釉陶器が出土した。

出土遺物として注目できるものとして、後世 の包含層から出土した7世紀頃と考えられる金 属製の耳環がある。



写真24 1区全景(東から)

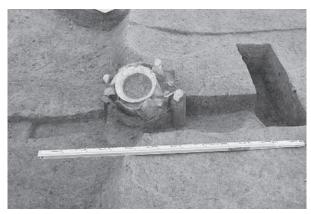


写真 25 SH01 竈出土土器(東から)

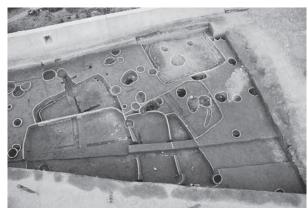


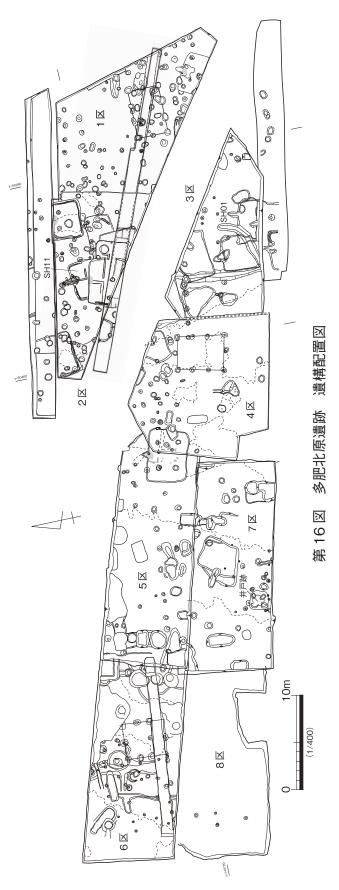
写真 26 2区全景(南から)



写真 27 SH11 竈(南から)



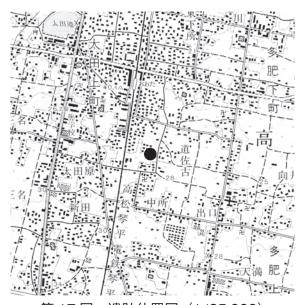
写真 28 井戸跡 (南から)



た ひ きたはらにしいせき 多肥北原西遺跡

県道太田上町志度線道路改良工事に伴い、発掘 調査を実施した。多肥北原遺跡の西側に当る。生 涯学習・文化財課の試掘調査により、多肥北原西 遺跡は、全体で4,898㎡の調査面積であることが 確認された。平成21年度は、このうち東端の900 ㎡を対象として調査を実施した。

遺跡は、現在水田・宅地が広がる平地に立地する。調査地西半は基本的に黒色系粘質土が遺構検出面で、部分的に黄灰色粘質土となっている。黒色系粘質土は、深くなるに従い、黒色が薄れ灰白色粘質土へ変わっていく。調査地東端は、多肥北原遺跡と同様に、部分的に礫層が現れる黄灰色粘質土が基盤層となっている。



第 17 図 遺跡位置図 (1/25,000)

遺構は大きく2つ時期に分かれ、奈良時代前後と考えられる掘立柱建物跡、土坑及び性格不明な落ち込みと平安時代中頃のピットである。

調査地中央では、遺物を多量に出土する包含層及び性格不明の落ち込みを検出した。調査地東端及び西端は遺構密度は低いものの掘立柱建物跡が検出された。

奈良時代前後と考えられる遺構では、完形の土師器杯5点を埋納した土坑及び須恵器大甕が潰れた状況で出土した土坑がある。東端と西端で検出された掘立柱建物跡やピットの大半はこの時期と考えられる。

平安時代中頃のピットは、少数確認できたに留まる。

出土遺物として注目できるものとして、性格不明の落ち込みから出土した7世紀頃と考えられる金属製の耳環及びピットから出土した布目平瓦がある。



写真 29 1 区掘立柱建物跡(南から)



写真30 2区全景(南から)

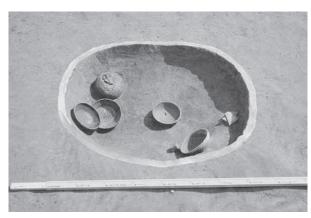


写真 31 土師器出土土坑(西から)



写真 32 3区全景(西から)

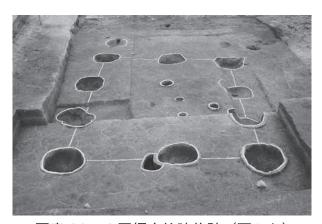
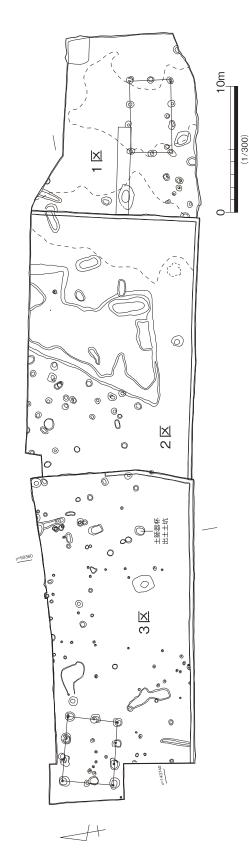


写真 33 3区掘立柱建物跡(西から)



2. 普及・啓発事業

1 展示

(1) 香川県埋蔵文化財センターでの展示

タイトル	場所	会期
遺跡・遺物からみた香川の歴史	第1展示室	4月1日~9月18日、 12月14日~3月31日
続・発掘へんろ ~四国の旧石器・縄文時代~	第1展示室	10月3日~12月6日
知られざる善通寺市北部の遺跡群 〜小塚・稲木北・永井北遺跡〜	第2展示室	4月1日~4月24日
内海と中世の遺跡 一高松市木太中村遺跡・三豊市家の浦遺跡―	第2展示室	4月30日~7月3日
夏休み子どもミュージアム あ、古墳へ行ってみよう。	第2展示室	7月18日~8月31日
府中の古代遺跡	第2展示室	9月7日~12月14日
讃岐国府跡を探る ―平成 21 年度の調査―	第2展示室	1月14日~3月31日

第9表 展示一覧

一般			団体										
					団体数				桿		汝		
大人	子ども	計	一般	高校 生	小· 中学 生	幼稚園	計	一般	高校 生	小· 中学 生	幼稚園	計	合計
1,630	400	2,030	17	0	8	0	25	635	0	301	0	936	2,966

第 10 表 入館者数一覧

(2) 香川県埋蔵文化財センター以外の施設での展示

タイトル	場所	会期	観覧者数		
高松城下から出土した陶磁器	栗林公園民芸館	4月1日~11月12日	48,921		
大野原4大古墳の謎	観音寺市中央図書館	8月27日~9月13日	675		
第6次さかいで古代探検隊 国府があったまち	坂出市郷土資料館	10月28日~11月29日	783		
東かがわ市史考古編 古代の東かがわ	東かがわ市歴史民俗資料館	12月13日~2月15日	186		
シリーズ学校の遺跡 2 〜鹿伏・中所遺跡〜 校舎の下の大弥生集落	香川県立文書館	1月19日~2月28日	1,396		
弥生のうるし 一うるしと 1,800 年前のムラー	高松市石の民俗資料館	2月20日~3月22日	1,333		
四国地区埋蔵文化財センター巡回展	松山市考古館	4月17日~6月28日	4,241		
続・発掘へんろ	高知県埋蔵文化財センター	7月27日~9月18日	1,417		
一四国の旧石器・縄文時代一	徳島県立埋蔵文化財総合センター	1月12日~3月7日	879		
合計					

第11表 センター外展示一覧

2 現地説明会・地元説明会

	内容	実施日	対象	見学者数	
1	津森位遺跡現地説明会	平 成21年8月22日	一般	90	
2	飯野・東二瓦礫遺跡現地説明会	十 灰21平 8 月 2 2日	一般	90	
3	西白方瓦谷遺跡地元説明会	平成21年11月22日	地元	70	
4	讃岐国府跡地元説明会	平成22年1月16日	地元	60	
5	讃岐国府跡現地説明会	平成22年2月21日	一般	138	
6	旧練兵場遺跡現地説明会	平成22年2月28日	一般	173	
	合計				

第12表 現地説明会・地元説明会一覧

3 講師の派遣

(1) 体験講座など

	依頼者	実施日	場所	内容	対象	人数
1	RNC サービス	5月4・5日	さぬきこどもの国	分銅形ペンダ ントづくり	子ども	180
2	香南小学校6年団	7月4日	ししまる館	勾玉づくり	親子	80
3	香南歷史民俗郷土館	7月26日	高松市香南歴史民俗 郷土館	勾玉づくり	小学生	27
4	木太コミュニティセンター	7月30日	木太コミュニティセンター	勾玉づくり	小学生	28
5	前田コミュニティセンター	8月7日	前田コミュニティセンター	勾玉づくり	小学生	41
6	加茂町子ども会	8月12日	坂出市役所加茂出張所	分銅形ペンダ ントづくり	小学生	18
7	三豊市教育委員会	8月21日	宗吉かわらの里展示館	土器づくり	一般	23
8	香南歷史民俗郷土館	8月23日	高松市香南歴史民俗 郷土館	分銅形ペンダ ントづくり	小学生	15
9	宇多津町教育委員会	8月24日	宇夫階神社	勾玉づくり	小学生	60
10	三豊市教育委員会	10月14日	宗吉かわらの里展示館	土器焼き	一般	30
11	コープ垂水運営委員会	11月18日	コープ飯山	ガラス玉づくり	一般	10
12	コープ垂水運営委員会	11月26日	コープ飯山	ガラス玉づくり	一般	15
13	コープ飯山南運営委員会	2月2日	コープ飯山	勾玉づくり	一般	12
14	香南歷史民俗郷土館	2月13日	高松市香南歴史民俗 郷土館	ガラス玉づくり	親子· 一般	14
15	高松市石の民俗資料館	2月20日	高松市石の民俗資料館	うるしのコー スターづくり	親子· 一般	27
16	亀阜地区民生委員児童 委員協議会	2月20日	亀阜小学校	勾玉づくり	小学生	32
合計						

第13表 体験講座への講師派遣一覧

(2) 学校

	学校名	実施日	内容	対象	人数
1	高松市立国分寺北部小学校	6月18日	クラブ活動講師	4~6年生	32
2	観音寺市立常磐小学校	6月23日	勾玉づくり	6年生	68
3	高松市立国分寺北部小学校	6月25日	クラブ活動講師	4~6年生	32
4	高松市立前田小学校	7月3日	土器づくり	6年生	39
5	高松市立屋島西小学校	9月7日	製塩土器づくり(整形)	6年生	104
6	高松市立前田小学校	10月16日	土器焼き	6年生	39
7	高松市立屋島西小学校	11月9日	製塩土器づくり(焼成)	6年生	104
8	高松市立屋島西小学校	12月2日	塩づくり	6年生	104
合計					522

第14表 学校への講師派遣一覧

(3) その他

	依頼者	実施美	内容
1	香川歴史学会	4月11日	講演
2	さぬき市文化財保護協会 長尾支部	4月29日	講演
3	丸亀郷土史学習クラブ	5月9日	講演
4	まんのう町文化財保護協会	5月23日	講演
5	宇多津町文化財保護協会	6月1日	講演
6	香川県神社庁	7月4日	講演
7	徳島市立考古館	7月25日	講演
8	香川歷史学会	7月25日	講演
9	丸亀郷土史学習クラブ	10月10日	講演
10	香川県文化財保護協会 坂出支部庁	11月8日	講演
11	坂出市府中老人クラブ連合会	11月12日	講演
12	高松市教育委員会	11月28日	講演
13	高松市立屋島小学校	12月10日	研究発表への指導
14	文化財・博物館関係労組連絡会	1月23日	講演
15	三豊市立吉津小学校 PTA	1月24日	窯づくりの指導
16	徳島県埋蔵文化財センター	2月14日	講演
17	高松市円座地区老人クラブ連合会	3月10日	遺跡解説
18	善通寺市教育委員会	3月24日	講演

第15表 講演等への講師派遣一覧

4 坂出市立府中小学校との連携授業(よろこび学習)

回	実施日	場所	内容	対象	人数	
1	4月17日	埋蔵文化財センター	施設見学	6年生	40	
2	5月15日	讃岐国府跡周辺	遺跡見学	6年生	40	
3	6月5日	府中小学校	授業 (旧石器〜縄文)	6年生	40	
4	6月12日	府中小学校	授業 (弥生)	6年生	40	
5	6月19日	府中小学校、新宮古墳	授業 (府中の遺跡)	6年生	40	
6	7月10日	府中小学校	土器づくり	6年生	40	
7	10月9日	府中小学校	土器焼き	6年生	40	
8	10月30日	府中小学校	土器炊飯	6年生	40	
9	12月17日	讃岐国府跡	発掘体験	6年生	41	
	合計					

第 16 表 坂出市立府中小学校との連携事業一覧

5 夏休み子どもミュージアム

7月18日~8月31日に夏休み子どもミュージアムを行った。第2展示室で展示「あ、古墳へ行ってみよう。」を開催し、専門職員が考古学に関する自由研究の相談に応じる「遺跡の自由研究サポートデスク」のコーナーを設けた。また、8月18日には発掘体験学習「夏休み!土器ドキ発掘体験!!」を津森位遺跡で開催し、25名の方が参加した。

6 考古学講座

専門職員が講師を務める考古学講座を4回開催した。

回	実施日	タイトル	講師	人数
1	10月10日	石に魅せられた狩人たち ~四国の旧石器時代~	森下英治	17
2	11月8日	儀礼のカタチ ~讃岐の埴輪~	蔵本晋司	16
3	2月6日	地名が語る讃岐国府跡 一讃岐国府跡を探る①—	松本和彦	50
4	2月27日	讃岐国府跡周辺の地形と景観 ―讃岐国府跡を探る②―	木下晴一	42
合計				

第 17 表 考古学講座一覧

7 文化ボランティア活動

文化ボランティアは、事業の記録撮影や普及事業の補助等を行った。16名が登録し、33回、 延べ79名が活動に参加した。

8 四国新聞への連載

四国新聞に「古からのメッセージ さぬき歴史教室⑦」として、計48回の連載を行った。県

内の代表的な考古資料を紹介する内容(24回)に加え、「道真の足跡を追う(讃岐国府跡探索事業から)」(13回)、「香川の弥生時代研究最前線―旧練兵場遺跡の調査から」(11回)で構成した。

9 資料の貸出・利用

区分	学校・大学	研究会 · 同好会	教育委員会· 博物館	出版社· 新聞社	個人・他	合計
遺物	3	1	12	0	20	36
写真・パネル	0	0	4	3	3	10
レプリカ・模型	0	0	1	0	0	1
合計	3	1	17	3	23	47

第 18 表 資料貸出・利用一覧(数字は件数)

10 職場体験学習・インターンシップ

	学校名	期間	内容	人数
1	高松市立塩江中学校	6月29日~7月1日	職場体験学習	4
2	坂出市立瀬居中学校	8月3日~5日	職場体験学習	1
3	香川大学	9月24日~30日	インターンシップ	3
4	高松市立香東中学校	9月28日~10月2日	職場体験学習	6
5	丸亀市立綾歌中学校	11月5日~6日	職場体験学習	8
6	坂出市立坂出中学校	12月1日~3日	職場体験学習	3
7	坂出市立白峰中学校	12月8日~10日	職場体験学習	3
		合計		28

第19表 職場体験学習・インターンシップ一覧

11 刊行物

- (1)『香川県埋蔵文化財センター年報 平成20年度』
- (2)『香川県埋蔵文化財センター研究紀要VI』
 - ·信里芳紀「香川の絵画·記号土器」
 - ・森下友子「近世の富田焼Ⅱ―平尾窯跡出土遺物―について」
 - ・乗松真也「大正期における綾歌郡府中村の史跡調査 ―史蹟名勝天然紀念物保存法施行に 伴う一地方自治体の対応―」
- (3) 『いにしえの讃岐』 62~65号

12 ホームページ

ホームページ (http://www.pref.kagawa.lg.jp.maibun/) の更新を随時行った。

トップページページビュー数

17,398

3. 緊急雇用創出基金事業

直接雇用の形態による「学校及び地域等における出土品の活用推進事業」と、委託の形態による「埋蔵文化財資料のデジタル化推進事業」を実施した。

1 学校及び地域等における出土品の活用推進事業

埋蔵文化財センター保管の出土品のうち、発掘 調査終了後相当の年数が経過しているものについ て、分類、接合、復元、実測、写真撮影等の作業 を行うことで、学校等への貸出しや展示等の活用 に供することができるような措置を講じた。

作業の対象は、「讃岐国府跡探索事業」を開始したことに関連付けて、昭和52年度から昭和56年度まで香川県教育委員会によって発掘調査が実施された、讃岐国府跡の出土品とした。

作業の期間は、平成21年6月8日から11月30 日まで、雇用した臨時職員の員数は、5名である。



写真34 写真撮影した出土品



写真 35 出土品の接合作業

2 埋蔵文化財資料のデジタル化推進事業

この事業は、埋蔵文化財発掘調査において撮影された遺跡の記録写真をデジタル化して、その保存性を高めるとともに、埋蔵文化財資料データベース検索システムの構築を目指した事業である。

業務内容としては、二つに分けられる。 最初に行う業務は、写真データのデジタル化の業務である。対象となる遺跡の 記録写真の中から適性な写真を選択して、 その写真をスキャニング、色調補正を経たデータをDVD-ROM等へ保存する 業務である。

デジタル化の対象となる写真は、センター設立前の昭和 40 代から設立直後の昭和 63 頃に撮影されたスライドの中で、劣化が進んだ 43 遺跡の記録写真を優先してデジタル化を実施した。最終的にはデジタル化した写真は 22,494 カットを数える。

次に行う業務は、WEBを通じて、その情報を広く一般に公開するため、WEB公開を前提とした検索システムを構築する業務である。今回の事業でデジタル化したデータや、以前にデジタル化したデータもこの検索システムに入れた。

実施に当たっては、専門業者と委託契 約を結び、平成21年9月から開始して、 平成22年3月までの期間で実施した。



写真 36 写真の選択作業



写真 37 写真のスキャニング作業

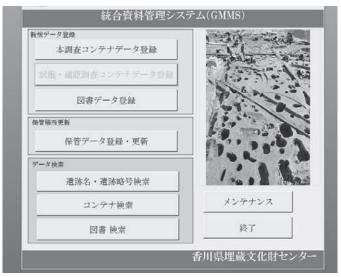


写真 38 資料管理システムのトップ画面

4. 讃岐国府跡探索事業

香川県は、平成20年10月に平成24年度までの「香川県文化芸術振興計画」を策定した。

この中で、「讃岐国府跡探索事業」は、「香川の特色ある文化芸術活動を活かした地域づくり」 を目的とした「地域文化活性化事業」として、戦略的重点事業に位置付けられた。

この事業の趣旨は、ボランティアとともに地名調査、地形調査、発掘調査等を行うことにより、讃岐国府の所在地を特定して遺跡の実態を解明するとともに、遺跡を活用して地域の活性化を図ろうとすることである。

香川県埋蔵文化財センターでは、平成21年度から4ヵ年計画で同事業を開始した。

事業は、4月にボランティア調査員を公募し、5月28日に第1回ボランティア調査員研修会 を開催することから着手した。

地名調査及び地形調査等については、6月から11月まで実施し、国府関連の通称地名の収集や、 国府遺構の存在が想定される微地形の復元等を行うことができた。

発掘調査は12月から平成22年2月まで屋外作業を行い、濃密な遺構、遺物の包蔵地を確認した。また、発掘調査の基礎資料とするために、関連資料の収集活動を行った。

遺跡を活用した普及・広報活動等については、調査の進捗に合わせて随時実施した。以下に実績を示す。

①ボランティア活動

登録者数 31人

活動参加延べ人数 940人

②地域との交流

説明会・学習会 6月16日、7月28日、9月28日、11月12日、11月26日

170人

展示「水のフェスティバル in 府中湖~むかし国府があった~」

	10月4日	8,000 人
府中小学校連携事業・発掘体験学習	12月17日	41 人
発掘調査地元説明会	1月16日	60 人

③情報発信

ホームページへの記事掲載	60 回
情報誌「いにしえの讃岐」への記事掲載	4 回
新聞への連載記事掲載	13 回
地元ケーブルテレビガイドブックへの記事掲載	5回

④関連行事

展示「府中の古代遺跡」 9月7日~12月14日 938人

まち歩き「古代の県庁「国府」はどこ? 遺跡の専門家と歩く 1,300 年前―」

12月5・13日 20人

展示「讃岐国府を探る―平成21年度の調査―」

1月14日~3月31日 448人

県庁ギャラリー展「讃岐国府ミステリーハンター奮闘記」

1月25~29日 不詳

考古学講座「地名が語る讃岐国府跡―讃岐国府跡を探る①―|

2月6日 50人

考古学講座「讃岐国府跡周辺の地形と景観―讃岐国府跡を探る②―」

2月27日 42人

 発掘調査現地説明会
 2月21日

 138人

報告会「古代の県庁・国府を探る」 3月13日 105人

⑤刊行物

冊子『讃岐国府跡を探る』 1,200 部

パンフレット『讃岐国府を探る』 25,000 部

Ⅲ 讃岐国府跡探索事業に伴う調査報告

第1節 調査の経過

1. 調査の経過

本稿は、讃岐国府跡探索事業に伴う地名調査、地形 調査、発掘調査等の各種調査の概要である。

調査は、地名調査を松本和彦、地形調査を木下晴一、 発掘調査及び関連調査を蔵本晋司がそれぞれ分担した。 本稿の執筆も各担当が分担し、文末に執筆者名を記し、 編集は蔵本が行った。

「讃岐国府跡探索事業」は、平成21年4月にボランティア調査員(通称「讃岐国府ミステリーハンター」)を公募することから開始した。登録者数は31名である。

5月中に各種調査の準備を整え、5月24日に第1回 ボランティア調査員研修会を開催して、6月から地名 調査と地形調査に着手した。

なお、ボランティア調査員の資質向上や、調査情報 の共有化等を目的とした研修会は、1年間で7回開催 した。

地名調査は平成21年6月1日から開始し、10月までの5ヶ月間実施した。6月はほぼ毎日調査を行ったが、酷暑の影響もあり、7・8月は活動日を水または木曜日と、土または日曜日の週2日に限定し、9・10月からは水・木・土曜日の週3日間の調査を実施した。延調査日数は43日、ボランティア調査員の調査への総参加人数は88名を数える。

地形調査も6月1日から開始し、11月までの6カ月間実施した。6月はほぼ毎日、7月以降は水・土曜日の週2日間実施した。延調査日数は41日、ボランティア調査員の総参加数は約250名である。

発掘調査地の選定は、地名・地形調査の成果等をも とに、センター内で慎重に検討が繰り返され、候補地 が決定したのは11月中旬のことであった。調査地は民 地のため補償の手続きを行い、地権者の快諾を得て、 11月末にはすべての準備を終えた。

発掘調査は、平成21年12月4日より開始した。現 耕作土のみ重機によって掘削し、包含層及び遺構埋土 は、すべて人力により掘り下げた。発掘はボランティ ア調査員が主に担当し、平成22年2月25日に無事終 了した。延調査日数は51日、ボランティア調査員の調 査への総参加人数は約250名である。

発掘調査期間中には、坂出市立府中小学校6年生児

童や「09 てくてくさぬき」参加者の発掘体験、坂出市立白峰中学校 2 年生生徒の職場体験、県立坂出高校地歴部生徒の現場見学等も合わせて実施した。こうした活動は、新聞・テレビ等のマスコミに取り上げられ、特集番組が組まれる等注目された。こうしたこともあり、1月16日の府中地区住民を対象とした地元説明会には60名、2月21日の現地説明会には138名もの参加者があり、メモを取り調査員に熱心に質問する参加者も多く見られ、関心の高さが窺われた。

本稿挿図中の座標は、国土座標第IV系(世界測地系)で、方位の北は国土座標第IV系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会 議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新 版標準土色帖 1994 年度版』による。

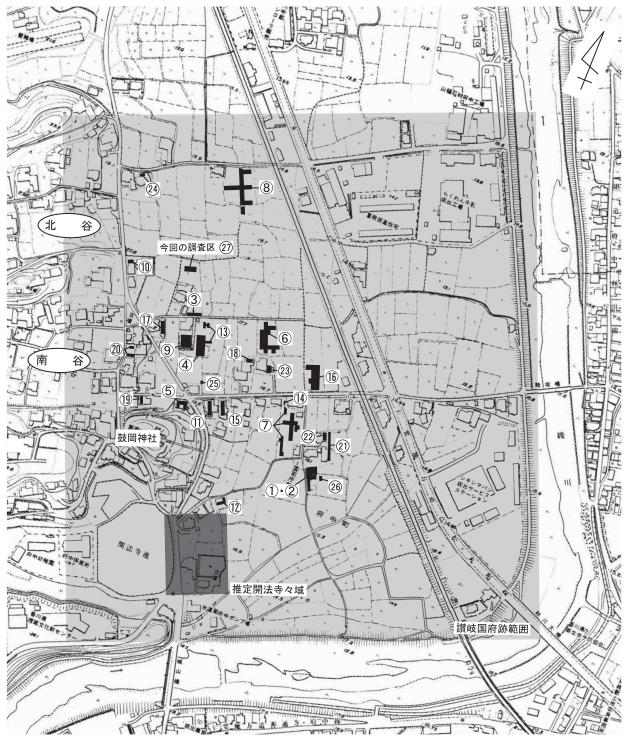
なお、調査に当り、調査地の地権者の方を始め、坂 出市教育委員会、地元自治会、地元水利組合等、多く の方のご助力を得た。記して謝意を表したい。

2. 既往の調査

周知の埋蔵文化財包蔵地としての讃岐国府跡は、坂 出市府中町本村地区の東西約600 m、南北約700 mの エリアが指定されている。この範囲には、白鳳期創建 の古代寺院開法寺跡を含む。開法寺跡の寺域について は確定していないが、坂出市教育委員会(以下、市教 委と略す)の調査により、塔・講堂・僧坊・回廊等の 遺構が確認され、方1町程度が想定されている。

讃岐国府跡に対する発掘調査は、昭和51年度の市教委による調査を嚆矢として、香川県教育委員会(以下、県教委と略す)による学術調査や、市教委による開発に伴う事前調査が実施されてきた。これまで個々の調査地の呼称に統一性はなく、例えば「〇年度の〇番地の調査区」等と漫然と表記されてきた。今回の調査を契機として、こうした煩雑な名称を改め、「第〇次調査」と通し番号を付した名称を与えることとする。

具体的な調査位置は、第1図に示したとおりであり、 各調査区の概要については、表1にまとめた。上述したとおり、開法寺跡の想定寺域範囲を除いた部分を讃岐国府跡とし、讃岐国府跡として市教委により実施された寺域内での調査は、国府に関係すると思われる遺



第19回 讃岐国府跡調査区位置図

構が確認されていないこともあり、除外した。なお、図・ 表作成に当り、市教委より教示を得た。(蔵本)

第2節 地名調査の成果

地名調査はボランティア調査員が主となり、聞き取り調査と文献資料の調査の2本立てで行い、悉皆調査

という利点を活かして石造物調査も実施した。

聞き取り調査は地域住民から小字名、通称地名、伝 承、慣習、屋号等を聞き取ることを目的とし、調査項 目を網羅したカードを作成し、それに記載する方法を 取った。当初、調査範囲は坂出市府中町と加茂町南部 を対象として実施する予定であったが、時間的制約等 もあり、府中町本村地区が調査の中心となった。

文献	香川県 1982	香川県 1982	香川県 1982	香川県 1982	香川県 1982	香川県 1982	香川県 1982	香川県 1982	坂出市 1993	坂出市 1993	坂出市 1993	坂出市 1993	坂出市 1992	坂出市 1992	坂出市 1992	坂出市 1993	坂出市 1995	坂出市 1995	坂出市 1995	坂出市 1995	坂出市 1996	坂出市 2002	坂出市 2003	坂出市 2004	坂出市 2005	坂出市 2008	本稿	
主な出土遺物	上師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器片など	上師器杯・皿・碗、須恵器甕・壺・杯・皿、土師質土器杯・皿・碗・足釜、瓦質土器鉢・甕、瓦器碗、輸入磁器、陶器、緑釉瓦、銅銭、鉄滓、鉄器、石臼、硯、五輪塔など	瓦質土器鉢など	上師質土器・瓦質土器、施釉陶器、輸入磁器、近世陶器、獣骨			瓦など	須恵器杯・皿・円面硯・墨書土器、土師質土器皿・杯・碗、緑釉陶器碗、中国製白磁碗・皿、同青磁碗など				土師器・瓦など	土師質土器片	土師質土器、須恵器、瓦片	土師質土器小皿・皿・杯・足釜、須恵器壺・甕、黒色土器碗、瓦器碗、瓦質土器、 中国産白磁碗・皿、同青磁皿、平瓦片、石憧など	須恵器、土師質土器小皿・杯・足釜、黒色土器碗、瓦質土器碗・捏鉢・甕、瓦器碗、フイゴ羽口、鉄滓、木製品(下駄・箸・漆椀・曲物)、硯	なし	土師器皿、須恵器杯、縄文土器、サヌカイト製石器	なし	土師質土器足釜など	平瓦片など	土師器皿・杯、土師質土器小皿・杯・足釜・擂鉢、中国製青磁碗、短刀	土師質土器小皿・杯・小壺、瓦器碗など	須恵器碗、黒色土器など	なし	土師質土器小皿・杯、黒色土器碗、白磁など	上師賃上器小皿·杯、黒色土器碗、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製磁器(白磁・青磁)、 ホロア ユダ ユギンシン	中日だ、上壁、吹作ると
主な遺構内容	奈良・平安時代と平安後半~鎌倉時代の土坑・溝・柱穴・井 戸など	平安時代後半~近世の柱穴・土坑・井戸・溝状遺構など	古代の柱穴、11~12世紀の溝状遺構	t. 15~16 世紀の・井戸溝状遺構、17 世紀の掘 :坑・溝状遺構など		7 世紀後半の溝状遺構、7 世紀後半~平安時代末の掘立柱建物 須恵器、1跡・柵列、平安時代末~鎌倉時代初頭の掘立柱建物跡・井戸・銅銭など石敷き遺構・土壙墓?近世の溝状遺構など	平安時代中葉前後の溝状遺構、平安時代末~鎌倉時代前半の 瓦など 柱穴・井戸など	平安時代後半の溝状遺構、鎌倉時代前半の柱穴・溝状遺構な ど	平安時代前期~鎌倉時代前半の柱穴・溝状遺構など	平安時代末~鎌倉時代前半の掘立柱建物跡・井戸・溝状遺権 など	平安時代末~鎌倉時代前半の溝状遺構など	なし	古代末~中世前半頃の柱穴と土坑もしくは溝状遺構	なし	13 世紀前半と 12 世紀後半から 13 世紀頃の柱穴群・土坑・溝 状遺構など	12世紀後半から13世紀にかけての掲立柱建物・土坑・方形木組井戸・溝状遺構など	なし	7 世紀後半の柱穴、8 世紀頃の溝状遺構など	なし	平安時代末~鎌倉時代の柱穴・溝状遺構など	古代?の溝状遺構、中世?の柱穴など	10 世紀末頃の土器溜り、12 世紀後半頃の土壙墓、15 ~ 16 世 紀頃の溝沢遺構など	12世紀後半頃の柱穴・土坑・溝状遺構・集石遺構など	包含層	なし	11 世紀以降の柱穴・溝状遺構・集石遺構など	11 世紀後半の水田、12 世紀後半~ 13 世紀前葉の建物群、18 山空後光でカ田	
調査面積		約 200㎡											26m²	4m²	180m²	184m²	17 m²	6m²	7m²	7m²		27.5m²	16m²	2m²	10m²	4.5m²	45 m²	
調査主体	市教委	県教委	県教委	県教委	県教委	県教委	県教委	県教委	市教委	市教委	市教委	市教委	市教委 2	市教委 4	市教委	市教委	市教委	市教委 (市教委	市教委	市教委	市教委 2	市教委	市教委 2	市教委		県埋蔵文化 45㎡	財センター
調査次	神	第2次調査	第3次調査 リ		第5次調査 リ		第7次調査 [第8次調査	第9次調査	第10次調査	第11 次調査	第12次調査	第13次調査	第 14 次調査	第15 次調査	第16次調査	第17 次調査	第 18 次調査		第 20 次調査	第 21 次調査	第22次調査	第 23 次調査		第 25 次調査		第27次調査	,
調査年度	戸	昭和52年度	昭和53年度	1		昭和54年度	昭和55年度	昭和56年度	昭和59年度	昭和63年度	昭和63年度	平成2年度	平成3年度			平成4年度	平成6年度				平成7年度	平成 11 年度	平成13年度	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 19 年度	平成 21 年度	
番号	1	2	3	4	5	9	7	∞	6	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	56	27	

(左端番号は第19図の番号と一致する)

第20表 讃岐国府跡調査区一覧表

調査の結果、坂出市府中町本村地区において讃岐国府や崇徳上皇に関連する地名と由来を採集することができ(第20図)、従前の指摘どおり本村周辺に国府が所在する可能性が高いことを確認した。一方、採集地名の多くが明治~大正期に採集された地名である点には留意すべきである。調査では、「ここには崇徳さんがおって、これは崇徳さんが使っていた井戸や」、「ここは讃岐国府の○○があった場所や」という表現で地名を語る地域住民が多く、採集地名の大多数が明治~大正期における讃岐国府跡や崇徳上皇の顕彰活動、戦後の地域教育等により、府中町本村に讃岐国府が所在したという認識や、鼓岡に崇徳上皇が居住していたという認識に基づき伝承されてきた地名と判断でき、何らかの検証を行わなければ、国府を考える素材とはなり得ないことを示唆する。

一方、宅地や田一筆ごとの通称地名は使用されていない場合が多く、採集地名は二十数例に留まる。採集地名は形状や規模に由来するオゼマチ、サンセモン、所在地に由来するヨツカド、セド、旧状を示唆するイモジ等がある。その他の地名として、土地の起伏を示す地名がある。ミナミガラ、ヒガシガラ、クボ、クボチはいずれも綾川沿いの段丘崖下に広がる低地を呼称した地名で、南川原、東川原、窪(久保)、窪地(窪内)という文字が推測できる。また、字は府中町では500m四方程度の広がりを有する地域共同体の単位としての大字のみが用いられ(本村上所、本村下所、本村中所、北谷、南谷、西山、石井、新宮、綾坂)、他地域で見られる1町ごとといった比較的狭く、限定的な範囲を呼称した小字に相当するものは採集できない。

文献資料の調査はボランティア調査員の自主的調査活動とした。当初は『菅家文草』等の活字化された資料からの古地名抽出を行ったが、江戸期の検地帳(『阿野郡南府中村田畑順道帳』、以下検地帳と呼称)が確認された以降は、その解読と分析を主とした。ここでは、江戸時代の検地帳について報告したい。

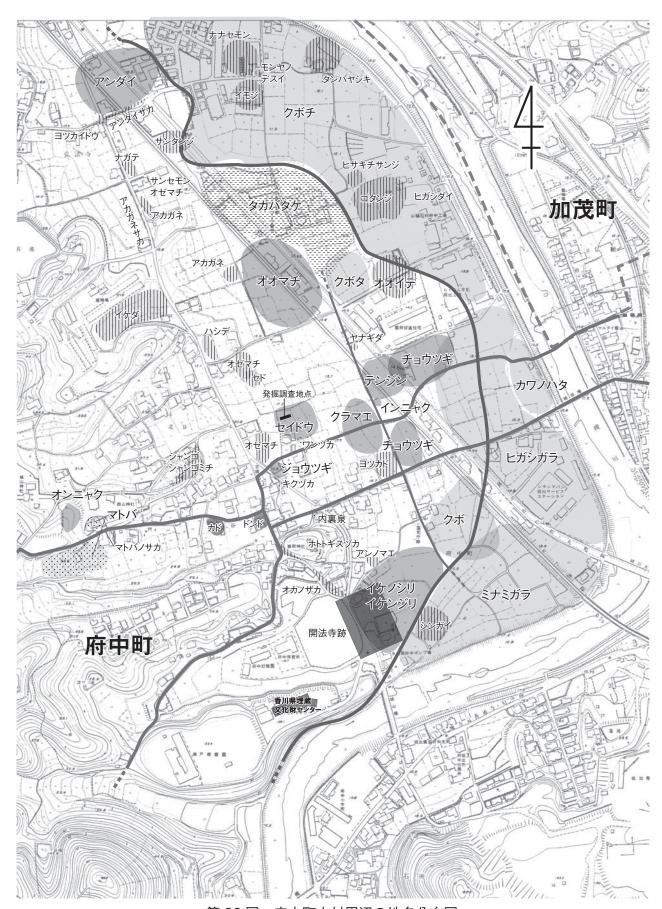
検地帳には田一筆ごとの等級、規模、所有者、水掛に加え、各田の通称地名も明記される。年号表記から 文化2(1805)年の改検地に伴って作成され、その後継 続的に修正加筆されたものと考えられ、記載地名の大 多数は文化2年に遺存ないし使用されていたものと判 断できる。採集地名と比較すると、今回の聞き取り調 査の採集地名として、まとは、南川原、窪、蔵ノ前、 天神、帳継、大町、池田、窪内、あんたい、池尻、高 畑、過去の調査の採集地名として、かきの内、百分、新規確認地名として、かくち、正佛等が検地帳に記載を認める。一方、採集地名にも係わらず検地帳に記載が認められない地名として、インニャク(印鑰)、ジョウツギ(状次)、ショウソウ(正惣・正倉)、セイドウ(聖堂)、セイリュウ(青竜)がある。検地帳の記載地名は田一筆ごとの通称地名や小字的性格を有する地名であるが、これら5地名はこうした性格とは異なる地名ないし文化2年以降に発生した地名と考えられる。

次に聞き取り調査と文献資料の調査成果を踏まえ、 地名調査の成果をまとめるが、紙幅の都合上、倉と国 庁関連に言及する。前者として注目すべきは、国府の 印章とそれをおさめた印櫃の鍵に由来するインニャク 地名である。検地帳に記載はないが、江戸末期の『讃 岐国名勝図会』に印鑰表記がみられ、同書著者が正徳 5(1715)年の『城山神社記』の陰若表記を印鑰へと表 記変化させたのが、印鑰表記の初出となる。その真偽 は明らかではないが、聞き取り調査ではその隣接地に クラマエ地名が採集でき、検地帳でも同地点付近に蔵 ノ前、蔵西添、蔵北添という表記を認め、インニャク・ クラマエ地名周辺に官庫や国印の管理施設等が所在し た可能性は高い。

さらに、その西側にセイドウ地名が所在する。聖堂という字をあて、孔子を祀った堂が所在した場所と伝承される。各地の国府でも郡司の子弟を教育する国学のうち、象徴的な建物である孔子廟に由来した地名がみられ、『菅家文草』にも登場するが、セイドウ地名が孔子廟に由来するかは不明である。注目すべきは、セイドウ地名に隣接したセドという田の通称地名である。セイドウが短縮した形ないし背戸という字に由来した通称地名と考えられ、前者であればセイドウの範囲は100 mを上回る大規模なもの、後者であれば何らかの施設の裏手と推測できる。さらに、セイドウは聖堂のほか、正堂、政堂、正道等の字が推測でき、正堂や政堂であれば国庁との関連が指摘できる。

以上、地名調査からインニャク・クラマエ・セイドウ地名が展開する南北 100 m、東西 200 mの範囲は、国庁や官庫が所在する可能性が高い等、讃岐国府の中で最重要地点となるが、前述したように地名の限界性もあり、採集地名の検証作業とともに、文献資料の悉皆的な調査等よる追証と修正が今後の課題となる。

(松本)



第20図 府中町本村周辺の地名分布図

第3節 地形調査の成果

地形調査の活動内容は、綾川下流域の平野の微地形・ 水利・地割等の地理的情報の収集を行い、讃岐国府と の関連を検討しようとするもので、今年度は府中町と 加茂町を主たるフィールドに調査活動を行った。以下 に、今年度の調査内容と今後の課題について述べる。

地形に関する調査としては、既往の研究成果の検討、 空中写真判読の他、明治前期地籍図に記される地目と 地位等級の分析、府中町本村地区においては水田一筆 ごとの標高の測量、現地踏査等を行った。

香川県内における明治前期の地籍図は、地租改正地 引絵図が村ごとに書式が異なっており、また、未完成 のものが多いため、最初に作成された壬申地券地引絵 図が統一して利用できるものである。調査対象地の明 治地籍図の保存状況は不明であったが、今回の調査に よって坂出市役所の出張所に大半が保管されているこ とがわかった。

明治前期地籍図は、小径や用水路、水利施設の名称 等が記されているものがあり、地割の形状等とともに 歴史資料として貴重な情報を提供してくれる。しかし、 今回の調査対象地の地籍図には、文字史料としての情 報は少なかった。このほか地籍図に記される田や畑等 の地目と上中下等の地位等級に着目して分析を行っ た。田の地位等級は単位面積当りの収穫量の多寡に基 づいているが、その差は乾田と湿田の差による可能性 が考えられる。乾田は微高地、湿田は旧河道に対応す る可能性があるから、地目と地位等級の分布図を作成 すれば、微地形が浮かび上がる可能性があるわけであ る。ただし、この手法が有効であるかどうか十分な検 証を経ているわけではないため、他の手法による検討 結果と合わせて検討する必要がある。

地目と地位等級分析図は、加茂町と林田町について 行い、国府跡が所在する可能性の高い府中町本村地区 では、壬申地券地引絵図が遺存していなかったため、 明治20年代に作成された地押調査更正地図で代替し た。加茂町と林田町の他の手法による分析が進んでい ないため、分析結果の検証を今後進める必要がある。

次に、府中町本村地区について、水田一筆ごとの標 高の測量と用水の取排水状況の調査を行った。水田は、 用水の取排水に順応するため、宅地のように局所的に 盛り土をしたり、地下げをしたりする可能性は低く、 元の地形に従順に造成されていると考えられる。測 量は、当初は GPS による簡便な方式を考えていたが、 オートレベルによる測量となった。

測量データは、20cmごとにグラデーション状に配色して表現した。この結果、綾川に沿う段丘崖と段丘崖下の氾濫原面、段丘崖上の段丘面を把握することができた(これは地籍図の分析でも把握することができた)。氾濫原面は綾川の上流から下流に傾斜する地形面で、段丘面は城山の山麓で、城山から綾川に傾斜する地形面である。堆積物の十分な観察ができていないため推定の域を出ないが、氾濫原面は砂礫からなる綾川の堆積物、段丘面は城山から崩落した堆積物が2次堆積して形成されていると考えられる。なお、標高の配色を変えて、広範囲に平坦地を造成しているような痕跡の抽出を試みたが、今のところ成果は上がっていない。

水利調査は、一筆ごとの取排水状況の調査と、広域な水利状況の調査を行った。府中町本村地区は、南南西約2kmに所在する四手池からの灌漑用水によっているが、用水経路については大きな特徴がある。それは、丘陵斜面の岩盤を穿って水路を設けていたり、丘陵を開析する谷を大きく迂回したりして用水を引いている等、たいへん無理をして用水を引いている点である。また、経路上のため池や渓流も用水に取り込んでいることも特徴である。四手池用水の在り方は、綾川の用水体系との関係も含めて、当地域の開発の歴史を解く糸口になるものとして注目される。

水田一筆ごとの取排水状況の調査は、休耕田を除く 現況についての調査を行い、今後、水利慣行等の聞き 取り調査を行う予定である。取排水状況について、特 に注目されるのは、東西方向の幹線水路が取水には使 用されず排水に利用される傾向のあることである。こ れは、当初は適当な深さに掘削されていた水路が、東 側の氾濫原面(一段低い地形面)が形成された結果、 開析されたため取水に不向きとなってしまったことが 推定できる。氾濫原面の形成年代を知る資料が乏しい 中で、古代末に氾濫原面が形成されたとする他地域の 事例との関連を考える上で貴重な知見である。

以上の調査では、氾濫原面や段丘面といった地形面を抽出することができたが、一部を除いて氾濫原面や段丘面上の微高地や旧河道等の微地形を抽出することはできなかった。なお、これまでの調査成果と国府跡探索との関連であるが、綾川に沿う段丘崖の形成年代が主要な論点となる。推定通りに古代末に氾濫原面が



地籍図の調査



地籍図の調査



地籍図の分析

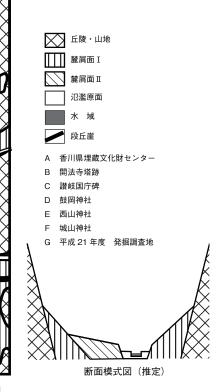


現地踏査

写真 39 ミステリーハンター(ボランティア調査員)による調査風景



第21図 地形分類予察図



形成されたとすると国府の存続期に大きな地形変化があったことになる。菅原道真の漢詩の自註に記されるように開法寺の東に府衙が存在したとすると、部分的に破壊されていたり、移転したりしている可能性もある。

この他、綾川下流域平野に広範に広がる条里型地割、 府中町本村地区の条里型地割と関連する地割の検討に も着手しているが、検討途上である。(木下)

第4節 発掘調査の成果

1. 概要と基本層序

今年度の調査区は、第3次調査区の北約60mの位置にあり、現在田畑として使用されている。現在の地番は、府中町5185番地である。現地表面の標高17.55m、緩やかに東に下る緩斜面の稜線よりやや北に偏した、斜面部に位置する。今年度は、東西15m、南北3mの調査区を設定し、調査を行った。調査地南側は宅地が迫っており、視野は限られるが、古代にあっては開法寺跡を眺望可能な位置にある。なお、本書の遺構名は、調査時のものをそのまま使用した。今後作成予定の本報告において、統一的な名称に改める予定である。

基本層序は、調査区北・東・西壁面において確認した(第22図)。現耕作土(1層)・床土層(2・3層)の下位0.3~0.4 mにおいて概ね水平堆積する各遺物包含層は、淘汰されたシルト~砂層を基本とし、マンガンや鉄分の沈着が連続して認められること、出土する遺物が小片化していること等から、いずれも水田等の作土として利用されていた可能性が想定される。しかし、後述するSZ01・02を除いて明確な畦畔等の区画施設は確認されなかった。

さて、上述した床土層下に堆積する4・5層は、調査区東半部において確認された近世水田面(SZ01)を構成する堆積層である。またSZ01西側では、それ以前に遡る土坑(SK01)と溝状遺構(SD01)を検出している。これらを第1遺構面とする。

第1遺構面のベース層(7・8層)は、中世後半期までの土器等を多量に含む包含層(包含層 I・II)である。本層下面で、柱穴跡、土坑等の遺構を確認し、第2遺構面として調査した。

第2遺構面のベース層(9層)も、中世前半期以前 の土器等を多量に含む包含層(包含層Ⅲ)で、おそら くは第2遺構面造成のための整地土と考えられる。本層下面でも、柱穴跡、土坑等を確認し、第3遺構面とした。

第3遺構面のベース層である12層(包含層IV)は、調査区東端付近でのみ確認された、多量の炭化物や焼土粒等を包含する焼土層で、北東方向へ傾斜して斜面堆積状を呈する。下位の13層上面で被熱の痕跡は認められず、炭化物等は特に南半部に偏在して認められる。おそらく調査区南側より流入した2次堆積層と考えられ、第3面整地時に、上面は大きく削奪された可能性が考えられる。

13層は、古代末頃の水田作土層(SZ02)で、調査 区西端で検出された畦畔により2筆に分けられる。これを第4遺構面aとして報告する。なお、本層は第3 遺構面の遺構を保護するため、一部のみの調査に留めている。

SZ02 作土層の下面で、溝状遺構 1 条 (SD04) を検出した。検出位置は、SZ02 と同じく後述する 16・17 層をベースとし、これを第 4 遺構面 b とする。

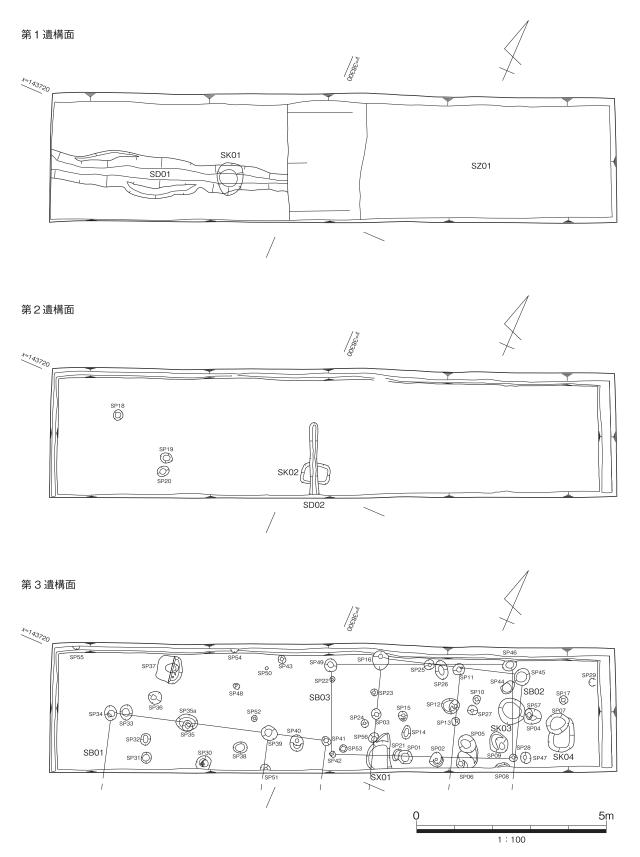
SZ02等のベースとなる16・17層は、調査区全域に 堆積する粗砂質土~砂層で、下位に掘り下げるに従い、 漸移的に砂層へと変化する。層上位は、上面のSZ02 の影響により、顕著なマンガンの沈着を認める。30cm 以上の層厚を有し、風化の進んだ城山産サヌカイトが 出土する以外に明確な遺物を伴わず、明らかに上位の 包含層等とは異なる環境下で堆積したと考えられたこ とから、ベース層と判断し、本層以下の調査は行って いない。

2. 遺構・遺物

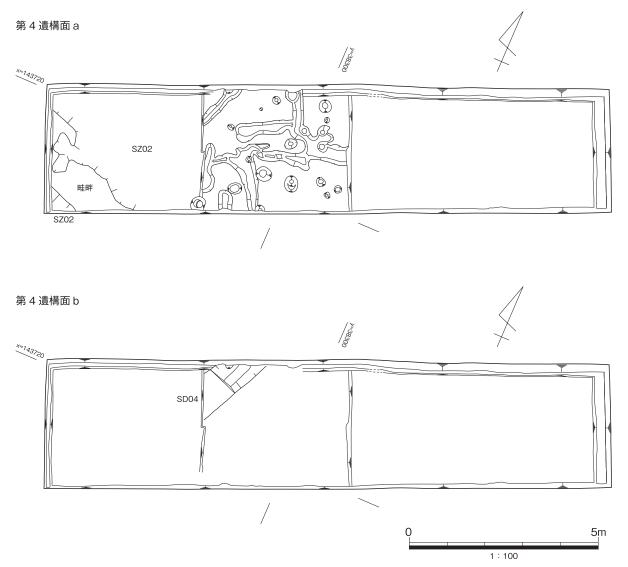
第1遺構面

上述したように、現耕作土・床土層下で検出した遺構面である。溝状遺構(SD01)、土坑(SK01)、水田面(SZ01)を確認した。SZ01 は、調査区東半で検出した落ち込み状の遺構である。緩やかに掘り込まれた西縁肩部は、N 24.24°Wの方向に直線状を呈し、現状地割の方向と一致し、東西長は8.5 m以上を測ること、掘り方底面はほぼ平坦であることから、水田作土層と判断した。おそらく調査地は、棚田状の水田面として東西に分筆されていたと考えられる。遺物に18世紀後半頃の肥前系陶磁器等が出土しており、これを上限とする。また、明治期以降に下る遺物は出土しておらず、下限を幕末~明治初期に求められる。

第22 図 調査区壁面土層断面図



第23図 遺構平面図1



第24図 遺構平面図2

第2遺構面

柱穴跡群、土坑(SK02)、溝状遺構(SD02)を検出した。出土遺物より、13世紀前半頃を中心とした時期が想定できる。

SP18 は、明確な柱痕は確認できなかったが、掘立柱建物跡の柱穴跡と考える。底面より7cm程度浮いて、完形の土師質土器小皿(27)が底部を上に、やや西に傾いて出土した。遺物の出土状況より、地鎮遺構の可能性が考えられる。

SK02 は、整った隅丸長方形の掘り方をもつ土坑である。埋土は単層で、炭化材の細片やベース層ブロック土が含まれ、人為的に埋め戻された可能性が想定できる。遺物は、土師質土器類や土師器盤(40)等が多量に出土した。ほとんどの遺物が、土坑底面からは僅かに浮いて出土していること、遺構内で接合可能な資

料が乏しいこと等から、土坑埋め戻し時に廃棄された 可能性が高いと判断された。

第3遺構面

本遺構面では、多数の柱穴跡群と掘立柱建物跡(SB01~03)、土坑(SK03·04)等を検出した。掘立柱建物跡の柱穴跡と考えられる遺構は約60基に及び、狭小な調査区のため、その多くは建物の復元にまで至らなかったが、頻繁な建替え等がなされていたことが予想される。なお、SB01·02は、調査区の関係上、桁行もしくは梁間の1部しか確認されず、本来は柵列等として報告すべきだが、柱間間隔が揃い、規格的に柱穴跡が配される点等を考慮して、建物遺構として報告する。

SB01 は、梁間と考えられる柱穴跡列が検出された

のみで、建物遺構とは断定できないが、上述した理由により、南北棟の掘立柱建物跡の可能性を想定する。調査区内での柱穴跡の位置から、梁間北列と判断した。 東端の柱穴跡については、他の柱穴跡よりも規模が小さく、また東2穴目との柱間間隔もやや狭く配されることから、庇の可能性を想定している。

遺物は、各柱穴跡から出土しているが、特に SP35 よりまとまって出土している。SP35 の図示した遺物は、いずれも柱穴跡根石の下位より出土したもので、意図的に埋置した地鎮的な性格の遺物が含まれる可能性もある。

SB02も、他の柱穴跡と比較してやや規模の大きな SP03・13を隅柱、やや小さい SP13を床束とそれぞれ考え、SP16・11・45を北側の梁間列とする南北棟の総柱建物跡として復元した。建物主軸方向は、上述した SB01とほぼ一致し、建物間隔の点から、SB01と同時併存した可能性が想定される。なお、さらに東に延長して、東西棟の建物遺構となる可能性も残る。

SB03 は、東西棟の側柱建物跡で、調査後図上で復元した。桁行南列両隅柱は、他の柱穴跡と比してやや小さく、南に延長して、南北棟の建物となる可能性もある。建物主軸方向は、N 66.73° Eと、調査区周辺の条里型地割りの方向と概ね一致し、現状地割りが当該期にまで遡る可能性を示唆する。

SP08・10 は、ともに遺物の出土状況から地鎮遺構の可能性を考える。SP08では、掘り方底面に接して、完形に復元される中国産白磁皿1点(25)が出土した。皿は半截され、一方は口縁部を上にほぼ水平に置かれ、もう一方は破断面を上に立てるように出土した。SP10では、底面より数cm程度浮いて、完形の土師質土器小皿が口縁部を上に、やや東に傾いて出土した。皿の口縁端部付近には、2箇所の煤痕が認められ、灯明皿として使用された後、埋納されたと考えられる。

SP37 は、一辺 0.7 m程度の隅丸方形の掘り方をもつ柱穴跡である。やや北東寄りで、長径約 0.3 mの平面楕円形の柱痕を確認した。掘り方残存深は 7 cmと浅いが、底面は概ね平坦で、断面形は箱形を呈する。他の柱穴跡群とは、掘り方の形状が大きく異なり、時期的に遡る可能性も想定されたが、遺物は土師質土器等の小片が少量出土したのみであり、断定するまでには至らなかった。

土坑は2基(SK03·04)検出した。いずれも埋土中に、 炭化材の細片やベース層のブロック土を多量に含むこ とから、人為的に埋め戻された可能性が想定される。 また、遺物の出土状況に規則性は認められず、土坑底 面から数cm程度浮いて、多くは破砕されて出土してい ること等から、埋め戻しに際し投棄されたと考えられ、 生活残滓の廃棄土坑の可能性が想定される。

なお、平面プランが安定せず、性格不明遺構とした SX01 も、遺物の出土状況等から、SK03等と同様に、 廃棄土坑と考えられる。

第4遺構面a

古代末頃の水田区画(SZ02)を検出した。田面はベース層を水平に削奪して造成され、畦畔部分を帯状に削り残す。田面のベース層上面には、不整方向に掘られた小規模な溝状遺構が多数検出され、鋤溝の可能性が考えられる。

畦畔は、幅 1.06 m、高さ8 cm、主軸方向N 64.36° Wである。主軸方向は、現状の地割りや第 3 遺構面の各建物主軸の方向と一致せず、概略的には周辺地形のコンターラインにほぼ合致し、旧地形を大きくは改変せずに、造成していたことが想像される。また畦畔中央には、田渡しにより西側の田面より給水したとみられる水口が認められた。

遺物は、調査面積が狭小な割には、28ℓ入りコンテナ1箱と比較的多量に出土した。出土した土師器碗や 黒色土器碗等を時期決定の根拠とし、本遺構の時期は 11世紀後半頃を上限とする。

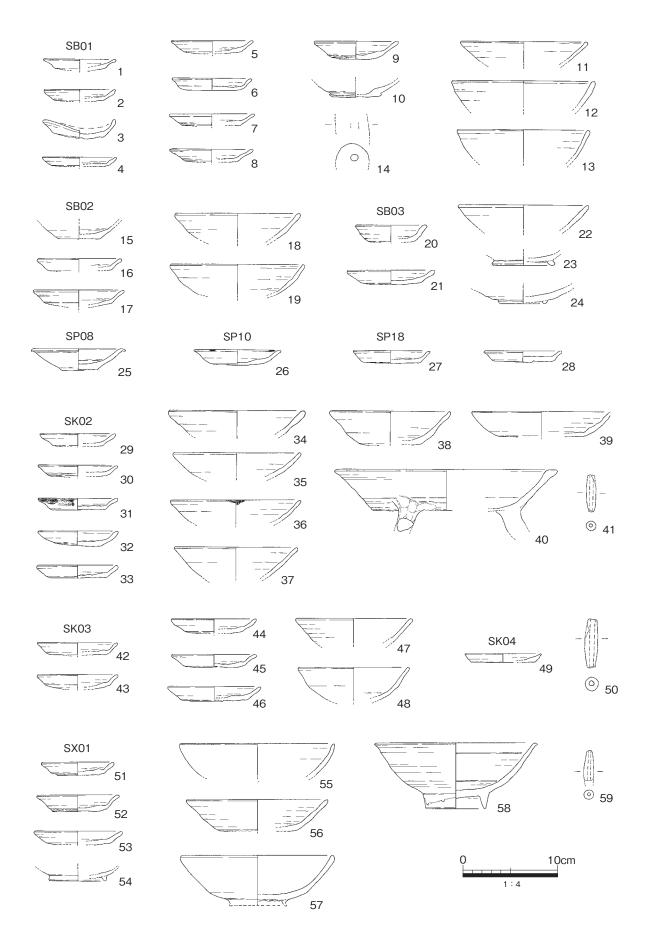
第4遺構面b

上述したように、第4遺構面 SZ02 作土下で検出した溝状遺構(SD04)を、本遺構面の遺構とする。遺物は、小片化した土師器片とサヌカイト剥片が少量出土したのみであり、SZ02 より先行すること以上に、時期を特定することは困難である。しかし、流路方向N 24.96° Eで、SZ02 畦畔と概ね直交することから、SZ02 より大きくは遡らない可能性も想定される。

3. 小結

本調査区では4面に及ぶ遺構面の存在が確認され、 11世紀後半以降、生産域等としての土地利用の実態 が明らかとなった。

特に第2・3遺構面における建物跡群等の検出が注目される。実年代は、今後の詳細な遺物整理の結果を 待つ必要があるが、概ね12世紀後半~13世紀中葉を



第25図 出土遺物実測図

口縁部は大きく歪む □緑端部に2箇所 の媒痕 傾きにやや 頃きにやや難あり 口径にやや難あり 氏径にやや難あり 口径にやや難あり 傾きにやや難あり 底径にやや難あり 口径にやや難あり 大宰府皿IV-1 b類 □縁部歪み顕著 全体に歪み顕著 口径・1 難あり 雷兆 山級 中国・白磁 . H 「 口 縁 部 1/8 以下 口 黎 部 1/8以下 口 黎 第 1/8 内: | 口縁~底部: 回転ナデ?マ | 口縁~底部: 回転ナデ?マ | 口縁部1/8 メン 底囲: 回転ヘラ切 メツ) ワやメツ 口線部 1/8 1縁部 8/8 □縁部 6/8 □縁部 1/8 口縁部 1/8 □縁部 2/8 □縁部 2/8 □縁部 2/8 □縁部 2/8 □縁部 6/8 □縁部 7/8 高台 1/8 底部 1/8 底部 1/8 **韦台 1/8** 体~底部:回転ナデ?マメ ッ |口縁~体部:板ナデ後ミガ| キ? 体~底部: 施釉、沈線状の 段 口縁~体部:回転ナデ・マ 口縁~体部:回転ナデ メッ 底部:回転ナデ?マメツ 口縁部~体部:回転ナテ 口縁~体部:回転ナデ 回転ナデ 口線~底部:回転ナデ 底 口線~底部:回転ナデ面:反時計回りの回転ヘラ 切り後板状圧痕 口縁~底部:回転ナデ 外・内: にぶい黄橙色 口縁~底部: 回転ナデ 底 口縁~底部: 回転ナデ 10VR7/4 面: 反時計回りのヘラ切り 回転ナデ 底 口縁~底部:回転ナデ 口縁~体部:回転ナデ 回転ナデ 底 口縁~底部: 回転ナデ 底 口縁~底部:回転ナデ 底|口縁~底部:回転ナデ 底部:ミガキ?マメツ 口縁~底部:插釉 底面: 口縁~底部: 施釉 露胎、反時計回りの回転へ ラ切り 外: に ぷ い 貴 橙 色 口縁~底部: 回転ナデ 底 口線~底部: 10VR6/3 内: にぷい質 面: 時計回り?の回転ヘラ 褐色 10VR5/3 切)後ナデ 色 口縁~底部:回転ナデ 底 口縁~底部: | 面:回転へう切り?後ナデ | □縁~体部 体~底部:回転ナデ?マメッ 底面:回転ヘラ切り?マメッ 体~底部: 施釉 底面: 回 転ケズリ? 後ナデ 底部~高台:回転ナデ・3 コナデ、マメツ 口縁~底部:回転ナデ 面:回転ヘラ切り後ナデ 口縁~底部:回転ナデ) 面:回転へう切り後ナデ 外: 灰黄褐色 10XRS/2 口縁~底部: 回転ナデ 内: 灰黄 褐 色 面: 回転ヘラ切り? 10YR6/2 口縁~底部:回転ナデ 面:回転へラ切り? | 口縁~底部:回転ナデ |面:マメツ 口縁~体部:回転ナデ 口縁~体部:回転ナデ 外:浅 貴 橙色 10XR8/4 | 口縁~体部:回転ナデ 内:淡黄色 25X8/3 口縁~体部:回転ナデ 外: にぶい橙色 7.5YR7/4 | 口縁~底部:回転ナデ 内: 浅黄橙色 7.5YR8/4 | |口縁~体部:回転ナテ 外: 浅黄橙色 10YR8/4 高台: ヨコナデ 内: 暗灰色 N3/0 御 #I 外: にぶい黄橙色 10YR7/3 内:浅黄橙色 10YR8/3 外:黒褐色 2.5Y3/2 内: にぶい黄褐色 10YR5/4 外・内: 橙色 7.5 XR6/6 **外・内:灰白色 2.5Y8/2** 外·内:橙色7.5YR7/6 外: 灰白色 10YR8/2 内: 浅黄橙色 10YR8/3 外: 灰白色 10YR8/2 内:浅黄橙色 10YR8/3 釉: オリーブ灰 2.5GY7/7 胎: N8/0 外:浅黄橙色7.5YR8/ 内:橙色7.5YR7/6 外・内: 灰白色 5Y7/1 **外・内:灰白色 5Y8/1** 浅黄橙 廻 Ш 釉:灰白色7.5Y7/1 白色 外: 橙色 7.5YR7/6 灰白色 10YR8/2 浅黄 ĸ 外・内: 10YR8/3 外· 内: 10YR8/2 外· 内: 10YR8/4 やや粗:20mm以下の石英粒等をや やや散 や多量に含 やや粗:15mm以下の石英粒等をや 良好 や多量に含 やや粗:20mm以下の石英粒等をや 良好 や多量に含 良好 良好 良好 良好 やや密:20mm以下の石英粒等を若 良好 干量含 良好 良好 やや粗:1.0mm以下の石英粒等を多 良好量に含 良好 良好 良好 良好 良好 やや密:1.5mm以下の石英粒等を若 | 良好 干量含 良好 良好 良好 良好 やや密:1.0mm以下の石英粒等を若 | 良好 F量含 良好 良好 密:1.0mm以下の石英粒等を極少量 含 やや密:15mm以下の石英粒等をやや多量に含 やや粗:15mm以下の石英粒等をや や多量に含 やや粗:15mm以下の石英粒等をや や多量に含 1.5㎜以下の石英粒等を若 密:1.5mm以下の石英粒等を少量含 密:1.0mm以下の石英粒等を少量含 密:1.0mm以下の石英粒等を少量含 密:1.5mm以下の石英粒等を少量含 密:1.0mm以下の石英粒等を少量含 密:1.5mm以下の石英粒等を少量含 密:1.0mm以下の石英粒等を少量含 密: 1.0mm以下の石英粒等を少量含 密:1.0mm以下の石英粒等を少量含 密: 1.0mm以下の石英粒等を少量含 2.5mm以下の石英粒等を少量含 やか 単か 回か ... E 盌 (5.4)底径 7.8 5.5 4.5 7.2 1.8 6.3 4.6 0.9 6.1 6.3 5.1 5.5 6.3 5.4 5.4 6.1 (2.1) 1.3 2.0 2.3 (8.1) 4.8 13.2 13.9 12.9 13.9 0.01 13.4 7.5 上師器・円盤高台碗 上師質土器・小皿 土師質土器・小皿 上師質土器・小皿 一腕か 施か 上師質土器・小皿 上師質土器・小皿 上師質土器・碗か 上師質土器・杯か 上師質土器・碗か 土師質土器・ 上師質土器・ 上師質土器· 上師質土器· 上師質土器・ 土師質土器・ 上師質土器・ 上師質土器・ 上師質土器・ 上師質土器 土師質土器 上師質土器 須恵器・碗 須恵器・碗 黒色土器: 照・器類 照・ 器翅 柱痕 層位 体源 柱痕 柱痕 柱痕 柱痕 柱痕 握方 掴方 (SP35) (SP35) (SP35) (SP35) (SP35) (SP39) SB01 (SP39) (SP41) (SP34) (SP41) (SP34) SB03 (SP02) SB03 (SP02) SB02 (SP45) SB02 (SP13) SB02 (SP16) SB02 (SP16) SB02 (SP11) SB03 (SP46) SB03 (SP49) SB03 (SP02) SB01 (SP41) 遺構名 SB01 SB01 SB01 SB01 SP10 SB01 SB01 SB01SB01 SB01 SB01SB01 SP08 SP18 報文番号 12 13 18 19 22 23 74 23 26

第21表 出土土器等観察表1

第22表 出土土器等観察表2

備考				口緑端部に煤痕				口径・傾きにやや 難あり	口緑端部に煤痕				破断面を含め一部 に被熱痕					口縁やや歪みあり		口径にやや難あり	底径にやや難あり				
産地等									8/		8/									8/					
残存率	7 口縁部 7/8	□縁部 1/8	□縁部 2/8	口縁部 3/8	完	口緣部 3/8	口縁部 1/8	□縁部 1/8	口 篠 將 1/8以下	口縁部 2/8	口 錄 幣 1/8 以下	口縁部 1/8	口縁部 2/8	口縁部 1/8	口緣部 1/8	口綠部 1/8	口縁部 3/8	口縁部 3/8		□ 線 部 1/8 以下	底部 1/8	口縁部 1/8	完	口縁部 1/8	高台 1/8
内面	□線~底部:回転ナデ・マ メツ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁部:回転ナデ	口縁~体部:回転ナデ	口縁部:回転ナデ	口縁部:回転ナデ・マメツ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁部:回転ナデ	口縁部:マメツ・ハクリ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	口縁~底部:回転ナデ	底部:マメツ・ハクリ
	3 口縁~底部:回転ナデ? 底面:時計回りの回転ヘラ 切り・マメツ	3 口縁~底部:回転ナデ 底 面:回転へラ切り後ナデ?	3 口縁~底部:回転ナデ 底 面:回転へう切り後ナデ?	口縁~底部:回転ナデ、底 面:反時計回りの回転ヘラ 切り	2 口線~底部:回転ナデ 底 面:反時計回りの回転ヘラ 切り後ナデ	口縁~底部:回転ナデ 底 面:反時計回りの回転ヘラ 切り後ナデ	5 口縁部:回転ナデ	口縁~体部:回転ナデ	口縁部:回転ナデ	色 口縁部:回転ナデ・マメツ	日縁~底部:回転ナデ 底 面:回転ヘラ切り後ナデ?	2 口縁~底部:回転ナデ 底 5 面:回転へう切り?	: 口縁~底部: 回転ナデ 底 面:ナデ・ヨコナデ 脚部: 押圧・ナデ	: 口縁~底部: 回転ナデ 底 面: 時計回りの回転ヘラ切り 後板状圧痕	: 口縁~底部: 回転ナデ 底 面: 回転ヘラ切り後板状圧 痕後ナデ		5 口縁~底部: 回転ナデ 底 面: 時計回りの回転ヘラ切り後ナデ	色 口縁~底部:回転ナデ 底 面:時計回りの回転ヘラ切 り後板状圧痕	口縁部:回転ナデ	色 口縁部:マメツ・ハクリ	口縁~底部: 回転ナデ 底 面: 回転へラ切り?後ナデ	: 口縁~底部:回転ナデ 底 口面: 回転へラ切り後板状圧 道: 回転へラ切り後板状圧 痕	4 口縁~底部:回転ナデ 底 面:時計回りの回転ヘラ切り後ナデ		
色調	外:浅黄橙色 7.5YR8/3 内:灰白色 7.5YR8/2	外·内:浅黄橙色 7.5YR8/4	外·内:浅黄橙色 10YR8/3	外·内:橙色	外·内:灰白色 7.5YR8/2	外・内:淡黄色 25Y8/4	外・内:にぶい黄橙色 10YR7/2	外: 灰白色 10YR8/2 内:淡黄色 2.5Y8/3	外・内:橙 5YR7/6	<u>外・内: 灰 白 色</u> 10YR8/2	外・内: 灰白色 2.5 Y 8/2	外: 灰黄褐色 10YR5/2 内: 浅 黄 橙 色 10YR8/3	外: 橙色 5YR6/6 内 橙色 7.5YR7/6	外:淡黄色 2.5Y8/3 内: 浅黄橙色 10YR8/4	外: 橙色 7.5YR6/6 内 浅黄橙色 7.5YR8/4	外·内:浅黄橙色 7.5YR8/4	外·内: 浅黄橙色 10YR8/3	外・内:	外・内: 灰白色 2.5Y8/2	外·内:浅黄橙(107R8/3	外: にぶい黄橙 色 10YR7/2 内: 灰黄褐色 10YR5/2	外:浅黄色 2.5Y8/3 内: 浅黄橙色 10YR8/3	外:にぶい橙色7.5YR7/4 内:橙色5YR7/6	外: 浅黄橙色 7.5YR8/4 内:浅黄橙色 7.5YR8/3	外:灰白色 2.5Y8/2 内 灰白色 2.5Y8/1
焼成	やや軟	岩良好	少良好	良好	や良好	良好	良好	良好	良好	良好	や良好	含 良好	良好	良好	良好	や良好	良好	良好	良好	多良好	良好	良好	若良好	若 良好	岩良好
胎土	密:1.0mm以下の石英粒等を少量含	やや密:1.0mm以下の石英粒等を若 干量含	やや粗:30mm以下の石英粒等を少 量含	密:1.5mm以下の石英粒等を少量合	やや粗:15mm以下の石英等をやや 多量に含	密:1.5mm以下の石英粒等少量含	密:1.5mm以下の石英粒等少量含	密:2.0mm以下の石英粒等を少量含	密:1.5mm以下の石英等を少量含	密:1.0mm以下の石英粒等を少量含	やや粗:30mm以下の石英粒等をや や多量に含	密:1.5mm以下の石英粒等を少量合む	密:20mm以下の石英粒等を少量含	密:1.5mm以下の石英粒少量含	密:1.0mm以下の石英粒等少量含	やや粗:8.0mm以下の石英粒等やや 多量に含	密:1.5mm以下の石英粒等を少量合	密:1.0mm以下の石英粒等少量含	密:20mm以下の石英粒等少量含	やや粗:1.5mm以下の石英粒やや多量に含	密:1.0mm以下の石英粒等少量含	密:1.0mm以下の石英粒等を少量含 	やや密:1.5m以下の石英粒等を若 干量含	やや密:1.5mm以下の石英粒等を若 干量含	やや密:1.5mm以下の石英粒等を若 干量含
底径	9.9	5.3	6.1	5.5	4.9	0.0					6.5			5.8	6.9	6.2	6.1	6.8			6.8	5.2	5.5	8.9	5.8
盟	1.2			1.25	1.6	1.3											1.4	1.6			6.0	1.4	1.8		
口径	7.9	6.7	8.3	8.2	8.3	8.3	14.1	13.3	13.5	12.7	12.5	14.6	21.4	8.4	8.2	8.9	8.5	9.6	12.1	11.5	8.0	7.4	8.5	9.2	
層位 器種	上師質土器・小皿	上師質土器・小皿	上師質土器・小皿	上師質上器・小皿	上師質上器・小皿	上師質土器・小皿	上師質土器・杯	上師質土器・杯か	上節質土器・皿	上師質土器・碗か	上師質土器・杯	上師質上器・杯	上節器・盤	上師質上器・小皿	上師質土器・小皿	上師質土器・小皿	上師質上器・小皿	上師質上器・小皿	上師質土器・碗か	上師質土器・碗	上師質土器・小皿	上師質土器・小皿	上師質上器・小皿	上師質土器・小皿	上節質土器・碗
	SP18	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK03	SK03	SK03	SK03	SK03	SK03	SK03	SK03	SX01	SX01	SX01	SX01
報文番号 遺構名	88	83	8	31	32	R	34	32	98	37	88	68	40	42	43	44	45	46		48	49	51	25	53	54

備考	口径にやや難あり	口径・傾きにやや 難あり		大宰府白磁碗 N - 4·a類
産地等			十瓶山窯跡群	中国・口鏺
残存率	口線部1/8以下	口縁部 1/8	高台 3/8	高台 4/8
内面調整	口縁~体部:マメツ	口縁~底部: 回転ナデ・マ メツ	□縁~底部:マメツ・ハク リ	□縁~底部:施釉・沈線2 条
外面調整	口縁~体部:マメツ	外・内: 浅 貫 橙 白 (口縁~底部:回転ナデ・マ 口線~底部:回転ナデ・マ 口縁部1/8 10Y I88/3 メツ 底面:回転ヘラ切り メツ	外・内:灰白色 25787 口縁~高台:マメツ・ハク 口縁~底部:マメツ・ハク 高台 3/8 リ	釉:灰白色1077/1 胎:口縁~高台:施釉 高台内: 口縁~底部: 施釉・沈線2 高台4/8
色調	外: 浅黄橙色10YR8/4 口線~体部:マメツ 内: にぶい黄褐色 10YR5/3	外・内: 浅黄橙色 10YR8/3	外・内:灰白色 2.5Y8/1	釉:灰白色10Y7/1 胎: 灰白色 N7/0
焼成	良好	やや軟	兼	良好
	やや粗:15m以下の石英粒等をや 1 や多量に含	密:1.0mm以下の石英粒等を少量含	密:1.0mm以下の石英粒等を少量含	1
底径		8.4		6.4
器				2.0
四	16.2	14.7	15.9	17.3
器種	上師質土器・杯	土師質土器・杯	須恵器・碗	磁器・碗
層位				
遺構名	SX01	SX01	SX01	SX01
報文番号	55	29	57	288

& I

第23表 出土土器等観察表3

備考	土錘以外の可能性			
残存率	小片	全体 7/8	全体 7/8	全体 5/8
外面調整	メントリ状の板ナデ	ナデ・マメツ	ナデ	ナデ・マメツ
色調	にぶい黄橙色 10YR7/4	橙色 2.5YR7/6	黒褐色 10YR3/2	にぶい赤橙色 10R6/4 ナデ・マメツ
焼成	良好	良好	良好	良好
	やや粗:1.0mm以下の石英粒等をやや多量 良好 に含	やや粗:1.5mm以下の石英粒等やや多量に 含	密:1.0mm以下の石英粒等少量含	密:1,5mm以下の石英粒等少量含
重車	21.33 +	3.82 +		2.84 +
孔径	0.65	0.35	0.5	0.25
最小径		0.75	0.75	0.65
最大径	3.6	1.0	1.35	1.05
長され	2.9+	3.9	5.3	42+
器種	管状土錘?	管状土錘	管状土錘	管状土錘
層位	P39) 柱痕			
遺構名	SB01 (SP39)	SK02	SK04	SX01
報文番号	14	41	20	29

出土土錘観察表

表

24

揺

中心とした時期が予想される。また、28ℓ入りコンテナ29箱出土した遺物の半数以上が、当該時期に属するものである。本調査区周辺においては、当該時期が土地利用の大きな画期であったことは間違いない。以下、詳細は今後の本報告に譲るが、建物跡群について所見をまとめておく。

まず建物跡の主軸方向は、SB01・02と SB03 の 2 者が認められる。後者の方向は、第 2 遺構面 SD02 の流路方向、つまり現状の条里型地割りの方向と合致することから、SB01・02→ SB03 の変遷の可能性が想定される。つまり建物跡主軸は、建物群存続(第 3 遺構面)の時期幅の中で、調査区周辺の条里型地割りと合致する方向へと、変更されている可能性がある。なお、各建物跡は有意な方向性を有していることから、建物跡群周囲には、建物跡を囲繞する何らかの区画施設が存在、つまり一定エリアが建物跡群敷地として区分されていた可能性も考えられる。

建物跡規模は、今回の調査で確認されたものについては、床面積 30㎡以下と復元される可能性が高く、大型建物跡は含まれない。柱穴跡規模も、直径 30cm程度のものが一般的で、大型の掘り方をもつものはない。また、重複する柱穴跡も乏しく、同じ位置での建物の建替えの頻度は乏しかったと想像される。さらに、SB01 と SB02 の主軸方向は近似するが、両建物跡間の柱穴跡配置に、古代の官衙遺構にみられるような規格性は窺えない。

建物跡以外の遺構では、生活残滓の処理施設としての廃棄土坑がある。土坑は、概ね東半部に集中するものの、多くは建物遺構と重複し、数は乏しくかつ小規模で、遺物量も少なく、継続的な廃棄行為を窺うことはできない。つまり、生活残滓の廃棄は、敷地内部の余白地への一過性のものであったと考えられる。

以上の点から、建物跡群敷地全域へと、どの程度普遍化できるかは問題ではあるが、建物跡位置や規模等、敷地内部の空間構造は、固定・規格化されてはいなかった可能性が窺える。

遺物の面では、統計的な処理は行えていないが、輸入磁器類の出現頻度はやや高い傾向が窺え、また土器類全体に占める供膳具の割合も高い傾向が認められる。この点は、比較資料に乏しく、遺跡の個性を現状では抽出し難い。今後の課題である。

一方で、数個体の灯明皿や盤といった、用途が限定 される遺物や、包含層出土資料が多数を占めるものの、 土錘や鉄滓、砥石等の生産関係の遺物も出土しており、 調査区周辺で多様な階層や職掌を担った人々が活動し ていた可能性を物語っている。

ここで視点を広げ、周辺の調査区の様相を見てみる。 $12\sim13$ 世紀代の建物跡等の遺構は、第 $1\sim4\cdot6\cdot7\cdot9\cdot13\cdot15\cdot16\cdot21\sim23\cdot26\cdot27$ 次調査の各調査区 において検出されている。これら調査区では、若干の遺構の粗密はあるものの、ほぼすべての調査区で柱穴 跡群が確認され、調査区周辺へも普遍化できる可能性を示している。建物遺構以外には、土坑、井戸跡(第 $6\cdot7\cdot16$ 次調査区)、土壙墓(第 22 次調査区)等が検出されており、内部に居住空間が存在したことが 想定される。

どの程度の建物が同時併存していたか、時期的な問題を解決する必要はあるが、これら調査区を包摂する約250m四方エリア全域が、遅くとも12世紀頃には居住空間等として開発・造成されていた可能性も想定される。香川県内の他の遺跡には見られない、居住区画の集中的様相を認めることができる。

現在、このエリアのほぼ中央には、地元で「セイリュウ」と呼ばれる、綾坂を越えて国分寺に至る市道が、東西に貫通する。木下良氏は、この古道を古代南海道とされた(木下 1977)。

一方、金田章裕氏は、木下氏の説を「阿野郡の北部で復原された条里プランと合致する里界線の位置と大きくずれる」ことを根拠に否定し、南約 150 mの位置に南海道を想定する(金田 1995)。

両氏とも、南海道に措定する論拠が、必ずしも明示されているわけではなく、さらに発掘調査によっても、確実な道路状遺構は確認されておらず、現状では南海道の位置を特定することは非常に困難である。しかし、いくつか断片的な情報は得られているので、以下にその可能性を探ってみる。

第7次調査では、調査区北部で、現状の地割に合致する「平安時代中頃」の2条の溝状遺構が確認され、「築地跡」として報告された(香川県1982)。しかし、提示された土層図によれば、2条の溝状遺構は、時期差をもって埋没したことが明らかであり、築地跡の可能性は低いと判断される。

また、第15・16次調査の調査区においても、地割に合致する東西方向の溝状遺構が確認され、平安時代末~鎌倉時代の埋没が推定されている(坂出市1992、

同 1993)。

これら地割に合致する東西方向の溝状遺構は、いずれも木下説に近い位置から見つかっており、それから大きく外れる位置では、東西方向の溝状遺構はみられないか、あっても現状の地割の方向とは異なるか、規模が小規模なものが多いようである。つまり、古代南海道が本村地区を東西に通過していたことを前提とするなら、上記した調査区の溝状遺構に、古代~中世初期の南海道の側溝が含まれる可能性は否定できないと考える。

一方、木下説を西に延長した、南谷の谷部に見られる地割は示唆的である。この地割を詳細に観察すると、南谷を下る谷川は、谷中央部ではなく、鼓岡神社の所在する丘陵の北辺、つまり谷の南縁に固定され、やや蛇行しながら北西方向に流下しており、その北側には、明らかに人工的に造成された幅約15mの平坦地が谷奥へと連続している(写真図版4)。この掘割状の平坦地地形の造成時期や目的は明らかではなく、その特定には発掘調査等を実施する必要があるが、この地形が南海道に関係する遺構である可能性も想定できる。

以上の検討から、12~13世紀代の建物跡群は、南海道といった陸上交通と、綾川を介した舟運との結節点に所在すると考えられる。この建物跡群の性格を、実証的にどのように位置付けるのかが今後の大きな課題となる。当該地区の調査は、個人住宅の改・新築を契機とした緊急調査が主体を占めるため、調査箇所は断片的で、調査内容も検討に耐え得るように資料化されているとはいえない。今後、こうした過去の調査資料の再整理も、併行して進める必要がある。

第5節 関連調査の成果

讃岐国府が所在した綾川流域には、旧石器時代以降の多くの遺跡が点在する。そのうち発掘調査が実施され、詳細な報告書が刊行された遺跡は数少ない。大半の遺跡は、地元の研究者等によって遺物が採集され、これまであまり資料化されることもなく、資料館等に保管されてきた。

今回の調査を契機として、これら考古資料について、 関連資料調査として図化・写真撮影等を実施すること とした。これまでに調査を実施したのは、鼓ヶ岡文庫、 坂出市郷土資料館、鎌田共済会郷土博物館、滝宮天満 宮、個人が所蔵する、古墳時代から中世の出土資料約200点である。調査に当っては、所蔵者等関係各位に格別のご配慮を賜った。記して、感謝申し上げる次第である。今回は、それらの中で、鼓ヶ岡文庫と田村久雄氏、鎌田共済会郷土資料館がそれぞれ所蔵する資料の一部について報告する。今回掲載できなかった資料については、機会を改めて報告することとしたい。

鼓ヶ岡文庫所蔵資料

いずれも正式な調査による出土品ではなく、あくま でも採集品であり、収蔵後の混乱も予想される。

 $60 \sim 70$ は、新宮古墳出土の須恵器である。 $65 \cdot 66 \cdot 68 \cdot 70$ の器表面に、「新宮古墳」の墨書があり、その他の資料は新宮古墳と書かれたラベルとともに展示されていた。いずれも完形もしくはそれに近い状態の資料であり、古墳の副葬品であることは確実であろう。 $60 \cdot 61$ 、 $62 \cdot 63$ は、それぞれセットとして展示されており、時期的な面でも矛盾はない。4 点の杯類の中で、 $62 \cdot 63$ の杯類が古く T K 43 型式期に、 $60 \cdot 61$ の杯類は T K 209 型式期新相 \sim T K 217 型式期古相に、それぞれ位置付けられる。杯類以外の資料は、 T K 209 型式期を中心とした時期に位置付けておきたい。

特徴的なのは、 $64\cdot65\cdot67\sim70$ の小型の一群で、 副葬専用に特化して製作された可能性が考えられる。 想像を逞しくすれば、古墳の被葬者とこれら須恵器工 人とのつながりも想定され、これら資料が新宮古墳か らの出土品であることが断定できれば、被葬者像を考 える上で重要な資料となろう。

新宮古墳の副葬品については、羨道より出土した資料が既に報告されている(川畑・渡部 2008)。報告者は、羨道出土須恵器がTK 209~TK 217型式期であり、この年代と石室構造から、TK 209型式期の古墳の築造を推定している。

それら資料と比較すると、文庫所蔵資料に時期的に 古く位置付けられるものが含まれ、古墳の築造時期も 遡らせる必要が生じてくるが、この点は今後の調査に 委ねたい。

87・88 は耳環、89 は管玉である。いずれも和紙に包まれて、62・63 の須恵器に収めて展示されていた。新宮古墳の資料とみられるが、断定はできない。耳環・管玉以外に、鉄製とみられる径 1.5cm程度の球状の金属器が同包されていたが、時期・用途が不明のため、

掲載していない。 2点の耳環は、いずれも銅芯金張り中空の環で、箔は良好に遺存する。また、いずれも接部端面の箔が剥離しており、中空の状態が確認できる。外径や断面径が僅かに相違するものの、素材や箔の状態等は近似しており、一対のものである可能性は高い。87 は、上下長 2.19cm、左右幅 2.29cm、左右内径 1.30cm、断面径 0.48~0.65cm、重量 5.39 g。88 は、上下長 2.19cm、左右幅 2.34cm、左右内径 1.21cm、断面径 0.56~0.69cm、重量 5.27 g。管玉は、軟質緑色凝灰岩製とみられる。 X線写真では、鉄製工具による片面穿孔と判断された。長さ 1.94cm、径 0.71cm、孔径 0.29cm、重量 1.27 g。

71・72 は城山古墳出土とされる資料である。現在城山古墳とされる古墳は確認できず、早くに亡失したか、現在までに名称が変更された古墳からの出土資料と考えられる。72 の器表面に古墳名が墨書されている。状態から、いずれも古墳出土の副葬品として大きな矛盾はない。概ねTK 43 型式期新相~TK 209 型式期古相に位置付けられると考えられる。

73 の内面には、「本郡西庄村開墾地ニテ採取 昭和 □年三月 寄附人 字迯田藤井小太郎」と墨書された 和紙が貼付されている。おそらく西庄町付近の古墳からの出土資料であろうが、具体的な古墳名は不明。□ 径等の点で、後述する出土遺跡不明の 75 とセットと なる可能性がある。 T K 43 型式期新相と考えられる。

74 は、西庄古墳出土とされる資料で、器表面に古墳名が墨書されている。西庄古墳も、現在その所在は確認できない。脚部を欠損する以外は完形品で、古墳の副葬品として無理はない。なで肩の肩部に明瞭な沈線を施す点等から、T K 209 型式期を中心とした時期に位置付けられる。

75~86 は、西庄古墳や城山古墳、讃岐国庁跡出土の資料として展示されているが、個々の資料に出土地の記載がなく、出土遺跡不明の資料として報告する。完形品の資料が多く、80・84~86 に一部欠損した資料が含まれるが、すべて古墳の副葬品として問題はない。 TK 43~TK 217 型式期を中心とする多様な時期の遺物を含み、複数の古墳の資料が混在している可能性も考えられる。

90・91 は、出土地不明の須恵器で、いずれも十瓶山窯跡群の製品である。90 は、広口形態の壺で、口縁部の一部を欠損する以外は完形である。口縁端部は肥厚せず四角くおさめ、端面に浅い1条の沈線を施す。坂出市三ツ松遺跡や塩口遺跡等、同形態の壺を骨蔵器

として使用した火葬墓が、旧阿野郡域を中心に確認されており、本例も状態から骨蔵器として使用されたと考えられる。91 は、口縁部を欠損する以外は完形の甕。外面には底部より螺旋状に格子タタキが施される。状態より、一般の集落遺跡や生産地からの出土品である可能性は低く、火葬墓骨蔵器や経塚外容器としての使用が想定されるが、類例に乏しく断定はできない。いずれも12世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

92 は、完形の須恵器短頸壺で、体部中位を焼成後穿 孔する。体部外面に「國廰址」の墨書があり、国府域 より出土した可能性が高いが、完形品であることから、 疑問が残る。儀器化されており、何らかの祭祀遺構に 伴う可能性も考えられる。

93~98は、中世土師質土器で、積み重ねられて展示されており、97の内面に、「昭和□(七ヵ)年五月 土器六点 字猫山 藤井亀三郎田畦畔 發掘」と墨書された和紙が貼付されている。点数が合致することから、すべて府中町猫山の出土品と考えられるが、後述する出土地不詳の土師質土器もあり、収納後に資料が混乱した可能性も考慮しなければならない。ただし、時期的には、13世紀後半を中心とした一括出土品としてよい。すべて完形品であり、何らかの埋納遺構に伴う遺物と考えられる。猫山周辺では、現在までに遺跡等は確認されておらず、出土位置や性格について特定することはできない。

99・100 は、東梶遺跡出土の中国製磁器である。いずれも完形品。99 は、龍泉窯系碗 I - 1 類、100 は、同皿 I - 1・b 類である(横田・森田 1978)。東梶遺跡は、綾川河口付近三角州帯の微高地上に立地する(香川県2007)。発掘調査がなされていないため、遺跡の詳細は不明である。資料の状態や出土地より、集落内の中世墓の副葬品であった可能性が想定される。

 $101 \sim 105$ は、出土地不詳の中世土師質土器である。いずれも完形品で、埋納遺構等からの出土の可能性が想定される。時期的には、12 世紀代を中心とする $102 \cdot 103 \cdot 105$ と、13 世紀代を中心とする $101 \cdot 104$ に大別でき、複数の遺跡からの出土品が混在している可能性も想定される。

106~115は、瓦類である。文庫には、掲載した以外に、 開法寺跡、讃岐国府跡、府中・山内瓦窯跡等から出土 したとされる平・丸瓦類が多数展示されている。それ らについては、今回は調査を見送り、軒瓦類について のみ報告する。以下、瓦の型式番号については、高松 市資料館の呼称を使用する(高松市 1996)

106・107 は、高句麗系の十葉素弁蓮華文軒丸瓦 (KH101)で、107の丸瓦部凸面に「府廰瓦」と墨書され、106とともに「国庁跡遺瓦」として展示されている。しかし、後述するように、瓦の年代観や近年の調査資料から、国庁施設の所要瓦ではなく、開法寺創建時の瓦と考えられる。106と107は、2箇所確認される笵傷から同笵とみられる。106の瓦当厚は、内区で1.2cmと薄く、107は同2.0cmとやや厚い。現状で確認できる他の出土資料は、前者が多数を占めるようだ。以下、前者を KH101a、後者を KH101b と呼称し、前者が時期的に先行すると考える。

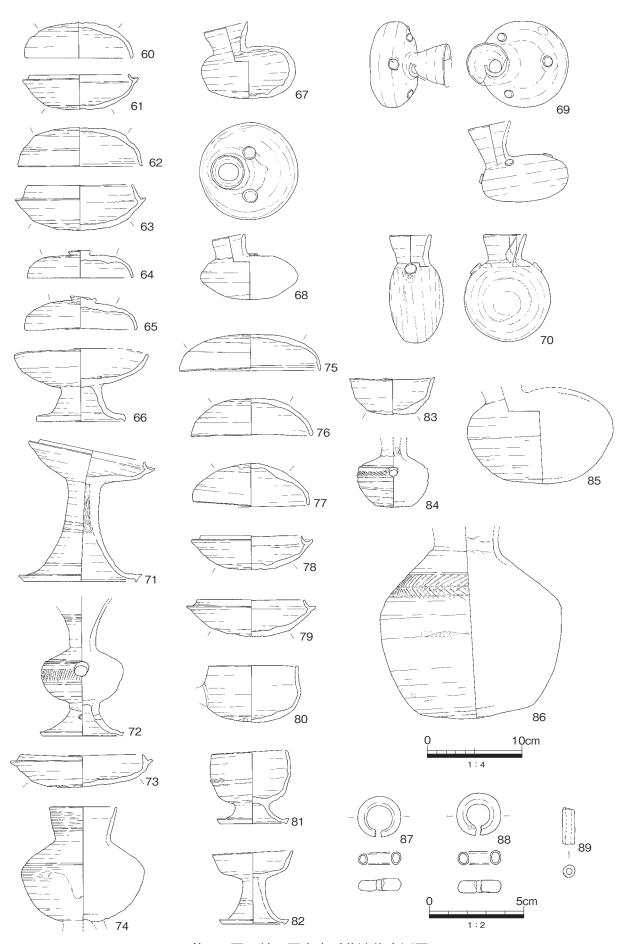
さて、開法寺 KH101 は、比較的小さな中房に1+5の蓮子を配し、突線のみで表現された平面的な花弁は十葉に細弁化され、弁間に珠紋を配する。いわゆる豊浦寺系軒瓦と考えられるが、蓮子数や弁数が異なり、また弁央の軸線を欠く等、いわゆるオリジナルと比べて大きく変容している。直接的な系譜関係を特定することは困難だが、豊浦寺系軒瓦をベースとして、別系譜の軒瓦の要素を取り込み、開法寺創建時に新たに創出された型式と捉えたい。

開法寺への豊浦寺系軒瓦の情報発信源は、大和豊浦寺と同笵瓦を共有しつつ、後出型式を派生させた摂河泉地域が有力と考えられる。摂河泉地域での豊浦寺系軒瓦の展開時期は、7世紀前半~中葉と考えられている(上田 2007)。KH101の成立時期を直接特定することは困難だが、KH101aの丸瓦接合位置は高く、中房径が小さい、瓦当の厚さは薄く、シャープに整形されている点等より、7世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。

つまり、開法寺の創建は国庁設置以前に遡り、近年の調査成果から主要堂塔の完成は7世紀末~8世紀初頭頃に下ると考えられる。従来から指摘されている(羽床1980、松原1988、渡部1998)ように、在地豪族の氏寺として開法寺が建立されたと考えられる。

また、讃岐地域への豊浦寺系瓦の導入の背景については、摂河泉地域と同様に、蘇我系氏族や渡来系氏族、屯倉等が関係していると考えられる(近藤 1997、上田 1998、清水 2000、上原 2003)。これらの点については、稿を改めて詳述したい。

108・109 は、開法寺跡出土とされる、川原寺系の八 葉複弁蓮華文軒丸瓦 (KH105) である。近年の発掘調 査によっても、同笵の瓦が出土しており、開法寺跡か



第 26 図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図 1

らの出土資料と考えられる。明確な笵傷はなく、笵の 異同は不明だが、細部形状から同笵の可能性は高いと 考える。県内では、同笵例が、鴨廃寺と坂田廃寺より 出土している(蓮本 1993)。

110~112は、「国分寺瓦窯跡遺瓦」として展示されており、事実とすれば府中・山内瓦窯跡出土資料となる。110は、八葉素弁蓮華文軒丸瓦(KH106)で、これまで同瓦窯跡からの出土例の報告はなく(渡部2007)、時期的な点と、近年の調査から、開法寺跡出土の可能性が高い。弁の上には、やや不明瞭だが子葉状の表現が認められるものもある。川原寺式の影響下に成立した可能性が説かれている(蓮本1993)が、むしろ河内西琳寺式系C類もしくは善正寺式(上田2007)を母胎として成立し、讃岐へもたらされた可能性も考えられる。

111 は、八葉単弁蓮華文軒丸瓦で、瓦窯跡のほか、同笵例は讃岐国分寺跡 (SKM09)、国分尼寺跡 (KB106)、開法寺跡 (KH110) から出土している。瓦 当裏面に「山本ス工寄贈 壹千余年ノ瓦 明治廿四年 鑑定□田文学士 福□教□」と朱書きされている。112 は、均整唐草文軒平瓦で、瓦窯跡のほか、同笵例 が讃岐国分寺跡 (SKH01C) より出土している。以上 2 点は、瓦窯跡出土品としても矛盾はない。

113 は、「菊塚御庁遺瓦」として展示されている資料である。菊塚は、崇徳上皇に関わる伝承が伝えられており、その付近より出土した資料の可能性もあるが、正確なことは不詳である。県内では、同笵・文の瓦が綾川町西村1号窯跡、同北条池北畔瓦窯、同陶邑古窯跡群、高松市如意輪寺窯跡から出土している。

如意輪寺窯跡出土資料については、以前その年代観について言及し、11世紀末頃との実年代を提示した(蔵本2005)。その後、渡邊誠氏は、同文系資料の詳細な検討を行い、如意輪寺例を12世紀前葉以降とした(渡邊2007)。如意輪寺窯跡は十瓶山窯跡群からの出張製作によって築窯されたと考えられ、瓦当文様に表現された差異や技術上の省力化等を、十瓶山窯跡資料との年代差として大きく評価しなかったことが、渡邊氏の年代観との相違が生じた要因である。しかし、この点は今でも有効と考えており、その後の知見を踏まえても、如意輪寺例は12世紀初頭までに収まり、鼓ヶ岡例は11世紀末頃に位置付けられるのではなかろうか。消費地遺跡での良好な資料の出土を期待したい。

114 は、綾川河床遺跡から出土した均整唐草文軒平 瓦で、文庫所蔵考古資料の中で、数少ない出土位置の 確実な資料である。県内では、同文(笵?)例が、綾 川町龍燈院にある(安藤 1967)。11 世紀末頃か(上原 2009)。

なお、綾川河床遺跡からは、古代の須恵器片や11~12世紀頃の瓦片等が出土している。周辺に寺院や官衙遺跡が所在した可能性も考えられるが、基壇や礎石等の遺構は確認されておらず、地形的にも適地とまではいえない。綾川上流域の窯跡群の生産物の集散地であった可能性も想定され、この点は出土遺物の詳細な検討を行い、別に論じたい。

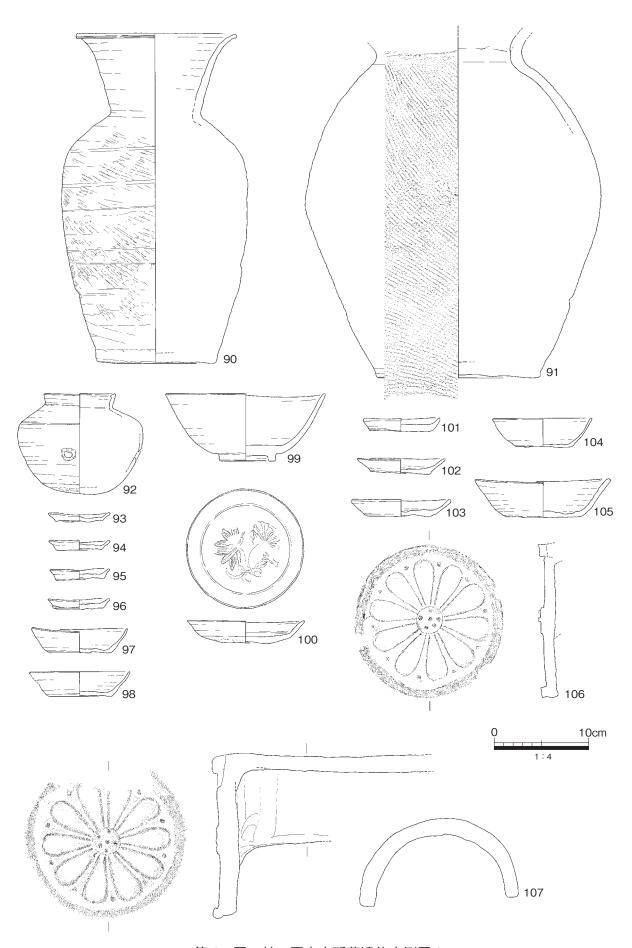
115は、三巴文軒丸瓦で、瓦当面と丸瓦部の一部を 欠損するが、おおよそ全形を窺うことができる。丸瓦 部凹面に「国分寺(鼓岡蔵)」と注記がある。焼成は 非常に良好で、いわゆる燻瓦である。瓦当文様は、左 巻三巴文の外側に円環状の圏線が配され、外区に20 個の珠文が巡る。内区は瓦笵を外した後ナデ調整され る。周縁は幅広く、丁寧なナデ調整が施される。丸瓦 部凸面は、縄目タタキの後、丁寧にナデ調整され、タ タキは狭端縁付近にのみ認める。凹面は、やや細かな 布目痕が残される。瓦当部と丸瓦部との接合部は、ナ デ調整が施された後、細いヘラ状工具により、ランダ ムなミガキ状の調整が加えられるが、その意図は不明 である。側面観B型、丸瓦部狭端縁は面取りされ、滑 り止めはB型、瓦当面への面取りは行わない。これら の点から、15世紀後半頃に位置付けられよう(小林・ 佐川 1989)。

注記のとおり、国分寺現本堂に葺かれていた瓦の可能性は高いと判断されるが、時期的に室町期に下り、現本堂建立時の瓦ではなく、補修瓦と考えられる。

116~125 は銅銭で、掲載した他に寛永通寶 1 点が展示されている。寛永通寶は、他の銅銭と状態が大きく異なり、伝世品と考えられる。報告する資料は、いずれも表裏に他の銅銭の錆着痕を認め、出土資料であることは間違いない。

府中町内の銅銭出土遺跡としては、西福寺の古墓(松浦 1968、佐藤 1993 a、大山 1999) と、妙楽寺埋納銭(新宮史 1993) がある。前者からは副葬品として萬年通寶や神功開寶が、後者からは北宋銭を中心とする多量の銅銭が、それぞれ出土したとされる。

前者の銅銭については、松浦正一氏により詳細な記録がある。松浦氏は、『香川県貨幣骨壺出土地表』に



第27図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図2

「坂出市府中町西福寺出土貨幣(30 文以上)。昭和5・ 6年発見。西江善兵衛 西紋伊太郎。鎌田共済会6・ 7文 鼓岡文庫6文 香大6文。万年通宝 神功開宝。 骨壺に副葬か。」と記す。松浦氏が、どのようにして この古墓や、その出土遺物の情報を知ったのかは、今 となっては確かめることはできない。しかし、出土 から程なく、文庫に収蔵された6枚の銅銭の拓本を採 拓している(大山1999)ので、この4点の皇朝銭は、 西福寺古墓の出土資料であると断定してよいと考えら れる。なお、当時の拓本は6点(和銅開珎1、萬年通 寶1、神功開寶4)が残されているが、神功開寶2点 の所在は不明で、残された銅銭にも当時の拓本と比較 して、劣化が進行していることが確認できる。また、 記録にある骨壺がどこに収蔵されたかは不明で、既述 した文庫所蔵の須恵器壺としては、銅銭との間に年代 の開きが大きく、課題が残る。

後者は、現在30点程度が銅銭の埋納容器である壺とともに、坂出市指定文化財として残されているに過ぎない。後述する文庫所蔵の北宋銭等が、これらの一部である可能性はあるが、断定はできない。

 $116 \sim 119$ は西福寺古墓出土の皇朝十二銭で、116 は和銅開珎 (初鋳 708 年)、117 は萬年通寶 (初鋳 760 年)、 $118 \cdot 119$ は神功開寶 (初鋳 765 年) である。 $120 \sim 124$ は中国北宋銭で、120 は、皇宋通寶 (初鋳 1038 年)。半折している 121 も、皇宋通寶と考えられる。122 は、やや不鮮明ながらX線写真から、景徳元寶 (初鋳 1004 年)の可能性が考えられる。123 も同様に、元符通寶 (初鋳 1098 年)の可能性が高い。124 は 寧元寶 (初鋳 1068 年)。125 は明の永楽通寶 (初鋳 1408 年) で、これが最新銭となる。

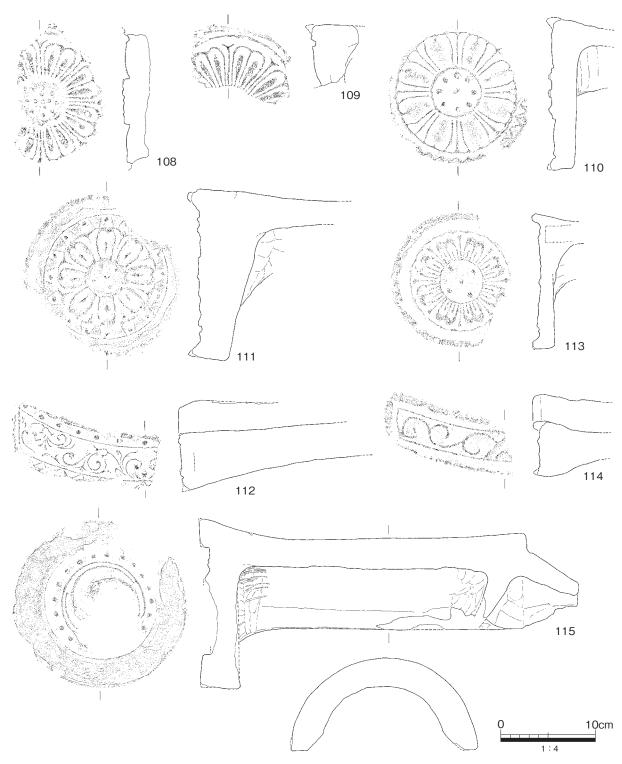
田村久雄氏旧蔵資料

126~129 は、綾川町在住の研究者田村久雄氏所蔵の資料である。讃岐国衙による管理・経営が想定されている、綾川町十瓶山周辺の諸窯(森1968、渡部1980、羽床1985、中山・佐藤1998、上原2009)の出土資料で、これまで未公表であったことから、氏のご好意により今回報告することとした。なお、出土窯跡名は田村氏のご教示による。

126 は、丸山西窯跡出土の均整唐草文軒平瓦である。 瓦当右端部の小片で、全体形状は不明。全面に鉄分が 付着し、茶褐色を呈する。焼成は非常に良好。外区 に、やや崩れた唐草文が配される点が特徴的である。 瓦笵に対して瓦当面の幅が狭く、上周縁を欠き、右周縁と下周縁の幅は一定せず、周縁の規格性に対する意識は乏しい。凹面はやや細かな布目痕後、瓦当部を幅4.6cm程度瓦当よりみて右から左へケズリ調整を施す。布は縦方向に使用しているとみられるが、小片のため断定はできない。側縁も幅1.0~1.4cm程度ケズリ調整を加える。凸面は瓦当部より狭端部方向へケズリ調整し、さらに瓦当部付近に弱いナデ調整を加える(I手法)。側面も同様にケズリ調整する。額部は直線額。成形は、厚さ3.2cmのやや厚い粘土板の凸面側に、瓦当部付近にのみ厚さ1.2cm程度の薄い粘土板を貼り足している(b手法)。県内では、丸山窯跡(香川県1997)と鴨廃寺(KM204、高松市1996)から同文(笵?)の瓦が出土しており、11世紀後半頃と考えられている(上原2009)。

鴨廃寺の八葉複弁蓮華文軒丸瓦 (KM107) は、時期的な点と瓦当文様等から、この軒平瓦と組み合う可能性が高く、鴨廃寺では11世紀後半代まで堂塔の補修がなされていたことが確認できる。一方、開法寺跡から出土した均整唐草文軒平瓦 (KH206) は、やや古く11世紀前半代とされる(上原2009)。醍醐廃寺でも、12世紀代の瓦が確認されており、綾川下流の古代寺院3寺では、平安後期までは堂塔の維持・補修が行われており、その際使用されたのは十瓶山窯の製品であることが確認できる。

127は、丸山2号ないし3号窯跡出土とされる、五 連巴文軒平瓦である。瓦当を含めた小片で、全体形状 は不明。焼成は非常に良好で、須恵質を呈する。凹面 はやや粗めの布目痕後、瓦当部を幅 1.8~ 2.1cm程度 瓦当よりみて左から右へケズリ調整を施し、その上を 弱くナデ調整する。凸面は、粗い縄目タタキを施した 後、瓦当部を幅 1.5~3.0cm程度瓦当よりみて右から 左方向へ、ケズリ調整を加える。凸面のタタキは、い わゆる円弧状を呈する(Ⅳ手法)。側面は、縦方向の ケズリ調整の後、凹面側を幅 0.7cm程度、凸面側を幅 0.5 cm程度メントリ状にケズリ調整を行い、さらに弱いナ デ調整を加える。ケズリ調整は浅く、直前の板状工具 痕が明瞭に残る。額部は直線額。成形は、明瞭な粘土 板の接合痕跡は認められず、粘土塊を捏ね合わせる等 して成形した可能性が想定される (c手法)。丸山窯 跡(香川県1997)から同文の瓦が数種類出土してい るが、同笵のものは報告されている資料の中には認め られなかった。12世紀中葉を前後する時期と考えら



第28図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図3

れる (上原 2009)。

128 は、丸山西窯跡?出土の半截花唐草文軒平瓦である。瓦当右半部の小片で、全体形状は不明。焼成はやや良好で、瓦質にやや近い。瓦当文様は、中心に半截花文を配し、そこから3転する唐草が左右に伸び、4葉の子葉が付すとみられる。右端の唐草は一部が裁ち

切られており、笵をやや縮めた可能性がある。上周縁はかろうじて認めるが、右と下周縁をそれぞれ欠き、周縁の規格性に対する意識は乏しい。凹面の大半は欠損するが、やや細かな布目痕が瓦当部にまで延びるようで、その後に $1\sim2$ の押圧が認められる。布の方向は不明。凸面は、瓦当部にまで粗い縄目タタキが施さ

れる。凸面のタタキは、Ⅱ手法に類似するが、瓦当側よりみて右側のタタキ幅が広がり、均等なV字形を呈さない(Ⅲ手法)。側面はケズリ調整されているようだが、器表面の荒れのため細かな観察はできない。額部は曲線額に近い。成形は、厚さ 2.1cm程度の粘土板の凸面側に、平瓦部から瓦当部にかけて厚さ 1.5cm程度の粘土板を貼り足す (a手法)。11世紀後半代とされる(上原 2009)。

129は、お藤天神出土の偏向唐草文軒平瓦である。 瓦当部はほぼ完存するが、平瓦狭端部付近を欠損する。 焼成はややあまい。瓦当文様は、右から左へ7転反転 する唐草文が三重の突線で抽象的に表現される。意匠 的に七連三巴文にも通じる図案である。しかし反転す る各唐草の表現は細部で異なり、また右から左へ割り 付けながら唐草を配しているが、左端部で瓦笵幅が足 りなくなったため、最後2転分の唐草は大きく省略さ れ小型化して描かれる等、図案化の点で稚拙さは否め ない。唐草文の四周は圏線によって画される。上下周 縁に対して、左右周縁の幅は著しく狭く、周縁の規格 性に対する意識は乏しい。上周縁には一定間隔で珠点 が配され、下周縁にも同様の珠点が配されていた可能 性は高いが、欠損・磨耗のため断定はできない。凹面 はやや細かな布目痕の後、瓦当部を幅 2.6 ~ 3.5cm程 度瓦当よりみて左から右へケズリ調整を施し、さらに 両側縁部にも幅 1.2 ~ 1.4cm程度のケズリ調整を加え る。凸面は粗い縄目タタキの後、瓦当部を幅1.5~4.0 cm程度瓦当部よりみて右から左方向へケズリ調整し、 さらに弱いナデ調整を加える。凸面のタタキは、平瓦 部両側より瓦軸線に対して斜交させて施し、瓦当を手 前にしてみると∨字状を描いている(Ⅱ手法)。側面 も同様に瓦当部より丸瓦狭端部方向へケズリ調整す る。額部は曲線額。成形は、aもしくはb手法とみら れる。県内では丸山窯跡(香川県 1997)や龍燈院(安 藤編 1974) から同系のものが出土しており、型式的 にそれらより先行する。11世紀後半代の可能性があ る (上原 2009)。

鎌田共済会郷土博物館所蔵資料

博物館には、開法寺、醍醐廃寺、十瓶山窯跡をはじめとする、坂出市周辺の寺院・窯跡から出土した平・ 丸瓦等を多数所蔵するが、以下では軒瓦のみ紹介する こととしたい。

130 は、西庄町醍醐廃寺出土の八葉素弁蓮華文軒丸

瓦 (DG102) である。

127 のような連巴文の各巴間に、鼓形のレリーフを配したもので、巴は平面的な表現となり、127よりは後出する様相を認める。安楽寺は、低丘陵上に建立された寺院とされるが、現在果樹園等に開墾され、詳細は不明。凹面に「昭和十二年二月二五日 綾歌郡府中村安楽寺跡経塚調査時採集」と注記されているように、12世紀代の経塚が存在し、経筒等の遺物が、東京国立博物館に収蔵されている。凹面は、細かな布目痕の後、瓦当部を幅1.3cm程度、瓦当側よりみて左から右方向へケズリ調整される。凸面は、粗い円弧状タタキ(IV手法)の後、瓦当部周辺にナデ調整?を加える。成形は、c技法とみられる。同文(笵?)例が、府中町弘法寺跡、神谷町神谷神社、多度津町鴨神社にある(上原1967)。

131は、府中町安楽寺跡出土の巴文軒平瓦である。

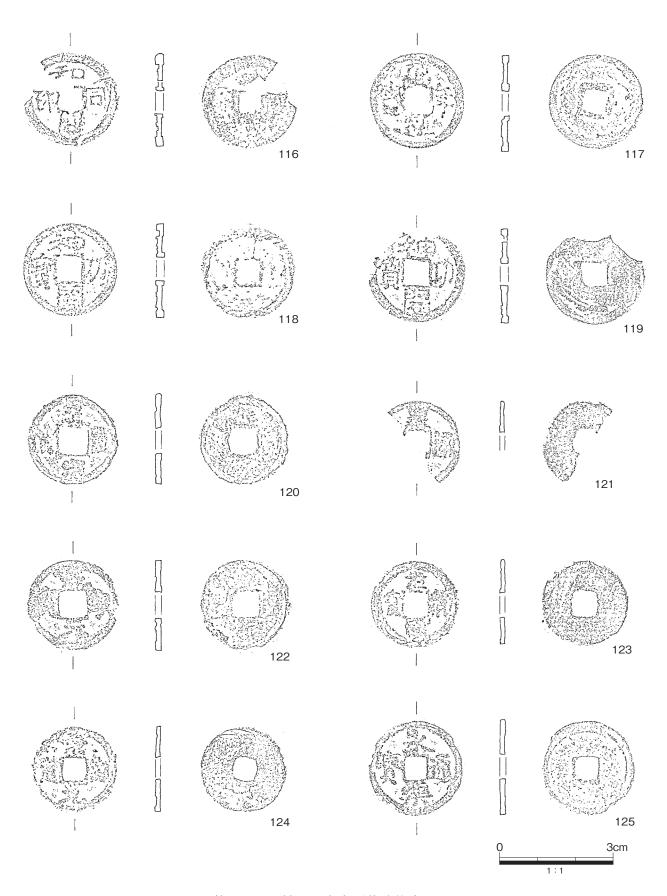
132 は、江尻町金山権現出土の三巴文軒丸瓦である。 瓦当裏面に、「綾歌郡金山村 金山権現ニテ拾得 金山村前田□□□ 昭和十年二月五日」の墨書がある。 瓦当部のみの破片であり、丸瓦部を欠損するため、時期決定の困難な資料である。瓦当面は、二次的被熱のためか剥落がみられる。瓦当部外縁外端に部分的な面取りを認め、側面観はA型とみられる点等から、15世紀前半頃と考えておきたい。

360 は、西庄町八十場薬師堂出土の唐草文軒平瓦である。平瓦部凹面に「綾歌郡西庄村」、瓦当裏面に「八十場薬師堂 明治四十年五月二八日」とそれぞれ墨書がある。欠損部分が多く、瓦当文様も判然としない。界線は全周するようであり、顎貼り付けとみられる点等から、15世紀代と考えておきたい。

讃岐国衙と十瓶山窯跡群の瓦生産

旧阿野郡南部、綾川町十瓶山周辺には多数の窯業遺跡が分布する。7世紀中葉から14世紀中葉の長期に亘る操業期間に、須恵器窯約80基、瓦窯約60基が設けられ、南海道最大の窯業生産地とされる(佐藤1993、田村ほか2008)。十瓶山窯跡群(陶窯跡群)と呼ばれ、とくに国府設置期以降には、讃岐国衙による管理・経営が多くの先学により指摘されている。

平安時代後期、十瓶山窯跡群で生産された瓦は、国内で消費されつつも、京都へ搬出されていたことが古くより知られている。また、十瓶山窯跡群からやや離れた寺院では、近辺に瓦窯を設け、十瓶山窯からの出



第29図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図4

張製作により瓦を焼成する例がしばしば見られる。高 松市如意輪寺窯、善通寺市百合山窯、三豊市大水上神 社1号窯、徳島市国分寺瓦窯跡等である(上原 2001・ 2009)。平安京周辺へは製品を搬出し、讃岐国内や近 国の寺院へは、製品の搬出とともに瓦工を派遣し対応 するといった、土器生産とは異なった、瓦特有の生産 方式が採用される。

こうした讃岐国における瓦生産の特徴について、上原真人氏は、「造国(所課国)制から知行国制への変遷」に注目し、造国制期の「讃岐系軒瓦は量的にまとまっても、紋様や法量がまちまちで、寄せ集めた瓦という感をぬぐいがた」く、「造国制のもとでは、国司管下の瓦窯は野放図」な生産体制・供給形態であった可能性を指摘する。それに対応するかのように、「11~12世紀の京都で消費した瓦を、かなりの量、在地寺院が消費している事実」には、「平安後期には、弘法大師にまつわる聖地として、古代寺院の復興が讃岐国内で積極的に推進され」た「讃岐国独自の信仰的背景」が推定されるとした(上原 2001・2009)。

こうした上原氏の業績に導かれつつ、平安時代後期における讃岐国衙による窯業生産の実態について、以下若干の私見を提示し、讃岐国府研究の一助としたい。 既述したように、十瓶山窯跡産の軒平瓦各部の成・整形技法には、いくつかのヴァリエーションが認められる。わずか数点の資料の観察であり、十瓶山諸窯で焼成された瓦全体のヴァリエーションを網羅しているわけではないが、瓦の成形技法と、凸面の成・整形技法を軸に、とりあえずの見通しを示しておきたい(そのほかに、凹面側縁や瓦当部周辺のケズリ調整の広狭、有無等も指標となろう)。

凸面の整・成形技法は、タタキ技法の差異に注目し、I~IVの各手法に分類したが、型式学的にはこの順に変遷する可能性が考えられ、上述した個々の資料の製作年代観とも概ね矛盾しない。いわゆる桶巻作りに特有の瓦長軸に平行するタタキではなく、一枚作りに特化したタタキ技法と考えられ、その変化の方向性は、機能性や見た目を重視したものではなく、製作の手間の省力化であっただろう。高松市片山池窯跡(高松市2009)の製品の様相からも、こうした瓦長軸に斜交するタタキ技法は、11~12世紀代の十瓶山諸窯での瓦の量産化を契機として成立した可能性が考えられる。

こうした方向性が妥当であれば、瓦の成形技法は、 a・b 技法→c 技法への変遷が推定される。a・b 技 法は、瓦当部周辺へ別途粘土を補填することによって 瓦当部を肥厚させ、瓦当面に一定の厚さを成形する技 法で、規格の異なる2種類以上の粘土板を必要とする。 一方c技法は、a · b技法とは異なる手法で成形され ている可能性が高く、狭端部端面や両側面に布目痕が しばしば観察されることから、布を敷いた箱形の凸型 成形台に、直接粘土塊を充填して製作した可能性も想 定される。こうした方法だと、粘土板製作の手間が省 略され、比較的容易に規格的なサイズの瓦を製作する ことができたのではなかろうか。たたらから粘土板を 切り出したものではないことは、既に指摘されている (上原 1978)。技法の詳細については、改めて検討し たい。

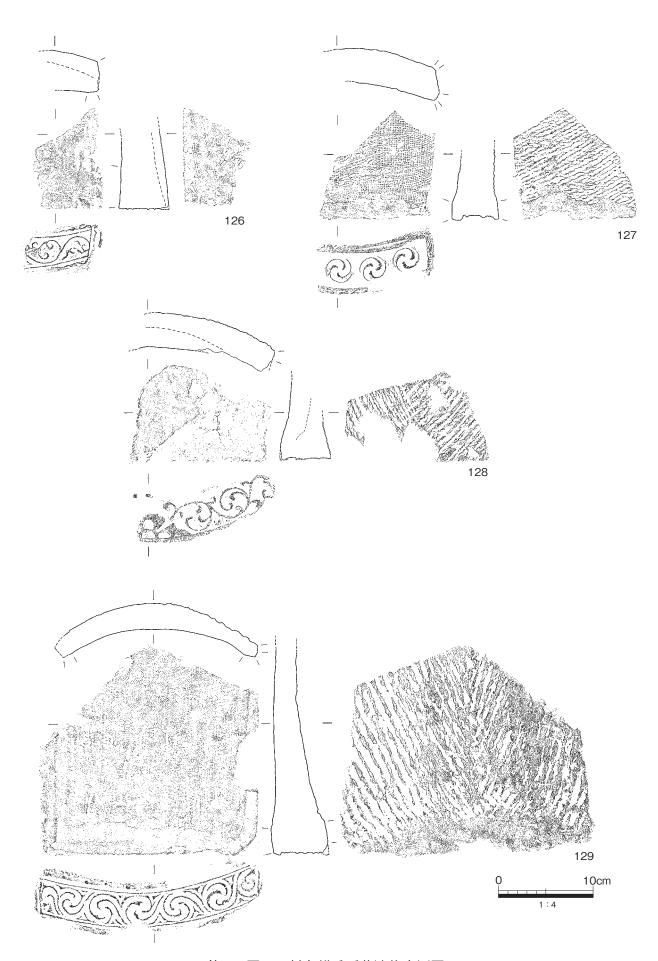
十瓶山諸窯の瓦の成・整形技法の変遷は、おおまかには以上のように説明可能だが、各瓦屋での実態には多様性が認められるようである。例えば綾川町丸山窯跡(香川県 1997)では、Ⅲ・Ⅳ手法と a~cの各技法が共存する可能性があり、一方如意輪寺窯跡では、出土資料数が限られることもあるが、各資料に製作技法の多様性は乏しいようである。つまり、上述した技法の差異は、基本的には時期的変化の方向性を志向しつつも、工人のクセとしても存在し、造瓦集団の系統差と理解できる可能性がある。

こうした考えが妥当であれば、後述する丸山支群における集約化の実態として、11世紀代に十瓶山窯跡群内で分散して操業していた工人を、丸山支群へ集中させたことを説明できるかもしれない。

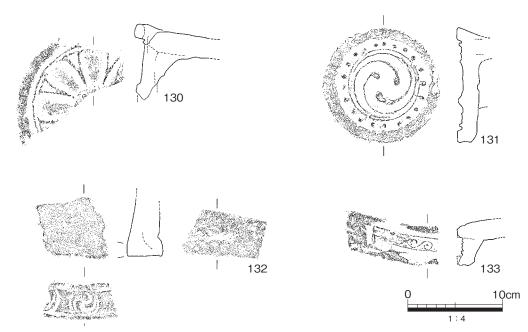
次に、11世紀後半、僧善芳による善通寺市曼荼羅寺の復興記事に注目したい。曼荼羅寺は、善通寺市北西部、我拝師山北山麓に現在も四国八十八箇所第72番札所として法灯を伝え、周辺からは平安後期の瓦が出土し(安藤1967)、後述する復興記事の信憑性を裏付ける。

さて、「諸国修行」僧であった善芳は、「弘法大師建立、 無上聖跡」(平遺 4631)である曼荼羅寺へ逗留したが、 「右道場、大師入滅己後及二百余歳、顛倒破壊已盛也、 奉見此、歎涙難堪、肝膽難抑、賜隨分奉加、致修理之 営矣」(平遺 983)と復興を決意する

そこで善芳は、「以是罷渡安藝國、交易材木」(平 遺 1020) し、また「隣國彼境罷向、材木買求」(平遺 1077) る等資材の確保に努め、あるいは「御任終年公 事窓々間、難得一人大工暇」(平遺 983) 状況に対し



第30図 田村久雄氏所蔵遺物実測図



第31 図 鎌田共済会郷土資料館所蔵遺物実測図

ては、「就中自備前國、語度令居住工三宅氏近を擬搦取」 (平遺 1077) 等して、積極的に堂塔の修復を進めていく。

その原資となったのは、国衙や本寺(東寺)等からの「三昧加徴」といわれる勧進・奉加米と、国衙の庇護により回復した「寺家所領田畠載流記帳十六町餘」(平遺 984)等からの地子物であった。「前者は材木調達等直接に修理経費に使用され、後者は住僧や工夫の供料・食料等に宛てられ」た(野中 2003)。厳密に両者が区別されていたかは速断できないが、善芳自身が大工や資材の確保に奔走し、その費用は国衙や本寺(東寺)の助力を得ながらも、曼荼羅寺が負担していることは重要である。

こうして善芳によって「改修造」された堂宇には、「講堂一宇五間四面如本瓦葺」(平遺 1020)があり、その瓦に新たに焼成されたものが含まれるならば、十瓶山窯跡群から搬入されたか、出張製作の瓦が使用された可能性が高い。

一方、『延喜式』「木工寮式」の作瓦の条には、「工卅人、 夫八十人、作瓦窯十烟。烟別工四人、夫八人。焼雑瓦 一千枚料、薪四千八百斤。」と記されている。この記載 を、小林行雄氏は、「木工寮に10烟の瓦窯が常設され、 工四人と夫八人との計12人の構成をもって、瓦窯1烟 に配属する」と読んだ(小林1964)。また、梶川敏夫氏 は、「工4人と夫8人は1烟に伴う必要人員の単位(工 1人に夫2人)であり、窯詰め、焼成、窯出し、その 他の作業がこの人員で行われるべきであることを記し たもの」と理解された(梶川 1989)。大川清氏は、烟を 窯の基数ではなく、操業回数であるとして、官営工房 での製造能力について復元を試みている(大川 1990)。

『延喜式』の編纂は、10世紀前葉に遡り、その造瓦所は、いわゆる中央官衙系瓦屋(栗栖野・小野両瓦屋)のことであり、十瓶山窯跡群と直接には比較できない。しかし、工人数に若干の増減はあったとしても、瓦窯1口を単位に工人が配属され、さらに生産量が割り当てられていた、そうした瓦生産のシステムは、古代に限れば、時代・地域を越えて普遍化できるのではなかろうか。なお、瓦工の作業に、直接瓦の焼成に関わる諸作業以外にも、「できあがった瓦を建築工事場に運び、さらに瓦を葺く作業をもふくんでいた」とされる(小林1964)点は、十瓶山窯跡群からの出張製作の背景を考える上で興味深い。

十瓶山窯跡群では60基に及ぶ瓦窯が確認されている (田村ほか2008)が、そのうち発掘調査により、詳しい 内容が知られるものは10基に満たない。近年調査され た小坂池窯跡では、11世紀前葉頃(上原2009)の3基 の有牀式平窯が検出された(綾川町2010)。1・2号窯 と3号窯で、燃焼室の平面形態が異なり、また出土瓦 の様相から、3号窯→1・2号窯への変遷の可能性も 想定される。

十瓶山窯跡群の瓦窯は、ますえ畑支群と丸山支群を 除けば、概ね1~7基程度で支群が形成されているよ

第25表 関連調査資料・土器等観察表1

報文番号	- <u>遺</u> 構名	器種	口径	器	底径	胎土	白鸝	外面調整	内面調整	残存率 産地等	所藏先	電光
09	新宮古墳	須:杯蓋	11.2	3.8		密:20mm以下の石英 良好 粒等を少量含	外:灰色 N6/0 内:灰 色 N5/0	口:回転ナデ 天:時計回りの回 転ケズリ後下半回転ナデ	ロ~天:回転ナデ	%	鼓ヶ岡文庫	
61	新宮古墳	須: 杯身	10.5	3.7		密:25mm以下の石英 良好 粒等を少量含	外: 灰色 7.5Y5/1 内: オリーブ灰色 2.5GY5/1		口~底:回転ナデ	口練部 7/8	鼓ヶ岡文庫	
79	新宮古墳	須:杯蓋	13.1	4.1		やや粗:80mm以下の 良好 石英粒等を若干量含	外:赤黒色 10R2/1 内: 灰色 N4/0	口:回転ナデ 天:反時計回りの 回転ケズリ後下半回転ナデ、下端 に沈線	口:回転ナデ、端部付近に痕跡的な沈線状の段天:回転ナデ	1/8	鼓ヶ岡文庫	
63	新宮古墳	須: 杯身	11.3	4.8		やや祖:60mm以下の 良好 石英粒等を少量含	外:赤黒色2.5YR1.7/1 内:灰色 N4/0	ロ:回転ナデ 底:反時計回りの 回転ケズリ後上半回転ナデ	口~底:回転ナデ	%	鼓ヶ岡文庫	
64	新宮古墳	須:有蓋高杯蓋	11.0	2.95		密:45m以下の石英 良好 粒等を少量含	外:灰白色7.5Y7/1 内: 黄灰色 2.5Y4/1	口:回転ナデ 天:反時計回りの 回転ケズリ後下半回転ナデ、ツマ ミ貼付	口~天:回転ナデ	口縁部 7/8	鼓ヶ岡文庫	
65	新宮古墳	須:有蓋高杯蓋	11.55	3,55		密:20mm以下の石英 良好 粒等を少量含	外:灰色 N6/0 内:灰色 N4/0	口:回転ナデ 天:反時計回りの 回転ケズリ後下半回転ナデ、ツマ ミ貼付	口~天:回転ナデ	沿	鼓ヶ岡文庫	
99	新宮古墳	須:無蓋高杯	13.4	7.5	9.4	やや祖:35mm以下の良好 石英粒等を若干量含	外:灰色 N6/0 内:灰色 N5/0	口:回転ナデ 体:回転ケズリ後 脚部貼付後ナデ 脚:回転ナデ	杯:回転ナデ 脚:回転ナデ	脚部 7/8	鼓ヶ岡文庫	脚裾部歪み
29	新宮古墳	須:平瓶	4.5	8.2		密:1.5m以下の石英 良好 粒等を少量含	外:暗灰色 N3/0 内: 灰色 N5/0	口:回転ナデ、自然釉 体:回転 ナデ、自然釉 底:反時計回りの 回転ケズリ後ナデ	口~底:回転ナデ	体部 6/8	数ヶ岡文庫	
89	新宮古墳	須:平瓶	3.5	7.0		密:15m以下の石英 良好 粒等を少量含	外・内:灰色 N4/0	口:回転ナデ 体:回転ナデ後ボタン状把手貼付 底:回転ヘラ切り?後ナデ	口:回転ナデ	口縁部 8/8	鼓ヶ岡文庫	体部上半外面に「新 宮古墳」と墨書
69	新宮古墳	須:平瓶	4.4	8,55		密:10mm以下の石英 良好 粒等を少量含	外・内:灰色 5Y5/1	ロ~体部:回転ナデ、肩部にボタン状把手貼付、自然釉 底:回転ケズリ?後ナデ	口:回転ナデ	体部 8/8	数ヶ岡文庫	
02	新宮古墳	須: 提瓶	$4.2 \sim 4.3$	3 11.4		密:20m以下の石英 良好 粒等を少量含	外・内: 灰色 N6/0 ~ N5/0	口: 回転ナデ、「×」のヘラ記号体部: 時計回りの回転ケズリ後ナデ、肩部にボタン状把手貼付	口:回転ナデ	完形	数ヶ岡文庫	口縁部歪み、体部外 面に「新宮古墳」と 墨書
71	城山古墳	須:有蓋高杯	11.1	13.9	12.0	やや和:20m以下の良好 石英粒等を若干量含	外:暗灰色 N3/0 内: 灰色 N6/0	口:回転ナデ 杯:上半回転ナデ、下半回転ナデ、下半回転ケズリ後ナデ 脚:回転 ナデ後中位に沈線2条、裾部に沈 線1条	杯:回転ナデ 脚:上半シボリ目、下半回転ナデ	2000年	鼓ヶ岡文庫	
72	城山古墳	須:合付廢			8.4	密:30m以下の石英 良好 粒等を少量含	1 : F	 ○ 頭:回転ナデ後中位に権拙な沈線 夏3~4条 体部:上半回転ナデ後中位に次線で上下を区画し刺突文、下半回版ケブ/後ナデ 期:回転ナデ後2方向の円形透孔 	顕:回転ナデ 脚:回転ナデ	脚部 2/8	鼓ヶ岡文庫	肩部外面に「城山古 墳」と墨書
73	不明	須: 杯身	13.1	3,5		やや粗:30m以下の 良好 石英粒等を若干量含	外:暗灰色 N3/0 内: 灰色 N4/0	口: 回転ナデ 体: 回転ナデ 底: 反時計回りの回転ケズリ	口~底:回転ナデ	2000年	鼓ヶ岡文庫	内面に出土の由来を 記した和紙貼付
74	西庄古墳	須:台付直口壺	6:9			密:20m以下の石英 良好 粒等を少量含	外・内:灰白色 5Y7/1	口:回転ナデ後カキメ 体部:回 転ナデ後中位付近にカキメと沈線 1条、下半部は回転ケズリ後ナデ	口:回転ナデ	口縁部 8/8	数ヶ岡文庫	体部下半外面に「西 庄古墳」と墨書
75	不明	須:杯蓋	14.7	3.9			外·内:暗灰色 N3/0		口:回転ナデ、端部に鈍い沈線 1 条 天:回転ナデ	完形	鼓ヶ岡文庫	口縁部歪み
92	不明	須:杯蓋	12.5	4.0		やや粗:30mm以下の 良好 石英粒等を若干量含	外・内:青灰色 5B6/1	ロ~体:回転ナデ 天:反時計回りの回転ケズリ	口~天:回転ナデ	完形	数ヶ岡文庫	口縁部歪み
22	不明	須:杯蓋	11.6	4.6		やや粗:4.5mm以下の 良好 石英粒等を若干量含	外:灰白色 N7/0 内: 灰色 N6/0	ロ~体:回転ナデ 天:反時計回りの回転ケズリ	ロ~天:回転ナデ	完形	数ヶ岡文庫	口縁部歪み
78	不明	須: 杯身	10.6	3.6		やや粗:25mm以下の 良好 石英粒等を若干量含	外: 灰色 N6/0 内: 灰色 N5/0	ロ~体:回転ナデ 底:時計回り の回転ケズリ	底:時計回り 口~底:回転ナデ	完形	鼓ヶ岡文庫	口縁部歪み
79	不明	須: 杯身	11.3	3.9		やや粗:30m以下の 良好 石英粒等を若干量含	外:灰白色N7/0 内: 灰色 N6/0	ロ~体:回転ナデ 底:反時計回 りの回転ケズリ	口~底:回転ナデ	2000年	鼓ヶ岡文庫	口縁部歪み
80	不明	須:把手付碗	9.2	0.9		密:20mm以下の石英 良好 粒等を少量含	外:灰色 N6/0 内:灰色 N5/0		底:不整方向 口~底:回転ナデ	口縁部 8/8	数ヶ岡文庫	
81	不明	須: 合付碗	7.8	9.2	7.3	やや粗:35m以下の 良好 石英粒等を若干量合	外:灰色 N6/0 内:灰色 N5/0	口~体:回転ナデ、中位に沈線1 口~底:回転ナデ 条、下端は回転ケズリ後ナデ 脚: 回転ナデ	口~底:回転ナデ	底部 8/8	数ヶ岡文庫	
78	不明	須:無蓋高杯	8.2	7.6	6.8	密:10㎜以下の石英 良好 等を少量含	外:浅黄色2.5Y7/3 内: 灰白色 N8/0	口:回転ナデ、自然釉 体:回版 ケズリ?後脚部貼付後ナデ 脚: 回転ナデ、中位に沈線1条	杯:回転ナデ 脚:回転ナデ	完形	数ヶ岡文庫	
83	不明	須: 杯	8.8	3.9	4.9	密:15mm以下の石英 良好 粒等を少量含	外:灰白色 10Y7/1 内: 灰白色 N7/0	口~体:回転ナデ 底:反時計回 口~底:回転ナデ り?の回転ヘラ切り後など	口~底:回転ナデ	完形	数ヶ岡文庫	口縁部歪み
						1		1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1	,			

102	不明	王:小国	0.6	1.6	6.1	密:15mm以下の石英 良好	外・内: 灰 白 色 口縁~底部: 回転ナデ 底面: 反 口縁~底部: 回転ナデ 完	北方	鼓ヶ岡文庫	口縁部歪み
						非	10 x R 8 / 1			
103	不明	텔 :: 쉬	10.1	1.8	6.4	やや祖:20mm以下の 石英粒等を若干量含	外: 浅黄橙色 10XR8/3 口線~底部: 回転ナデ 底面: 時 口線~底部: 回転ナデ 店内: 灰白色 10XR8/2 計回りの回転ヘラ切り	北馬 一	鼓ヶ岡文庫	口縁部歪み
104	不明	十: 本	10.2	3.1	6.1	密:20mm以下の石英 良好 粒等を少量含		完形	鼓ヶ岡文庫	口縁部歪み
105	不明	上: 杯	14.0	4.1	7.9	やや粗:3.0mm以下の 良好 石英粒等を若干量含	4:淡黄色2578/3 内: 口縁~底部: 回転ナデ 底面: 反 口線~底部: 回転ナデ 完 2578/2 灰白色	完形	鼓ヶ岡文庫	口縁部歪み
						第 26	表 関連調査資料・土器等観察表2			

コ縁部歪み

龍泉

片彫り花文

施釉、

露胎、

底面:

口縁~底部:施釉 回転ケズリ

铂银

アス世口

- 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1

釉:浅黄色 色 5Y7/1 釉:オリー 5Y6/3 胎: 7.5Y7/1

4.8

2.4

遾

東框

100

7.2

16.7

熎 Ħ

經

東梶

田楽 田楽

鼓ヶ岡文庫 鼓ヶ岡文庫

龍泉

北形 完形

施釉

□緣~底部∶ □縁~底部

口縁~高台: 施釉 高台内:露胎、 時計回りの回転ケズリ

…

良好 良好

鼓ヶ岡文庫

沿形

回転ナデ

□緣~底部

口縁~底部:回転ナデ 底面:反時計回: 10回転へラ切り後板状圧 現後ナデ

钿

Ш

ĸ

外・ 内: 10YR8/2

良好

の石英

施:1.5 mm 以下の 粒等を少量名

5.5

2.6

9.01

回転ナデ

成画 底面 底面

口縁~底部:回転ナデ 時計回りの回転ヘラ切り 口縁~底部:回転ナデ 時計回りの回転へう切り 口縁~底部:回転ナデ 時計回りの回転へう切り

にぶい黄橙色

钿 印

範 貆

無 瓶

田 泄

以上の小品を

の石戸

密:20m以下の 粒等を少量含 やや粗:3.5mm 石英粒等を若干

2.65

6.5

10.1

芡

97

外・内: 10YR8/4 外·内: 10YR6/6 外・内: 10YR7/4

底面

| 口線〜底部:回版ナデ 原 | 時計回りの回版へラ切り | 口線〜底部:回版ナデ 原 | 時計回りの回転ヘラ切り

왣

無

戕

良好 良好

4.75

1.05 1.0

6.2

無

\$

無正 無 無日

92 96

5.1 5.1

Ξ

外・ 内: 10YR7/8 外・ 内: 10YR8/4

|縁部歪み

鼓ヶ岡文庫 鼓ヶ岡文庫 鼓ヶ岡文庫

口縁~底部: 回転ナデ 底面: 反 口縁~底部: 時計回りの回転ヘラ切り後ナデ

口縁~底部:回転ナデ 底面:反 時計回りの回転ヘラ切り後ナデ?

外: 灰白色 10YR8/2 内: 灰白色 7.5YR8/2

良好

密:20mm以下の石英 粒等を少量含 密:15mm以下の石英 粒等を少量含

9.9 6.1 6.4 6.1

不明

101

□緑~底部:回転ナデ

	i
数ケ尚文庫 □線部金み	
別	
外:淡黄色2.578/3 内: 口縁~底部: 回転ナデ 原面: 以 口線~底部: 回転ナデ2578/2 灰白色 時計回りの回転へラ切り後ナデ	表 関連調査資料・土器等観察表2
やや粗:3.0mm以下の 良好 石英粒等を若干量含	第26表
7.9	
4.1	
14.0	
₩ : #	
- - - -	
105	

中		中次				区区			外区) (三)	側面幅 全長	長 船上	1.1	色調	焼成	凸面調整	四面調整	側面調整	現存率	所藏先
	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	中房径 蓮子数 弁区径 弁	中房径 蓮子数 弁区径 弁	弁区径	区径 弁	弁幅		瓦当厚	内緑幅	外縁幅	外縁高										
十葉素弁蓮華文 157 31 1 + 5 5.3 2.2	弁蓮華文 15.7 3.1 1+5 5.3	15.7 3.1 1 + 5 5.3	1 + 5 5.3	5 5.3		2.2	1	1.8		1.6	0.7		や背	やや粗:4.5mm以下の石英 凸:灰色 N 粒等若干量含む	凸:灰色 N5/0	良好 (須恵質)				破片	鼓ヶ岡文庫
十業素弁選華文 16.9 3.2 1+5 5.4 2.3	華文 16.9 3.2 1 + 5 5.4	16.9 3.2 1 + 5 5.4	1 + 5 5.4	5 5.4		2.3		2.3		1.2	9.0	22.4	22.4 + やえ	やや粗: 45 mm以下の石英 $ $	凸:灰白色 2.5Y7/1 凹:灰白色 N7/0	やや軟(須恵質)	マメツ	布目痕	縦 板 ナデ?	ナ 破片	鼓ヶ岡文庫
八葉複弁選華文 4.7 1+5+8 4.8 3.2	複弁連華文 4.7 1+5+8 4.8	4.7 1 + 5 + 8 4.8	1 + 5 + 8 4.8	5 + 8 4.8	8 4.8	3.2							や潜	やや粗:3.0mm以下の石英 凸:灰色10Y6/1 粒等をやや多量に含	凸:灰色 10Y6/1	良好 (須恵質)				破片	鼓ヶ岡文庫
八葉複弁蓮華文 4.1 3.3	複弁連華文 4.1	4.1				3.3				2.3	1.1	4.9 +		密:25mm以下の石英粒等 凸:灰色10Y4/1 を少量含	凸: 灰色 10Y4/1	良好 (須恵質)				破片	鼓ヶ岡文庫

古代軒丸瓦観察表

関連調査資料

表

27

紙

-62-

無正

口縁部歪み、体部中 央に焼成後穿孔、体 部外面に「國魔址」 と墨書

鼓ヶ岡文庫

完形

回転ナデ

□縁~頸部:

口線~体部:回転ナデ、肩部に沈 線1条、下半部は回転ケズリ後ナ デ 底部:不整方向ケズリ

外・内: 灰色 N6/0

良好

やや粗:30mm以下の 石英粒等を若干量含

7.3

短頸壺

國魔址

92

罴

不用

91

猴跳

第三

十二

鼓ヶ岡文庫

叛日窯跡

十點

東部 8/8

1縁~頸部:回転ナデ

口縁〜頸部:回転ナデ、端部に沈 線1条 体〜底部:格子タタキの 後回転ナデ 底面:ゲタ条圧痕後

頸部:回転ナデ 体部:上半回転 ナデ後肩部に刺突文、下半平行タ タキ後回転ケズリ後回転ナデ

外: オリーブ黒色 7.5Y3/1 内: オリーブ 黒色5Y3/1

2.5YR4/

外·内: 灰赤色 2 ~黒色 N2/0

やや粗:40mm以下の 石英粒等を若干量含

12.6

34.8

艄

不用

8

密:45mm以下の石英 粒等を少量含

11.5

瞓

不明

88

備考

所蔵先 鼓ヶ岡文庫

産地等

残存率 底部8/8

内面調整

灂

類:回転ナデ 体:回転ナデ後中位を上下1条の沈線で区画し刺突文 底:反時計回りの回転ケズリ

色調 外・内:灰色 N4/0

焼成 良好

やや祖:2.5mm以下の 石英粒等を若干量含

胎土

底径 3.7

器割

口径

圏

器種 須:起

遺構名

報文番号

不用

不用

鼓ヶ岡文庫

体~底:回転ナデ

体~底:体部上半回転ナデ、 ~底部に反時計回りの回転ケン 後ナデ

K

K

外:灰色 N4/0 色 N5/0

良好

やや粗:2.0mmじ 石英粒等を若干量

回転ナデ

コ縁部歪み □縁部歪み コ縁部歪み コ縁部歪み

鼓ヶ岡文庫 鼓ヶ岡文庫 鼓ヶ岡文庫 鼓ヶ岡文庫 鼓ヶ岡文庫

完形 沿形 別別 北州 別別

口緣~底部 口緣~底部 □縁~底部 麻部 反 口緣~底部

区 区 区 区

底面

⑪ 御

鏗

丰

良好

やや粗:2.5mm以下の 石英粒等を若干量合 密:20mm以下の石英 粒等を少量含 やや粗:2.5mm以下の 石英粒等を若干量含

4.9

置ぐ 買ぐ **≡**

無口

93

口縁部歪み、内面に 出土由来の記された 和紙貼付

備考 鎌田共済会 郷土資料館 鼓ヶ岡文庫 鼓ヶ岡文庫 鼓ヶ岡文庫 所藏先 現存率 破片 破片 破片 破片 側面調整 凹面調整 縦方向板 ナデナデ 縦方向板 ナデナデ 縦方向ナ ナデ 飛方向ナ デ 凸面調整 やや粗:45m以下の石英 凸: 灰 色 10Y4/1 やや軟 (須恵質) 粒等をやや多量に含 10YR7/6 凸・凹: にぶい黄橙 良好 (土師質) 色 10YR7/3 凸:褐灰色 10YR4/1 良好 (須惠質) 凹:灰色 N5/0 凸· 凹: 褐 色 良好(須恵質) 10YR4/4 焼成 密:2.0mm以下の石英粒等 を少量含 やや粗:3.0mm以下の石英 粒等を若干量含 密:1.5mm以下の石英粒等 を極少量含 胎土 16.1 + 3.8 + 全長 7.8+ 側面幅 内縁幅 外縁幅 外縁高 1.3 6.0 1.8 1.6 4.2 弁区径 弁幅 1.95 孫七薫 | 表当中 4.6 直径 15.6 八葉複弁蓮華文 八葉素弁蓮華文 八葉素弁蓮華文 八葉単弁蓮華文 超光 府中·山内 瓦窯跡? 開法寺跡? 醍醐廃寺 報文番号 遺跡名 菊塚? 110 113 130

第28 表 関連調査資料・古代軒丸瓦観察表2

需兆			ia.
所藏先		鼓ヶ岡文庫	鎌田共済会郷 土資料館
現存率		ほほ完存	破片
端面調整		横方向板ナデ	
側面調整		縦方向板ナデ	
四面調整		- 布目痕	ナデ
凸面調整		タタキ後縦方 向ナデ	縦方向ナデ
焼成 胎士		良好 (瓦質) やや粗:20mm以下の石英 タタキ 粒等をやや多量に含 向ナデ	良好 (瓦質) 密:2.0mm以下の石英粒等 を少量含
中長		40.1	2.5+
側匣帽			
瓦当厚		3.9	1.5
	外縁高	11	0.5
	外縁幅	3.0	1.2
	晶 珠文帯の珠 文数	20 ?	21
外区	珠文帯幅	1.45	0.85
	巴文卷方 向	左	中
区区	内径	8.6	7.5
直径		17.7	12.3
型斗		三四次	三田文
遺跡名		国分寺	金山権現
報文番号		115	132

第29表 関連調査資料・中世軒丸瓦観察表

遺跡名 型式 瓦当	上弦幅。	府中・山 均整唐草 内 瓦 窯 文 跡?	綾川河床 均整唐草 文	九山西窯 均整唐草跡 文	九山窯跡 五連巴文	九山西窯 均整唐草 跡? 文	お藤天神 偏向唐草 3	安楽寺跡 連巴文	八十八場 唐草文 薬節堂
	弧深 下弦幅				-		3.0	-	
	重さ	7.1	5.8	5.25	5.1	5.4	5.9	3.9	4.1
	内区厚さ	3.5	3.1	2.95	2.95	4.0	4.0	2.6	1.3
	上外区厚き	2.3	1.4	0.95	1.15	6:0	1.0	0.7	1.55
	下外区 脇幅厚さ	1.3	1.3	1.35	1.0	0.5	6.0	0.6	1.35
分長		20.4+	14.3+	8.5+	11.8+	8.3+	22.1+	6.1+	4.2+
大様面	<u>の</u> 総	0.2	8.0	0.2	0.5	0.3	0.3	0.15	0.65
面平瓦部	<u></u> vu	3.7	2.5	4.35	3.3	2.95	2.3	2.7	2.1
		祖:7.0m以下の石英 凸: 青灰色 5B5/1 粒等をやや多量に含 四:暗オリーブ 灰色 2.5GY4/1	やや粗:30mm以下の 凸・凹: 灰白色 良好 石英粒等を若干量含 N7/0 恵質)	やや粗:2.5mm以下の 凸・ 石英粒等を若干量含 10YR2	密:俄砂粒合	やや祖:6.0mm以下の 凸:灰色 N6/0 石英粒等を少量含 灰色 7.5Y6/1	密:25mm以下の石英 凸・凹: 灰 白 色 粒等を少量含 10YR8/1	第:20mm以下の石英 凸:にぶい黄橙色 や や 骸 粒等を少量含 R色 2574/1	密: 20mm以下の石英 凸・凹:黄 灰色 良好 粒等を極少量含 25X4/1
色調		凸: 青灰色 5B5/1 凹: 暗オリーブ 灰色 2.5GY4/1	凸·凹:灰白色 N7/0	四: 黒 色 71	凸・凹:線 灰 色 良好 5G5/1~灰色 N5/0 恵質)		凸・凹: 灰白色 10YR8/1	凸:にぶい黄橙色 10YR7/4 凹:黄 灰色 2.5Y4/1	凸·凹:黄灰色 25Y4/1
焼成		良好 (須恵質)	良好(須 恵質)	良好(須 恵質)	_	四: 良好(須 恵質)	や や 軟 (須恵質)	やや 歌(上部類)	良好(瓦雷)
凸面調整		縦方向ケズリ	(須 粗いタタキ後瓦当 部ナデ?	縦方向ケズリ	須 粗いタタキ後瓦当 部横方向ケズリ	(須 粗いタタキ	や や 軟 粗いタタキ後瓦当 (須恵質) 部横方向ケズリ	粗いタタ 部ナデ?	(瓦 横方向ナデ
凹面調整		縦方向ケズリ後 横方向ケズリ後 一部ナデ	キ後瓦当 マメツ・布目?	布目痕後瓦当部 横方向ケズリ	布目痕後瓦当部 ケズリ	布目痕	布目痕後瓦当部 横方向ケズリ	キ後瓦当 布目痕後瓦当部 横方向ケズリ	横方向ナデ
側面調整		縦方向ケズリ	マメツ	縦方向ケズ リ	板ナデ?後 縦方向ケズ リ	縦方向ケズリ	縦方向ケズ リ		ナデ
現存率 産		破片	破片。	破片響	被片	破片	破片。	破片	破片
産地等 所		椒	十 瓶 山 鼓 樂跡縣	十 瓶 山 田村 窯跡群 旧巌	十 叛 山 田村 窯跡群 田蔵	十 叛 山 田 総跡群 旧	十 瓶 山 田村 窯跡群 旧巌	十 斯 丘 鎌 総跡群 簿	業
所藏先		鼓ヶ岡文庫	鼓ヶ岡文庫	田村久雄氏 旧藏	田村久雄氏 旧蔵	田村久雄氏 旧藏	田村久雄氏 旧藏	鎌田共済会 郷土資料館	鎌田共済会 郷土資料館

第30表 関連調査資料・軒平瓦観察表

報文番号	遺構名	銭種	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重曹	所藏先	備水
116	不明	和銅開珎	2.45	1.9	6.0	9.0	0.2	0.13	3.77 +	鼓ヶ岡文庫	
117	不明	萬年通寶	2.5	2.15	6:0	0.65	0.155	0.105	3.38	鼓ヶ岡文庫	
118	不明	神功開資	2.45	2.05	6:0	9:0	0.15	0.11	3.37	鼓ヶ岡文庫	
119	不明	神功開寶	2.6	2.05	0.7	0.65	0.14	0.1	3.47 +	鼓ヶ岡文庫	
120	不明	皇朱通寶	2.4	2.05	0.95	8.0	0.13	0.11	3.41	鼓ヶ岡文庫	
121	不明	皇朱通贊	2.35	2.0	8.0	9.0	0.135	80:0	1.20 +	鼓ヶ岡文庫	
122	不明	景徳元寶	2.3	1.9	8.0	0.65	0.13	0.1	2.97	鼓ヶ岡文庫	
123	不明	元符通寶	2.35	1.9	8.0	0.65	0.14	60'0	2.39	鼓ヶ岡文庫	
124	不明	照单元贊	2.45	2.1	6.0	0.75	0.14	60'0	3.15	鼓ヶ岡文庫	
125	不明	永楽通竇	2.45	2.15	0.75	9.0	0.17	0.095	3.56	鼓ヶ岡文庫	

第31表 関連調査資料・銅銭観察表

うだ(田村ほか 2008)。上述した小坂池窯跡例の2~3 基という窯数は、十瓶山窯跡群瓦屋の最小経営単位(以下、工房と称する)と理解することができる。7基の窯が分布する北条池支群でも、支群内部の窯の分布傾向から、2~3基の窯を単位にした2~3グループに分割できるようであり、小坂池窯と同規模の経営単位が復元できる。北条池支群の場合は、2~3工房が近接して同時操業していたか、1工房が比較的長期に場所を微妙に移動させながら、操業を継続したかのどちらかと想像される。詳細は今後の課題だが、北条池支群の各工房が同時操業していたとしても、十瓶山窯跡群では最大3工房によって、各瓦屋が経営されていたと推定される。

つまり、11~12世紀前葉までの十瓶山窯跡群の瓦屋は、各工房が2~3基の小規模な有株式平窯を築き、複数工房によって瓦が焼成されていた。基本的には各工房では単一型式の軒瓦を焼成したと考えられるが、複数型式の瓦が採集される窯跡も散見される(田村ほか2008)ことから、長期経営されていた工房も含まれるだろう。「寄せ集め」と表現される瓦の様相は、十瓶山窯跡群におけるこうした小規模分散型複数経営を背景としていたと考えたい。

既述した曼荼羅寺例のように、寺院からの伽藍修造のための大工派遣の申請は、国衙を経由して届けられ、 瓦工の出張製作が実現された。そして、出張製作により築窯された各瓦窯の規模と、十瓶山窯における各工 房のそれとが一致することは、工房を単位に出張製作 がなされており、それは国衙による瓦生産の管理単位 でもあったことを示している。

この時期には、讃岐国内の各寺院において、讃岐系瓦屋で焼成された瓦が消費されていることは事実である。その背景に、「弘法大師にまつわる聖地として、古代寺院の復興が讃岐国内で積極的に推進され」た(上原 2001)可能性も考えられる。しかし、問題はこの時期、讃岐国衙がどのようにして瓦屋を恒常的に経営するシステムを整えたのかという点にある。十瓶山窯の経営コストを、京都以外の顧客として、国内の寺院の需要によって賄っていたことは十分予想される。この点は、今後の課題としたい。

さて、こうした状況が一変するのが、12世紀中葉とされる、大型窯の導入により集約生産を意図したますえ畑支群と、従来型の小規模窯を群集させ、巴文系瓦に特化した集中生産を志向した丸山支群の出現である。

12世紀中葉以降、こうした2つの方向性を模索しながら、あるいは既述した個々の製品の規格品化、製作工程の省力化等も講じることによって、十瓶山窯跡群では徹底的な量産化を追及していく。

上原氏は、知行国制期の大規模集約型経営を「集中 管理」と呼び、この時期のますえ畑窯の製品や連巴文 軒平瓦が、讃岐国内の寺院で消費された形跡がないこ とを指摘した(上原2009)。しかしながら、この時期に 讃岐国内の寺院で、瓦の消費が断絶したわけではない。 巴文軒丸瓦は各地の寺院にあり、丸山窯と同文の連巴 文軒平瓦も少量ながら遠隔地での出土が報告され(安 藤 1967、片桐 1999)、既に安楽寺例を紹介したように、 京へ搬出された以外の型式の巴文系軒平瓦(これらの 製品には、胎土や焼成が、十瓶山窯跡群の製品と比べ て、大きく見劣りするものが多い)もみられる。これ らは採集資料が大半であることから、今後調査が進展 すれば、資料数が増加することは確かであろう。つまり、 この時期には、京都への搬出専用の製品と国内消費へ 振り向ける製品の生産が、異なる瓦屋で担われた、瓦 生産が二極化した可能性も想定される。

しかし、12世紀末~13世紀前葉頃を境に突如として、 十瓶山窯跡群での瓦生産は途絶える。その背景として は、京都での消費に大きく依存し、必要以上に生産能 力を肥大化させたことも要因と考えられる。

11~12世紀の十瓶山窯跡群における瓦生産の実態を、 以上のように整理した。いくつかの画期の存在とその 背景について若干の予察を示したが、より詳細な実証 的論証は今後の課題としたい。さらに、讃岐国衙の動 態との関係も、十分に意を尽くせなかった。

国衙による十瓶山窯跡の経営・管理に関しては、北 条池1号窯跡と庄屋原2号窯跡から出土した刻印須恵 器を素材に、考古学的な面からの中山尚子・佐藤竜馬 両氏による考察がある(中山・佐藤1998)。

両氏は、須恵器に刻印された「中」字は那珂郡を指し、「那珂郡に須恵器貢納負担の割り当てが行われ、そのチェックのために施印された」ものであり、チェック機関として国衙を想定した。そして、刻印が入念に消去されていることから、チェックは施印時、つまり土器焼成前になされたことから、貢納者は「窯場に関連する経費の負担もしくは製作以外の労働や国衙への労働に従事することで負担を賄っていた」ことを想定

検収システムの実際にまで踏み込んだ重要な指摘を なされたが、細分化された各製作工程単位での貢納負 担とその検収行為がありえたのかどうか、別の視点か ら今後検証する必要があろう。いずれにせよ、瓦生産 のみではなく、須恵器をも含めた十瓶山窯跡群全体の 生産・貢納システムの解明に向けた努力が今後も必要 である。(蔵本)

総括 第6節

地名調査を通じて、地名が秘める可能性を再認識す る一方、その限界性を強く痛感した。なかでも、国府 関連地名の多くが、この地に讃岐国府が所在していた という認識に基づき伝承されてきたという事実は、地 名が内包する潜在的な不安定性を如実に示すものであ り、地名と地形から推測した讃岐国府(国庁)の所在地 を発掘するという事業の根幹に係わる問題となる。今 年度の地名調査では採集地名と文献資料との比較検討 という操作によって、歪曲性の緩和に努めたが、その 限界性は否めない。採集地名の検証作業方法の模索と ともに、文献資料の掘り起こしが地名調査の今後の課 題となる。(松本)

集は進捗したが、堆積状況に関するデータの収集が不 十分である。また、地割の検討や水利慣行調査も進行 途上であり、地名調査や発掘調査の成果と相互に検討 を深めていくという当初の方針に対し、やや立ち遅れ の感がある。綾川の段丘の形成年代の確定とともに、 来年度以降に検討を深める必要がある。(木下)

発掘調査では、11世紀後半以降の調査地周辺の土地 利用の変遷の一端が明らかとなった。とくに、12世紀 後半~13世紀中葉を中心とした建物跡群が検出された 意義は大きい。この建物跡群の性格については、過去 の調査の再整理や他地域の事例との比較検討を必要と する。今後の課題としておきたい。

また、本稿では紹介できなかったが、古代の遺物と して、須恵器、土師器のほかに、緑釉陶器、灰釉陶器、 布目瓦等の小片が、微量ながら出土している。遺構は 確認されなかったが、これらの遺物からは、やはり周 辺に讃岐国庁が所在したものと考えられる。これまで の調査成果を踏まえるなら、讃岐国庁は今回の調査地 よりも、より東の地域に所在した可能性が想定される。 「香川県文化芸術振興計画」に示された、「菅原道真が 国司として執務をした」古代の「讃岐国府の政庁跡の 解明」については、今回の調査により、より地域を限 定する知見が得られたものと評価できる。(蔵本)

坂出市教育委員会編 2008 『坂出市内遺跡発掘調査報告書

佐藤竜馬 1993 a 「讃岐における古代の火葬墓 | 『財団法人香川県埋蔵文化財調香センター研究紀要 I |

佐藤竜馬 1993 b 「香川県土瓶山窒跡群における須恵器編年 | 『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』

```
地形調査は、地形分類に必要な地表面のデータの収
引用・参考文献
安藤文良1967「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8
安藤文良編 1974 『古瓦百選 (讃岐編)』美巧社
上田睦 1998 「摂河泉の高句麗式軒丸瓦 - 河内を中心として - 」『飛鳥時代の瓦づくり』 2
上田睦 1999「高句麗系軒丸瓦と渡来系氏族 - 出土瓦から見た河内の古代寺院と氏族3- 」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
上田睦 2007「飛鳥時代の河内国出土軒瓦」『河内古代寺院巡礼』 大阪府立近つ飛鳥博物館
上原真人 1978「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14
上原真人 2001「平安京周辺の平安時代後期瓦の様相 - 生産地認定法と在地消費をめぐって-| 『第4回摂河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け - 11・12
世紀の寺院の考古学的研究 - |
上原真人 2003「初期瓦生産と屯倉制」『京都大学文学部研究紀要』第42号
上原真人 2009 「摂関・院政期の京都における讃岐系軒瓦の動向」『平安京とその時代』 思文閣出版
宇治市教育委員会編『』
大川清 1990「『木工寮式』の「作瓦窯十烟」について」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』
大山真充 1999「香川県出土の皇朝十二銭」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』 Ⅵ
香川県教育委員会編 1982『讃岐国府跡 - 国庫補助による国府跡確認調査概要 - 』
香川県教育委員会編 1997『水道局第 3 投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 丸山窯跡』
香川県歴史博物館・香川県埋蔵文化財センター共同調査・研究班 2007「松山津周辺の景観」『四国村落遺跡研究会シンポジウム 港町の原像 -中世港町・野原と讃
岐の港町-|
梶川敏夫 1989「京都洛北における造瓦窯 - 栗栖野瓦窯跡の追加調査 - 」『古瓦図考』
片桐孝浩 1999「大水上神社所蔵古瓦について」『香川考古』第7号
川畑迪・渡部明夫 2008「坂出市新宮古墳出土須恵器について」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要IV』
木下良1977「国府の「十字街」について」『歴史地理学会紀要』19
金田章裕 1995 「国府の形態と構造について」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第63集
蔵本晋司 2005「中世の考古学」『さぬき国分寺町誌』
小林謙一・佐川正敏 1989「平安時代〜近世の軒丸瓦」『法隆寺昭和資財帳調査概報 10 伊珂留我』小学館
坂出市教育委員会編 1992『坂出市内遺跡詳細分布調査報告書
                                - 平成3年度国庫補助事業報告書 - 』
坂出市教育委員会編 1993 『坂出市内遺跡発掘調査報告書 -平成4年度国庫補助事業報告書-』
坂出市教育委員会編 1995『坂出市内遺跡発掘調査報告書
                              - 平成6年度国庫補助事業報告書 - 』
坂出市教育委員会編 1996『坂出市内遺跡発掘調査報告書
                             - 平成7年度国庫補助事業報告書-』
坂出市教育委員会編 2002 『坂出市内遺跡発掘調査報告書
                             - 平成 13 年度国庫補助事業報告書 - 』
坂出市教育委員会編 2003 『坂出市内遺跡発掘調査報告書
                             - 平成 14 年度国庫補助事業報告書 - 』
坂出市教育委員会編 2004 『坂出市内遺跡発掘調査報告書
                             - 平成 15 年度国庫補助事業報告書 - 』
坂出市教育委員会編 2005 『坂出市内遺跡発掘調査報告書
                             - 平成 16 年度国庫補助事業報告書 - 』
```

- 平成19年度国庫補助事業報告書-」

佐藤竜馬 1997「7世紀讃岐における須恵器生産の展開| 『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V』

佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会

清水昭博 2000 「高句麗系軒丸瓦の分布とその背景 -豊浦寺同系瓦を中心として-」『古代文化』第52巻10号

新宮史編集委員会編 1993『新宮史』

高松市教育委員会編 2007『特別史跡讃岐国分寺跡・如意輪寺窯跡・国分中西遺跡・兎子山遺跡』

高松市教育委員会編 2009 「高於市指定史跡 片山池窯跡群 — 確認調查報告書 — 高松市教育委員会編 2009 「高於市指定史跡 片山池窯跡群 — 確認調查報告書 — 高松市歴史資料館編 1996 『第 11 回特別展 讃岐の古瓦展』

田村久雄・渡部明夫・渡邊蔵 2008 「陶(十瓶山)窯跡群の瓦生産について(1) - 瓦窯跡の分布 - 」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』 IV 中山尚子・佐藤竜馬 1998 「北条池 1 号窯跡採集の刻印須恵器 ~十瓶山窯跡群の須恵器とその検討課題(3)~」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要VI』 連本和博 1993 「讃岐における白鳳寺院出土瓦の研究 -川原寺式軒丸瓦の系譜の作成を通して-」『香川県自然科学館研究報告 第 15 巻』

花谷浩 1998「大和 飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」『飛鳥時代の瓦づくり』 2

羽床正明 1980「『続日本紀』大宝三年三月丁丑の制と讃岐綾氏」『文化財協会報』76

羽床正明 1985 「保の成立についての一考察 -陶・円座両保を中心に-」 『香川史学』 第 14 号藤井直正 1978 「讃岐開法寺考 -国府と古代寺院-」 『史迹と美術』 第 485 号

松浦正一1968「歴史時代」『香川県文化会館郷土資料室列品目録 第1期』

松浦正一『香川県貨幣骨壺出土地表』(県立ミュージアム蔵 松浦正一文庫 809 番)

松原弘宣 1988『古代の地方豪族』吉川弘文館

山崎信二 2000 『中世瓦の研究』 奈良国立文化財研究所

横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について -型式分類と編年を中心として-」『九州歴史資料館研究論集』 4

森浩一 1968「南海道の古代窯業遺跡とその問題」『日本歴史』第 237 号

渡部明夫 1980「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』

渡部明夫 1998「考古学からみた古代の綾氏(1) −綾氏の出自と性格及び支配領域をめぐって−」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』 Ⅵ 渡邊誠 2007「如意輪寺窯跡採集軒瓦の時間的位置づけとその意義」『特別史跡讃岐国分寺跡・如意輪寺窯跡・国分中西遺跡・兎子山遺跡』高松市教育委員会

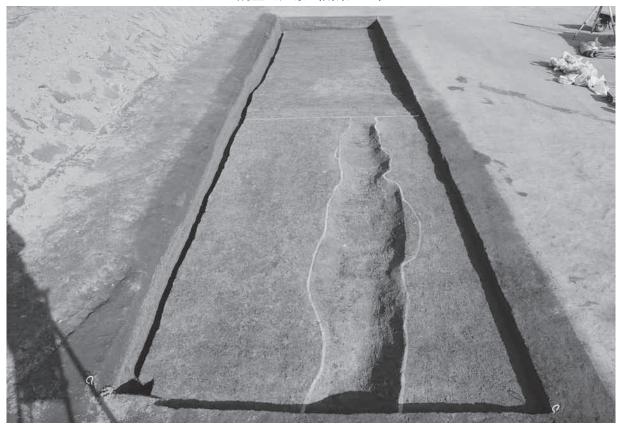


讃岐国府跡付近空中写真(上が北、国土地理院 1962 年撮影)

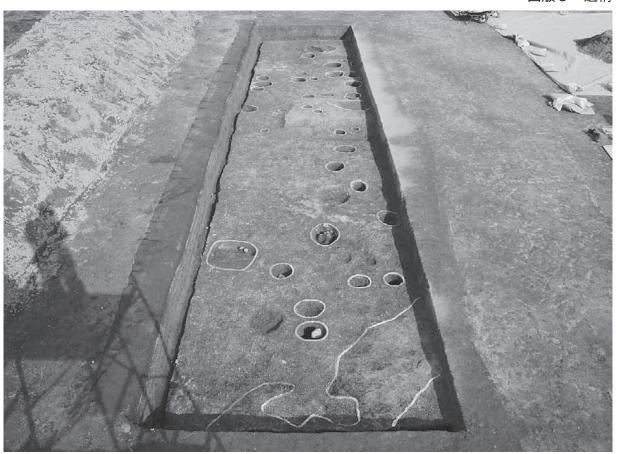
図版2 遺構



調査地遠景(南東より)



第1遺構面全景(西より)



第3遺構面全景(西より)



第4遺構面全景(東より)

図版4 遺構



南谷に残る掘割状の平坦地地形 (西より)



SP10 遺物出土状況(南より)



SP08 遺物出土状況(北より)



SK02 遺物出土状況(南より)



現地説明会風景



香川県埋蔵文化財センター年報

平成21年度

平成22年9月10日 発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター

〒 762 − 0024

香川県坂出市府中町南谷 5001 番地の 4

電 話 (0877) 48 - 2191

FAX (0877) 48 - 3249

印 刷 四国工業写真株式会社